女が、この旅館の帳場書記が、バン切り庖丁で自分の進路とブリンス・アリバートのそれを阻止しようとしてゐると思ふと、覺えずもう可笑しくなつて來たのだ。マッチを擦つて、再た角燈を點け、もう一度スペンサー孃へ立ち向つた。

「再たやりますから、」飽くまで決心してゐるといつた調子で彼女は言つた。

「や、そりややれまいよ、お前、」ラックソールは言つた、して、ピストルを取り出し、打金を立ててその手を上げた。

「お前のその玩具をお置きなさい。」斷然と彼は言つた。

「否、置きません、」彼女は答へた。

「ぢや、射つから。」

彼女は固くその口を結んだ。

「ぢや、射つから。」彼は繰返した、「一——二——三。」

ズドン、ズドン！　彼は二度發砲した、わざと彼女を外れるやうにして。

スペンサー孃は少しもひるまなかつた。ラックソールはとても喫驚りしてしまつた——前夜ネラが彼女を愛した際の見苦しいあの怖え方と今の樣子を對照することが出來たとしたら、千倍もまた喫驚したかも知れない。

「少しばかりお前にも膽力があるね、」彼は言つた、「あつたつて足しにはならないが。何で我々を通

さんのだ？」

實際のところ、その膽力こそまつたく彼女に持ち合せのない物であつたのだ、彼女は唯、一つの恐怖を他のそれの次位においてゐるだけなので。ラックソールのピストルは、とてももう怖いに違ひない、が、何か他の物を彼女は一層怖れてゐるのだ。

「何で我々を通さんのだ？」

「どうしても通されません、」悲しさうに聲を震はして彼女は言つた。「トムからちやんと賴まれてゐますから。」

それだけのことであつた。皺くちやなその顏を傳つて、涙がはら〳〵落ちて來るのが見られた。セオドア・ラックソールは輕いその外套を脫ぎ出した。

「こりや成程、君に對して外套を脫がなくちや濟まなかつたね、」彼は言つた、して、殆ど微笑をさへ見せたのであつた。してから急に、早速の身の動きで、ひらりとその外套をスペンサー孃の肩へ投げかけ、いきなり飛びついてその兩腕を捉へた、ブリンス・アリバートも側から手傳つて。

彼女の腕きは止んだ——彼女はもうしてやられてしまつた。

「これで宜しい、」ラックソールは言つた、「全體あのピストルは使ふとこぢやなかつたのです——勿論眞劍には。」

もう抵抗もしない彼女を二人は階上の高層い方へ伴れて行つて、寢室へ監禁した。まるでもう正體

もなく、彼女は寢臺へ寢てしまつた。
「さあ、これからユージエンの方へ、」プリンス・アリバートは言つた。
「先づ家宅搜索をした方が可いぢやないでせうか？」ラックソールは注意した、「我々が今どういふ立場にゐるか、知つておくのが安全でせうから。伏勢といつたものに出られては堪りませんからね。」
プリンスは同意した、して、二人は頂上から地下室に至るまで、隅なくその家を搜索したが、何人もゐなかつた。そこで、表と居間の觀音開きの窓へ錠を下しておいて、再び穴倉の方へ向つた。
此處でまた新しい障害が現はれて來た。穴倉の扉には、勿論錠が下りてゐた、鍵のあるらしい樣子も更になかつた、して、それはとても重い扉であつた。穴倉の鍵を請求するために、スペンサー嬢が幽閉されてゐる寢室へ戻つて行かなければならなかつた。彼女はまだ身動きもせず、寢臺の上へ寢てゐた。
「トムが持つてゐます、」微すかに二人の質問に答へた、「トムが持つてゐます、誓つて申します。間違ひのないやうに持つて行つたのでして。」
「ぢや、どうしてお前の捕虜を養ふのかね？」鋭くラックソールは問ひ詰めた。
「あの格子から、」彼女は答へた。
二人は覺えず身震ひした。何うも本當のことを言つてゐるやうに思へたので。これで三度また彼等は穴倉の扉のとこへ行つた。ラックソールがぶつかつて見たが、たかゞ搖れる位なもので、どうも

ならなかつた。
「二人で一緒にやつて見ませう、」プリンス・アリバートは言つた、「さあ！」がちやつと來た「もう一度、」プリンス・アリバートは言つた。もう一度がちやつと來て、上部の蝶番ひが外れた。餘はもうわけなかつた。破はれた扉を踏み越えて、二人はプリンス・ユージエンの牢屋へ這入つて行つた。
囚人は未だ椅子に坐つてゐた。扉をぶち破はす凄じい音や騷ぎも、昏睡から彼を覺まさないやうだつた。が、プリンス・アリバートがドイツ語で彼に話しかけると、彼は叔父の方を見た。
「我々と一緒に來ないかね、ユージエン？」プリンス・アリバートは言つた、「もう此處に留つてゐる必要はないんだから。」
「放つておいてくれ、」不思議にも左樣答へるのであつた、「放つておいてくれ。一體何用なので？」
「この窮境から君を救ひ出すために、我々はやつて來たのです、」溫和にアリバートは言つた。ラックソールは側へ立つてゐた。
「その男は誰かね？」鋭くユージエンは言つた。
「自分の友人のラックソール氏です、イギリス人の——といふより、アメリカ人の——この方にはもう我々は一方ならぬ御厄介になつてゐるので。さあ、一緒に行つて食事をしようよ、ユージエン。」
「いや、行かぬ、」頑强にユージエンは答へた、「自分は此處で彼女を待つてゐるのだ。君はまさか、誰かゞ自分の意志に反して自分を此處へ止めておくと思ひはすまいね？　重ねて言ふが、自分は彼女

を待つてゐるのだ。來ると言つてゐたので。」
「彼女とは誰かね？」彼の意を迎へてアリバートは訊いた。
「彼女！　君知つてるだらうがね！　君が知らないつてことは、勿論僕は忘れてしまつた。訊いてはいけない。探りを入れないでくれよ、アリバート叔父。彼女は赤い帽子を被つてゐたのだ。」
「彼女のとこへ連れて行つて上げるよ、ユージエン。」ブリンス・アリバートは相手の肩へその手をかけた、が、ユージエンは劇しくそれを振り離し、起ち上つて、それから再た、どつかと坐つてしまつた。
アリバートはラックソールの方を見た、して、二人ともブリンス・ユージエンの方を見た。ブリンスの顏はぱつと赧くなつてゐた、して、左の瞳が右よりは餘計にふくれてゐるのにラックソールは氣づいた。じろ〳〵彼は見たり、妙な片言を喋つたり、ぶつ〳〵不平を言ふかと思ふと、おい〳〵また泣き出すといふ風であつた。
「箍がゆるんでゐるのです、」ラックソールは英語で耳打ちした。
「靜かに！」ブリンス・アリバートは言つた。「英語は解るのですから。」が、ブリンス・ユージエンはこの短い問答を一向氣に留めなかつた。
「どうかして、二階へお連れした方がいゝでせう、」ラックソールは言つた。
「左樣ですね、」アリバートは同意した、「ユージエン、赤い帽子の婦人は、君が待つてゐる婦人は、

二階にゐるんです。君に來て貰ふやうに我々を寄したのです。君來ないかね？」
「こりや驚いた！」一種力のない怒氣を帶びて、哀れな男は叫んだ、「何で前に左樣言つてくれなかつたのかね？」
彼は起ち上つて、アリバートの方へよろけて行つた、して、眞逆さまに床の上へ倒れてしまつた。卒倒したのである。二人は彼を起し、石の段々を擔ぎ上げて、注意に注意をして、そうつと長椅子の上へ彼を寢かした。奇妙に鼻から呼吸をし、眼は閉ぢ、指は縮んで、彼は寢てゐた。折々痙攣が全身に起つた。
「誰か一人、醫者を迎ひに行かなくてはなりませんね、」ブリンス・アリバートは言つた。
「私が行きませう、」ラックソールは言つた。その刹那に、觀音開きの窓を急しく叩く音がした、して、ラックソールもブリンスも、喫驚して四邊を見廻した。若い娘の顏が大きな窓硝子にひつついてゐた。それはネラの顏であつた。ラックソールは掛金を外した、して、彼女は這入つて來た。
「漸く探し當てましたわ、」彼女は輕く言つた、「言つて下さればよかつたのですに。私、どうしても眠れなかつたんです。貴方方がお休みになつたかどうか、旅館の者に訊いて見たところ、未だといふことなので、私、そつと拔け出て參つたんです。何處にいらつしやるか私大抵察したんですわ。」この亂暴はまた一體どうしたことと、ラックソールは彼女の言葉を疑つたのであつたが、無頓着な身振りで彼女はそれを停めてしまつた。「こりやどうしたので？」彼女は長椅子の上の姿を指さした。

「私の甥のプリンス・ユージエンで、」アリバートは言つた。
「怪我でもされたので？」冷靜に彼女は訊ねた。「でなければ宜しいんですが。」
「御病氣なのです、」ラックソールは言つた、「頭腦が惡いので。」
ニューヨークで修め得られる最高の看護科を踏んで來た若い娘の、老練な動作を以て、ネラは無感覺なプリンスを診はじめた。
「腦膜炎を起されたのです、」彼女は言つた、「それだけのことです、御大切になさらなくては。とても繼つたこの家にも、何處かに一つ寢臺があるか御存じで？」

第十八回　夜中に

「どうあつてもお動かしになつてはいけません、」その眼が眼鏡越しにとても皮肉に覗いてゐるやうに見える、色の黑い、小男のベルギーの醫者は言つた、して、可成きつぱりと彼はそれを言つたのである。
この發表は却つて一同の方針の定めることになつた。醫者の來ないうちに、現に同じことを言つたネラに取つては、これは確かに職業上の大成功であつたのだ。醫者を迎ひに行く前に、大分の議論が行はれたのである。プリンス・アリバートは、この事件全體をどうしてもこの三人限りの深い祕密としておきたいといふ意見であつた。そこまではセオドア・ラックソールも同意であつたが、進んでま

た、どんな危險を冒さうとも、病人を直ぐさまイギリスへ移さなくてはいけないと彼は注意した。自分の旅館の方がずつと安心してゐられよう、どのやうな場合が起つて來ようとも、ずつと始末がしよいだらうといふ考へを、ラックソールは有つてゐた。そんな考へは駄目だといふ、ネラの意見であつた。素人看護婦といふその資格で、プリンス・ユージエンは貴方がたお二人のお思ひになつてゐるより、ずつとお惡いのだと斷言し、この家を絕體に專有し、プリンス・ユージエンが恢復期に向はれるまでその專有を續けなければいけないと主張した。
「でも、あのスペンサーの女郎はどうしたものかね？」ラックソールは言つたのであつた。
「あのままにしてお置きなさい。ずつと幽閉しておくのです。そして、外來者は一切寄せつけないやうにしなくてはいけません。ひよつとジユールが戻つて來たら、這入るなら這入つて見ろと、唯言つてやるんです——それだけのことで。貴方がた御二人がおいでなのですから、ひよつと歸つて來るかどうか、前に此處にゐた者に注意し、私が病人を御看護申し上げてゐるうち、スペンサー孃もへ注意して下さらなくてはいけません。それにしても、何は兎も先づお醫者をお呼びにならなくては。」
「醫者ですつて！」びつくりして、プリンス・アリバートは言つたのであつた、「呼ぶとなると、その醫者に向つて、多少とも拙い說明をしなくてはならないでせうね？」
「少しもそんなことは！」彼女は答へた、「そんな理由ありませんもの。オステンドのやうな土地では、お醫者はなか〳〵氣をきかして、下らないことなど訊きはしません、ちやんともう察してゐて、

詮索立てなどするものでありません。それにまた、貴方は甥御に死んで貰ひたいのですか？」

その場の羽目を賢しくも娘がよく解してゐるには、二人とも幾分びつくりしてしまつた、して、召使のやうに彼女の命令を奉じるといふことになつて來た。早速お醫者を探しに出かけて下さいと、彼女は父に言つた、して、彼は出かけた。プリンス・アリバートにも、彼女は他の命令を發した、して彼は早速にそれを實行した。

翌日の夕方になると、萬事もう滞りなく行はれた。醫者の往來も五六回あり、醫藥も屆いて來て、病氣の前途も可成り樂觀的になつて來た。婆さんを一人連れて來て、炊事や掃除をさせるやうにした。どう處置するか決定するまで、スペンサー孃は人目に觸れぬ屋根裏へ閉ぢ込めて置いた。して、戸外の者も一人として何も問ひ訊ねする者はなかつた。某町といふその通りに住んでゐる人達は近所の者の不思議な振舞、合點の行かね出沒やら、不思議な往來に、始終もう慣れてゐるに違ひなかつた。この氣丈な、して活動的な三人——ラックソールとネラ、してプリンス・アリバートこそ——却つて正當なその家の住人であるかも知れないと見てゐたのであらう、見たところ、別段にその反證もないのであるから。

三日目の午後になつて、プリンス・ユージエンはめつきり重態になつて來た。ネラは、前夜も、またその日もずつと通して看護をしてゐたのでしつた。父は午前の中をホテルで過し、プリンス・アリバートが番をしてゐた。二人同時にその家を去るといふことはなく、夜は必ずその一人が、用心棒と

してその任務に當つてゐた。この日の午後、プリンス・アリバートとネラは一緒に、患者の寢室で坐つてゐた。醫者は今歸つたばかりである。セオドア・ラックソールは、階下でニューヨーク・ヘラルド紙を讀んでゐた。プリンスとネラは、裏庭に臨んでゐる窓の近くにゐた。ポーゼン國のプリンス・ユージエンといふやうな、歐洲でも高貴な御方の玉體を休めるには、それは如何にも見すぼらしい、小さな寢室であつた。奇妙なことに、ネラもその父も熱心な民主主義者ではあつたなれど、熱病に冒されてゐるプリンスの尊嚴には幾分斯う打たれてゐるやうな氣味であつた——これまでアリバートから受けた印象とはまた打つて變つて。今此處に、自分達の援護の下に、自分達に取つて全く新しい、今まで出會した何物とも全然變つた、一種まるで珍しい御方がゐられるやうに、二人とも感じたのであつた。夢現の狀態にある彼の身振り、語調すら、卒爾ながら何處か斯う謙遜するやうな命令の容子——慇懃と傲慢とを程よく具へた、堂々たる風格を交へてゐるやうであつた。ネラはといへば、彼の下着の袖にある王冠の上にあしらつた、美しいEの文字と、その蒼白い、痩せ細つた手にある認印つき指輪に先づ打たれたのであつた。結局、斯うした些細な外面の表章こそ、少くとも他の一段と深い、が、さして眼につかぬ意味合ひのものに劣らぬ效果のあるものなのである。ラックソール父子はまた、プリンス・アリバートがその甥に對する態度をよく注意してゐたが、それは飽くまで長者らしもあり、同時にまた、何處までも深く崇めるといふ風であつたのだ、種々な事があつたに係らず、プリンス・アリバートは飽くまでその甥を我が君主、主上として仰ぎ、自然にして避くべからざる尊嚴

に包まれた御方として仰いでゐることを、明かに示したのであつた。この態度は、初めのうちは、アメリカ人に取つては、如何にも虚偽で、空なものに思はれた、わざと假装してゐるやうに思へたのであつた、が、次第に父子は、自分達が間違つてゐること、アメリカこそ彼の「君主國的迷信」を捨てしまつたかも知れぬが、その「迷信」は依然として、世界の他の部分に於て根強く生存してゐることを知るやうになつたのである。

「貴女とラックソール氏には、實にもう一方ならぬ御世話になりました、」二人漸く默つて坐つてゐた後、如何にもしんみりとプリンス・アリバートは言つた。

「何でですか？　どういふ風にですか？」何氣なしに彼女は訊いた。私たち自身でこの事件に興味を有つてゐるんですわ。もと〳〵私達の旅館で始まつたことなんですもの――それをお忘れになつてはいけませんよ、プリンス。」

「忘れません、」彼は言つた、「私何にも忘れません。それにしても、自分が貴女方を一種奇妙な掛り合ひへ誘き入れたやうに思はないわけにはいきませんね。何で貴女もラックソール氏も、此處にゐられるのでせう――歐洲へ遊びに來てゐるといふことになつてゐる貴女方が！　――心得違ひの自分の甥に聯關して、私が醜聞沙汰を避け、假りにも評判されることを避けたいといふ唯そのために、あらゆる種類の迷惑と、あらゆる危險に委ねられてゐる、他國の見ず知らずの家に隠れてなどゐられるのでせう？　ポーゼン國の當主が公然世間の前に面目を失はうとも、貴女がたに取つては何でもないんです。ポーゼン國の王位が歐洲の笑ひ草になつたにしても、それが貴女がたに取つて何でありませう？」

「私、本當に分らないんですわ、」心にくゝもネラは微笑つた。「でも、我々アメリカ人といふものは何にせよ一旦手をつけたことは、飽くまでそれをやり遂げるといふ習慣を有つてゐるんです。」

「あゝ！」彼は言つた、「どうこれが終るか、誰にも分つたものぢやありません。斯うした種々の我我の苦勞、我々の心配、我々の注意もみな、徒勞に歸してしまふかも知れません。ユージエンが此處に斯う寢んでゐるのを見彼が回復するまでは、今までのその身の上話も聞かれないと思ふと、確かにもう氣が狂ひさうになつて來ます。それさへ唯分つたなら――彼がどういふことを打ち明けるかが分つたなら、いろ〳〵と事を調へ、障害を除き、將來の用意もしてゐられませうに。それが今は出來ないんです。確かにもう自分は氣が狂ひさうになつてしまひます。何事か貴女の身の上に起つたなら、ラックソール孃、自分はもう自殺してしまひます。」

「でも、そりや何でまた？」彼女は問ひ糺した、「假りに若し、あの、何事か私の身の上に起るとして――ところが、そんな筈もないんですから。」

「何故といつて、自分が貴方を引き入れたからなので、」彼女の方を見て彼は答へた、「貴女に取つては何でもないんです。貴女は唯親切にして下さるだけで。」

「どうしてお分りなんですか、それが私に取つて何でもないといふことが？」素早く彼女は訊いた。

恰度その時、病人は苦しさうに身動きをした、して、ネラは急いで寢臺へ寄り添ひ、彼を慰めた。枕頭から彼女はプリンス・アリバートを見渡した、して、彼もまた彼女の晴れやかな、興奮した眼光に報いた。彼女は旅行服を身につけてゐた、その上へ大きな、眞白な、ベルギー風の前掛をかけて。疲勞と不眠の大きな、黑い環が彼女の眼を隈取つてゐた、して、プリンスに取つては、彼女の頰はこけて、痩せてゐるやうに思へた、彼女の頭髪は厚く顳顬の上へかゝつでゐた、半ば耳を隱して。彼女の問ひ訊ねに對して、アリバートは別に返事もせず、沈みかへつて、ぢいつと彼女に見入つてゐるだけであつた。

「私これから休まうと思ひますわ、」やがて彼女は言つた、「醫藥のことは御承知でございませうね。」「ゆつくりお休みなさい、」彼女のために靜かに扉を開けながら言つた。して、彼はユージェンと二人限りになつてしまつた。

その晩眠ず番をするのが彼の番であつた、今に未だ或る變つた急の訪問とか、ジュールからの猛襲とか、その他、何かの活動が半ば期待されてゐたのであつたから。ラックソールは地層の客間へ寢んだ。ネラは表二階の寢室を占めてゐた、スペンサー孃は屋根裏に幽閉されてゐた。その婦人は不思議にも溫和しく、神妙にしてゐた。ネラから食物を受け、何にも問ひ訊ねなどしないで。して、手傳ひの婆さんは場末の港町の自分の家へ歸つて行つた。何時間も何時間も、アリバートはぢつとおし默つて甥の病床に侍してゐた、機械的にその用を足し、折々またぢつと呆然とした、苦しさうなその顏に

見入つた、それが祕してゐる祕密をば、その假面から手ぐり出さうとして。せめて唯だ半時間でも、せめて唯十五分間でも、プリンス・ユージェンと合理的な言葉が交はされたなら萬事がもう明かになり、差しつかひなく事が運ぶであらう、して、その合理的談話なるものは病氣が順調に徹退するまでは、ユージェンとして絕對に不可能であるといふ考へのために、アリバートはもう甚く苦しめられた。一分々々と過ぎて、次第に夜半に近づいて行くにつれ、何時も危篤な病人を取り卷くやうに思へる、緊張した、刺戟の强い空氣のために、妙に神經質になつて來て、愈よ以つて何とはなしの、恐しい心配の餌食となつて行くのであつた。萬一起らうといふこの上なしの不幸な出來事へと、物狂ほしくも彼の心は注がれるのであつた。生憎くと若しユージェンがこの病床で死ぬとしたら、どういふ事が湧いて來るだらう——どうそれをポーゼン國竝びに皇帝陛下に說明したら可いであらう、どう自分は身の明かしを立てたら可いであらうと思つた。殺害の罪で訊問を受け、宣告を受けて（假りにも尊い王族である自分が！）斷頭臺へ曳かれて行くところを彼は見た……一世紀以上ももう、歐洲では類のない場面である……そこで、彼はまた新たに病人の方を見た、して、苦しさうなその顏の、一々のだれた面貌に死そのものが讀めるやうに彼は思つた。も少しでもう聲を立てゝ叫ぶとこであつた。妙にぶん〳〵唸るやうな音が、耳へ聞えて來た。彼はぎよつとなつた——町の時計が十二時を打つたに過ぎなかつた。が、また別の音が聞えて來た——扉のとこで不思議に足を引きずるやうな音が。彼は聽き耳を立てた、それから椅子から跳び上つた。今度も何でもない！　何でもない！　が、彼はま

た扉の方へ引かれるやうに感じた、して、とても長い間をおいてから、彼は出かけて行つてそれを開けた、胸を劇しく鼓動させながら。扉の前の靴こすりの上へ、ネラはどうつと倒れてゐた。彼女はちやんと着物を着たまゝでゐた。が、見たところ意識を失つてゐるやうであつた。彼は纖弱いその體を抱き、彼女を起して、爐の側の椅子へ連れて行き、その上へ寢かした。ユージエンのことなどはすつかり忘れてしまつた。

「どうしたんです、私の天人？」彼は囁いた、それから彼女に接吻した——二度も彼女に接吻した。彼は唯彼女を見てゐるぎりであつた、どう彼女を救つて可いか分らなかつた。

やがて、彼女はその眼を開いた、して、溜息をついた。

「私、何處にゐるのです？」わな〳〵聲を震はして、茫然と彼女は訊いた。「あゝ！」漸く彼と氣づいて言つた、「貴方ですか？　私、何か下らないことをしまして？　私、氣絕しまして？」

「何事か起つたのですか？　病氣にでもなつたのですか？」氣づかはしさうに彼は訊いた。ぢいつと彼女の手を握りしめたまゝ、彼はその脚下に跪いてゐた。

「私、寢臺の側にジユールがゐるのを見たのです、」彼女は呟いた、「確かに見たに違ひないんです、私の方を見て彼は笑ひました。私、着物を脱いではゐなかつたのです。びつくりして、私は跳び立ちました、が、彼は行つてしまひました、そこで、私は階下へ駈けて來たんです。」

「夢を見てゐられたんです、」彼は彼女を慰めた。

「左樣でしたかしら？」

「それに違ひないんです。少しも物音は聞えませんでしたから。何人も這入つて來た筈がないんです。でも、何ならあの、ラックソール氏を起しませう。」

「私、夢を見てゐたのかも知れませんね、」彼女は承認した、「何てまあ下らない！」

「貴女はすつかり疲れてゐたんです、」今に未だ無意識に、彼女の手を握つたまゝで、彼は言つた。

二人は互に顏を見合せた。にこりと彼女は彼を見て微笑つた。

「貴方私に接吻なさいましたのね、」彼女は急に言つた、して彼は眞赤になつて、彼女の前へ立ち上つた。「何で私に接吻なさつたのです？」

「あゝ！　ラックソール孃、」彼は呟いた、大急ぎでその言葉を吐き出して、「容して下さい。とても容せないことではありますが、どうぞ容して下さい。全くもう感情に壓服されてしまつたのです。何をしてゐるか夢中だつたのです。」

「何で私に接吻なさつたのです？」彼女は繰り返した。

「何故といふと——ネラ！　私は貴女を愛すので。それを言ふだけの資格は、自分にはないのでせうか？」

「何でそれを言ふ資格が貴方にないので？」

「ユージエンが若し死ぬとすると、自分はポーゼン國に義務があることになるのです——その當主と

なるわけで。」

「ところで！」とても美事な自信を有つて、落着き拂つて彼女は言つた、「父には四千萬の財産があるのです。貴方は位をお譲りにならない？」

「あゝ！」彼は低い叫びを洩らした、「貴女は無理に斯うしたことを言はせるのですか？　ボーゼン國に對する義務は私は避けることは出來ないのです、して、ボーゼン國の當主は、どうあつてもプリンセスでなければ結婚出來ないのです。」

「でも、プリンス・ユージエンは、きつともうお助かりになります、」きつぱりと彼女は言つた、「して、殿下が若し御存命とすると――」

「すれば、私は自由の身になれませう。貴女を私のものとするためには、自分はもう一切の權利を抛ちます、若しも――若しも――」

「若しも何ですつて、プリンス？」

「貴女が若し私の申出でをお受け下さるならば。」

「ぢや、私の資産に不足はないので？」

「ネラ！」彼は彼女の方へ俯向いた。

すると、がちやゝ硝子が破はれる音がした。アリバートは窓のとこへ行つてそれを開けた。星月夜の暗がりに、彼は梯子が家の裏側へ掛けられたのを見た。庭の先端の方に跫音が聞えたやうに彼は

思つた。

「ジユールだつたのです、」彼はネラに向つて叫んだ、して、一言も言はず、屋根裏へ駈け上つて行つた。屋根裏は空虛であつた。スペンサー孃は不思議にも消え失せてしまつたのだ。

第十九回　グランド・バビロンに於ける王族

グランド・バビロンの貴賓室なるものは、旅館界に於て、して、實際また他の世界に於ても、それ特有の風に於て、全く比類なきものとして有名なのである。ドイツの宮殿の或るものの如き、殊にあのヴーリア州の狂王ラットボッグのそれの如き、その豪奢と途方もなく唯玩具のやうに財を費してある點では、優に此方を蹴落すやうな室やら宮殿やらを備へてゐるかも知れない、が、此方より一層調つた、一層完全した、一層人の眼を惹くやうな、また――これも等しく重要のことである――一層居心地が好いといふのは、何處へ行つても、ニューヨークの第八街路へ行つてさへも、到底ないものなのである。貴賓室は、控室、客間卽ち謁見の間、食堂、黃の客間（王族方がその親しき方々をお迎へになる）圖書室、それから寢室の六間で成り立つてゐるのであるが、最後のその寢室だけへは、我我も既に案内を受けて知つてゐる次第である。六間のうちで一番と重要で、一番と莊嚴であるのは勿論あの謁見室で、テムスの大河と彈丸製造塔、また西南鐵道の高い信號機を一目に見渡す、とても素晴らしい眺望を有つた、長さ五十呎、幅四十呎の一室なのである。この室の裝飾は主としてドイ

ツ風の趣味で出來てゐる、その室へ納まる王族方六人のうちの四人までは、チユートン系の血統の方方であるもので。が、その華ともいふべきは、何といつてもそのフランス式の天井で、ロアール河畔なるさる有名な宮殿からそつくりと此處へ移した、名匠フラゴナーの傑作なのである。壁は櫛材の鏡板で成つてゐ、天下一品といふ大陸のそれを手本に摸した、アラス織の布で出來た腰羽目がついてゐる。敷物は一枚織になつてゐて、この上なし立派なトルコ織古代の逸品であるが、手許不如意のルーマニアのプリンスからフエリックス・バビロンが手に入れたものである。今は電燈が裝置してある銀の枝附大燭臺は、ライン地方から來たもので、それ〴〵皆由緒のあるものである。御椅子は——結局同じなのであるけれど、玉座と呼ぶのは禮式に外れるので——オーストリアのさる都からナポレオンが分捕つたもので、フランスの某蒐集家の賣立の際、フエリックス・バビロンが買ひ取つたものである。室の隅々には、十六世紀のドイツ磁器である、巨大な、グロテスク模樣の花瓶が立つてゐる。これは一八七五年の、フランスとの葛藤に連關して、ロンドンへ最初の御微行の際、御出立に臨んでサルヘルム一世からフエリックス・バビロンへ御下賜になつたものである。謁見室には、唯一つの繪畫がある。それはブラジル國皇帝であつた、不幸な、が、氣高いドン・ペドロの肖像である。ドン・ペドロから親しくフエリックス・バビロンへ賜はつたもので、帝王榮華の夢もいつかは覺めることがあらうも知れぬ由をそれとなく警告するために、寂しくもまた嚴然と其處に懸つてゐるのである。一八八七年の女王即位五十年祭の折この貴賓室へ納つたさるプリンスは——その時グランド・バビロンに

は、七人の王族方が御宿泊になつてをられたので——その肖像は是非取り外して貰はなければならないと、フエリックスに交渉に及んだのである。フエリックスは遺憾ながらその議には參り兼ねますと、お斷り申し上げたところ、プリンスは早速に他の旅館へお移りになり、その宿で二萬といふ寶石類を盗られてしまつたといふことである。グランド・バビロンの貴賓室なるこの謁見の間こそ、人々がそれを知りさへしたら、確かにロンドン名所の一つに違ひない、が、つひぞそれは公開されたことがなく、その偉觀に就いて旅館の召使達に訊ねると、トルコ織の敷物は、そのクリーニングだけに五百金の費用を要すとか、大花瓶の一つは、或る晩四人の若い姫君とバルカンの王樣に、その侍從武官とで目隱しの遊びをして大騒ぎをやつた際、餘りに手荒な扱ひをしたもので、臺のところに大龜裂が入つてゐるとか、途方もなく下らない話ばかりするのである。

とても素晴らしいこの一室の窓際の一つに、七月下旬のある午後、ボーゼン國のプリンス・アリバートは立つてゐた。イギリス風のお定りのフロックコートといふ、五分の隙もない服裝で、襟には梔子の花を挿し、ズボンの前面には行儀よくちやんと筋が通つてゐた。大分に斯う興に入つてゐる樣子であり、また誰かを待つてゐる樣子でもあつた。玉座の後の扉の方へ向つて、肩越しにちよくちよく振り返つて見るのであるから。やがて、際立つてドイツ風の容貌をした、萎びきつた、腰の曲つた老人がその扉から現はれ、玉座の側の小さな卓子へ或る書類を載せた。

「あゝ、ハンズ、久らく振りだね！」老人の方へ近寄つてアリバートは言つた、「二三の事に就いて、

ちよつとお前と話をせんければならんね。殿下の御容態はどうかね？」
老人は軍隊式に挨拶した。「餘りお勝れになりませんので、」彼は答へた、「御定年になつてからずつと、手前は殿下の從者を務めてゐるので御座います、前にはまた御先代の從者でも御座いました、が、手前はつひぞ――」彼は言葉を止めた、して、詫びるやうにその皺くちやだらけの手を擧げた。
「お前つひぞ、何だといふのかね？」アリバートは懷しさうに老人に向つて微笑つた。この二人が、位置に於いては天地の相異がありながら、過去に於いては隨分と親密であり、すぐ再た親密にならうといふことは、誰が眼にもよく分ることである。
「御存じで御座いますか、」老人は言つた、「金融業者サムソン・レギーを――とか申しましたつけな――謁見室でこれから迎へるといふことを？　何とも失禮な申分ではありますが、金融業者風情を迎へるには、圖書室で澤山ではないでせうか？」
「誰もさう思ふかも知れん、」プリンス・アリバートは同意した、「が、それには、お前の主君の方でも、何か特別の理由があるかも知れんよ。ちよつとお前に訊くのだが、」急いで話題を變へて彼は續けた、「どうして一體、お前がオステンドで殿下に別れて、ボーゼンへ歸るやうになつたのかね？」
「御命令でございましたで、」して、王族方の氣紛れに就ては廣い經驗を有ち、歐洲の宮廷の祕密の半ばを知つてゐる老ハンズは、どんな途方もないことを意味するかも知れぬといふやうな眼光をアリバートに與へた。「手前が彼方へ御返しになつたのです、ちよつと――ちよつとした御用事で。」

「で、此方で再た御一緒になるといふことになつてゐたのかね？」
「いかにも左樣で。して、此方で御一緒になりはしたものゝ、手前はもう二度と再び主君にはお眼にかゝれまいと心配致してをりますので。」
「殿下はオステンドで、大變にお惡かつたのだよ。」
「左樣に手前も伺つてをります、」素氣なくハンズは答へて、徐かにその手を揉み合はせた。「で、殿下には未だ、十分に御回復になつてをらないので。」
「未だどうも。我々も一時はもう全く諦めてしまつたのだよ、が、立派な御體格のお蔭で、どうやら先づ病氣に打ち勝たれたのです。」
「一同もう、御大切に申し上げなければなりません。」
「いかにも左樣ぢや、」改り返つてアリバートは言つた、「御一命は實に、ボーゼン國に取つて貴重なのだから。」
その刹那にボーゼン國の當主ユージエンは謁見室へ這入つて來た。色蒼ざめ、痩せ衰へて、その制服も荷厄介といふ風に見えた、頭髪はちよつと亂れてゐ、綺麗な黑いその眼には、一種落着かない、殆どもうきよと〳〵してゐるといつた樣子が見えた。まるで斯う、何か見てはいけないものが見えはすまいかと、後を振り向くのを恐れてゐるといふ風であつた。が、同時に又、流石に爭はれぬ王族といふ品位も見えてゐた。オステンドのあの見すぼらしい病人であつたユージエンと、近代文化が高貴

の人々に提供し得る、あらゆる豪華、禮儀に取り卷かれてゐる、グランド・バビロン・ホテルの貴賓室に於けるこのプリンス・ユージエンとの相異ほど甚いものはまたとあるまい。オステンドのあのいろいろの死にもの狂ひの挿話は、すつかりもう祕されてしまつた、過去となつてしまつた。そんなことはないといふことになつてゐた。それを目擊した人々の胸の中に、祕れた恥辱として殘つてゐるぎりであつた。プリンス・ユージエンは回復した、兎も角彼は回復期に向つてゐた、して、彼はロンドンへ移され、一旦落したその王公的生活の絲を、再びまた取り上げたのである。赤い帽子の婦人、金づくでは動かない、獰猛なスペンサー孃、圖々しい、而かも素晴らしい才物であるジユール、暗い濕つた穴倉、とても耐らない、小さなあの寢室——斯ういふものは皆忘れられてしまつた。プリンス・アリバートとラックソール父子のお蔭で、彼は無事に斯ういふものから脫出して來たのである。漸くにして先づ前通り、プリンスとしてのその位置に戻ることが出來たのである。已むを得ぬ事故でオステンドへ滯留の後、無事にロンドンへ着いたといふ報告を、皇帝陛下もお受けになり、再たしても彼の名は、新聞紙の宮廷錄事中に華々しく出るやうになつた。要するに、何事も隱蔽されてしまつたのだ。唯——唯一つ、ジユール、ロッコーとスペンサー孃の三人は未だにまだ捕縛されずにゐ、レギナルド・デイモックの死體は、ポーゼン國宮殿の御家の廟所に葬られてゐ、して、プリンスユージエンは未だにまだサムソン・レギー氏に會見しなければならない立場にあつたのだ。

種々のことがプリンス・ユージエンの心に懸つてゐるといふことは、もう疑ひもないことである。

彼はまるで、自分で自分の心の奧深くへ隱れてしまつたといふ風であつた。つい先頃彼が經て來た非常な經驗、叔父甥の間柄で是非說明もし、打ち明けもしなければならない出來事が澤山あるにも拘らず、殆ども一言も、プリンス・アリバートに向つて言はないのである。オンテンド當時のことを、どんなに露骨に切り出して見ても、それは忽ち巧みな手段で彼に依つて無視されてしまふのである、して、プリンス・アリバートは實際もう、ジユール隱謀の祕密に就いては、ラックソールと二人でオステンドの賭博場を見舞つた晩と變りなく、一向に解釋がつかないのであつた。赤い帽子の婦人を手先に自分が誘拐されたといふことは、ユージエンはよく承知してゐた、が、あの女に欺されたといふことを恥ぢて、どうしても事を明かにしようとしないのである。

「この室で接見されるので、ユージエン？」アリバートは彼に訊いた。

「えゝ、」返答は不機嫌に與へられた、「何も差支ないぢやないか？　此方で正式の扈從を從へてゐなくとも、自分が何も正式に接見して惡いといふ理由はあるまいぢやないか？　……ハンズ、お前はもうよろしい。」老從者は早速に退散した。「アリバート、」その室で二人差し向ひになると、當主のプリンスは續けた、「君は私が氣が狂つてゐると思つてゐるのだ。」

「ま、ユージエン、」心ならずもぎよつとなつてプリンス・アリバートは言つた、「下らないことを言はないで。」

「君が私を氣が狂つてゐると思つてゐると言ふのだ。あの腦膜炎が永久その痕跡を私に殘したと思つ

てゐるのだ。さうね、自分は氣が狂つてゐるかも知れない。そりや分つたものぢやないさ。誰も知らないが、自分はこの頃、殆どもう氣も狂ふやうになるやうな、甚いとこを經て來たのだ。」

アリバートは返事をしなかつた。實際のところ、ユージエンの頭腦が未だその平生の調子と活動を回復しないといふ考へが、ふと彼の胸に浮んだのであつた。が、甥のこの言葉には、全然もう彼が正氣があるといふ自分の考へを、早速に回復するといふ效果があつた。自分が若し甥の信認を、少年として二人一緒に遊んだ時代から、ずつと二人の間に存してゐた、兄弟のやうな舊の信認を再び得られさへしたならば、萬事もう都合よく行くに違ひないと、堅く彼は信じるやうになつた。が、今のところでは、ユージエンは誰に對しても信認を與へようとする樣子など一向にないやうに見えた。若いプリンスは死の影の谷から出て來はしたのだが、その陰影が幾分未だ彼に引つ付いてゐて、それを散じてしまふことが出來ないのである。

「時にあの、」急にユージエンは言つた、「ラックソール父子に御禮をしなければならないと思ふが。あの二人は、自分はもう實に有難く思つてゐる。娘に腕輪を一つ、父の方には千ギニー遣はすとしたら——それで先づよいだらうかね？」

「ま、ユージエン！」呆きれ果てゝアリバートは叫んだ。千ギニー！　知つてをられるでせう、セオドア・ラックソールは、ボーゼン國を未端から末端まで買ひ占めてしまつても、一文なしにはならないといふ人間ですよ。千ギニー！　六文を提供するのも同じですよ。」

「ぢや、何を提供せにやならんかね？」

「何にも提供するには及びません、唯貴方の謝意を除いては。その他の物は何でもみな、侮辱といふことになりませう。普通の旅館業者ではないのですから。」

「あの娘に腕輪をやつてはいけないかね？」プリンス・ユージエンは薄氣味惡い笑ひを洩らした。

アリバートはぢつと彼の方を見た。「否、」彼は言つた。

「何で君は彼女に接吻したのかね——あの晩？」無頓着にプリンス・ユージエンは訊いた。

「誰に接吻したのです？」飽くまで落着き、取り亂さずにゐようとしてゐるにも拘らず、沸然色をなしてアリバートは言つた。

「あのラックソールの女をさ。」

「何時と君は言ふのかね？」

「あの、」プリンス・ユージエンは言つた、「自分が病氣だつたオステンドでのあの晩を言ふのだ。自分は夢現でゐると君は思つたのだ。さうであつたかも知れない。が、どういふものか自分は、非常にはつきりと覺えてゐるのだ。ほんのちよつとの間、自分の頭を上げると、恰度そのちよつとの間に、君が彼女を接吻したのを覺えてゐる。まあ、アリバート叔父！」

「聽いて下さい、ユージエン、後生だからどうか。自分はネラ・ラックソールを愛してゐるのです。彼女と結婚する積りです。」

「君が！」長い間があつた、それからユージエンは笑つた。「あゝ！」彼は言つた、「皆初めは左様いふ風に言ふものだが。現に自分も、左様いふ風に言つたのだ、如何にも聞えは美いが、何の意味もありやしない。」

「この場合、それは一切を意味するのですよ、ユージエン、」溫和かにアリバートは言つた。

後者の言葉に何處か斯う堅い決心の色が見えたので、ユージエンは幾分眞面目になつた。

「君は彼女と結婚することは出來ない、」彼は言つた、「皇帝は内縁の結婚はお許しにならないから。」

「皇帝は少しもこの件に關係はありません。自分は自分の資格を放棄して、普通の市民となつてしまひます。」

「その場合、君はこれといふ資産もないやうになるだらう。」

「でも、妻が資産を有つやうになるでせう。彼女と結婚するために自分がしなければならぬ犠牲を知つて、彼女は必ず躊躇せず、その資産を自分の手に委ね、お互の使用に供すに違ひありません、」ぎごちなくアリバートは言つた。

「必ずもう君は富むに違ひない、」思ひはセオドア・ラックソールの評判の富へと馳せ、深く思ひ入つてユージエンは言つた。「でも、君はこれを考へたかね？」彼は訊いた、して、今まで溫和かであつたその眼は、再たしても一種の狂氣を帶びて輝いた。「自分は未だ結婚をせず、いつ何時死ぬかも知れず、すれば、王位は自然――君の身に落ちて行くといふことを考へたかね？」

「王位は決して自分の身に落ちることはありませんよ、ユージエン、」やさしくアリバートは言つた。

「貴方は丈夫でゐられませうから。貴方はもうすつかり回復期に向つてゐます。何にも心配することはありません。」

「自分が心配するのは次の七日間で、」ユージエンは言つた。

「次の七日間！　何でまた？」

「それは分らんので、唯その七日を心配するのです。その先き若し自分が長らへられゝば――」

「サムソン・レギー氏でございます、」大きな聲でハンズは取り告いだ。

第二十回　サムソン・レギー氏の拒絶

プリンス・ユージエンはぎよつとなつた。「會ふこととしよう、」彼は言つた。サムソン・レギー氏は直ぐさま通つて可いといふことを示すやうな身振りをハンズに向つてして。

「瞬時先づどうか、」甥の肩へ靜つと手をかけ、敷居の向うの、素晴らしく作法の心得のある召使ひを急に退散させる效果を有つた、一種の眼光を老ハンズの方へ與へて。

「何なのだね？」不機嫌にプリンス・ユージエンは訊いた。「何でさう急に眞面目になるのかね？自分はサムソン・レギー氏に先約があつて、待たしてはおけないといふことを忘れてくれては困る。時間を守るのは王公の禮儀だと、誰かゞ言つてゐるぢやないか。」

「ユージエン、」アリバートは言つた、「君も自分と同じに、眞面目になつて貰ひたいのだ。何で我々はお互に信頼出來んのかね？　自分は君を助けたいと思つてゐる。既にもう助けて來たのだ。君は名儀上自分の主君であるのだ、が一方に於てはまた、自分は君の叔父であるといふ光榮を有つてゐる。君と同年であつて、子供の時から一緒に遊んで來たといふ光榮を有つてゐる。君の信認を與へてくれ給へ。何年か前には、君はそれを自分に與へてくれたやうに思つてゐた、ところが、その當時ですら君には祕密があつたことを、自分はこの頃發見した、ところで今、君の病氣以來といふものは、君は一層また祕密的なのだ。」

「そりやどういふ意味なので？」ユージエンは言つた、敵意を含んでゐるやうにも取れ、また好意にも取れるやうな調子で。

「君は何を言はうとしてゐるのかね？」

「左樣ですね、第一に先づ、君はあのサムソン・レギー氏との交渉に成功しないと言ひたいのだ。」

「左樣ですかね？」ユージエンは輕く言つた、「自分が交渉の用件があることを、どうして知つてゐるのかね？」

「知つてゐるといふだけにしておきませう。あの千萬といふ金は、どうしても君は彼から手に入れられないでせう。」

ブリンス・ユージエンは苦しさうに息を吐いた、してから、その激昂を呑み込んでしまつた。「誰が

べちやくちややりをつたのかね？　何千萬だつて？」その眼は不安さうに部屋をあちこちしてゐた。

「あゝ！」わざと笑ふ風をして彼は言つた、「漸く分つた。自分が夢現で喋つてゐたのだ。そんなことを氣に留めてはいけないよ。熱に浮かされると、誰の考へも途方もなく變になるもので。」

「君は決して夢現で喋つてはゐなかつた、」アリバートは答へた、「少くとも君自身に就いては。今度のこの私債の計畫に就いては、オステンドで君に會はない前から知つてゐたのだ。」

「誰が君に話したのかね？」くわつとなつてユーゼンは詰め寄つた。

「ぢや、君は私債を起さうとしてゐることを承認するのかね？」

「百萬長者のラックソールが。斯うした富豪連には、お互に祕密といふものはないのだ。彼等は一種の結社をなしてゐる、如何な我々の結社よりも親密な、して、遙かにずつと有力な結社を。彼等は互に語り合ひ、その語り合ふことに依つて世を支配してゐるのだ、斯うした百萬長者といふものは。彼等こそ眞の王者なのだ。」

「百萬長者の畜生奴等が！」ユージエンは言つた。

「そりや左樣かも知れない。が、再た君の場合に戻るとしよう。自分が知つてゐるよりもずつと餘計に、君のことに就いてラックソールが話すのを聞いた時の、自分の屈辱、自分の嫌惡を想像して見給へ。幸ひにも彼は好い人物で、誰も彼に信頼することが出來る、でもなかつたなら、君の祕密の歷史が悉く彼の手にあることを發見した時、自分は何か狂暴なことをする氣になつたかも知れないの

だ。ユージエン、何は兎も角先づ要點に觸れるとして、何で君はその千萬といふ金が要るのかね？そんなにも甚い借金をしてゐるといふことが、現に事實なのかね？　自分は何もこの機會を利用して君に說法をしようといふのではないのだ。ほんの唯訊くだけなのだ。」

「自分が若し千萬の金を借りてゐるとしたら、どうだといふのかね？」勇氣を裝つてプリンス・ユージエンは言つた。

「や、そりや何でもないよ、君、何でもないよ。唯十年間に散じてしまふには、ちよつと大きな金額ぢやないかね？　どうして左樣いふことになつたのかね？」

「訊かないでくれ給へよ、アリバート。自分は實に阿呆であつたのだ。が、誓つて言ふが、君が赤い帽子の婦人と呼んでゐるあの女が、自分の道樂の最後だつたのだ。自分はこれから妻を娶つて、立派なプリンスにならうと思つてゐる。」

「ぢや、アンナ姫との婚約はちやんともう成立したのかね？」

「事實もう成立したのだ。レボーとの話が決まれば直ぐ、萬事もう都合好く進んで行くのだ。アリバート、帝位をくれると言つても、自分はあのアンナを失ひたくないのだ。彼女は實に貞淑な、淸い女だ、人間が天使でも愛すやうに、自分は彼女を愛してゐる。」

「それにしても、君の借金に就いては、君は自然彼女を欺すことになるのだね？」

「彼女ではない、彼女の下らない良心と、恐らくまた皇帝をとだ。彼等は種々な噂を聞いてゐる、さ

つぱりと潔白なところを見せて、あの噂を鎭めなければならない。」

「打ち開けてくれて何とも嬉しい、」プリンス・アリバートは言つた、「が、自分は君に對して遠慮なく申します。君は決してアンナとは結婚しないでせう。」

「そりやまた何で？」再たしても橫柄になつてユージエンは言つた。

「何故といつて、彼女の良心はそれを許さないでせうから。何故といつて、君は彼等に對して潔白なところなど見せられないだらうから。何故といつて、このサムソン、レギーなる者は決して君に千萬は貸さないだらうから。」

「篤と說明してくれ給へ。」

「そりや進んでしますとも。君は誘拐されたのだ——聞くも恐しい言葉だが、この言葉を用ひなければならない——あのオステンドで。」

「いかにも。」

「どうしてだか知つてゐられるかね？」

「あの老獪な赤い帽子の女とその一味のものが、自分から金を捲き上げようとしたからだらうと思ふね。幸ひにも、君がたのお蔭げでそれはやられなかつた。」

「そんなことは少しもない、」アリバートは言つた、「彼等は少しも君から金を捲き上げようなどと思つてはゐないのだ。君に少しも金のないことは、彼等はちやんと承知してゐるのだ。君が歐洲のブ

リンス中の不良少年であつて、自分の王國に對して責任感も、また義務の念もないことは、彼等はちやんと知つてゐるのだ。何で彼等が君を誘拐したか君に言つて上げようか？」

「自分に對する君の惡口が濟んだなら。」

「ほんの唯、イギリスから君を二三日の間、遠ざけようといふそのために、ほんの唯、サムソン・レギーと會合の君の約束を果すことが出來ないやうにするために、彼等は君を誘拐したのだ。で、立派に彼等は成功したやうに思へるね。假りに君がレギーから、その金を手に入れられないとして、君にそれを調達してくれようといふ別の金融業者が歐洲中にあるかしら——君が提供するやうな、そんな怪しげな擔保で？」

「そりや或ひはないかも知れん。」落着き拂つてプリンス・ユージエンは言つた、「でも、自分はちやんとサムソン・レギーからそれを手に入れる。レギーはそれを約束したのだ、飽くまで約束を守る男であるといふことは、他の方面から聞いて、ちやんと分つてゐる。或る手續きこそ踏まなければならないが、その金はあいてゐると彼が言つたのだ——」

「何時まで？」

「六月の末まで。」

「今はもう七月の末だ。」

「さうね、一月が何であるものぢやない。彼はもう、その金が貸したくて仕方ないのだ。とても好い

利子が取れるから。一體全體どうして君は、自分に對して陰謀の企てがあるなどといふ考へを、聖人のやうな君の頭腦へ入れ込んだのだ。考へても實に馬鹿らしいことだ。自分に對して陰謀の企て？何のために？」

「君はこれまで、ボスニヤのことを考へたことがないかね？」冷靜にアリバートは訊いた。

「ボスニヤがどうしたので？」

「申すにも及ばぬことながら、ボスニヤ王は自然オーストリヤの恩儀に與つてゐるのだ、王位に就いてゐるのもそのお蔭なので。王に勢力のある結婚をさせようと、オーストリヤは切りに希つてゐるのだ。」

「さう、ぢやするがいゝさ。」

「直ぐもうしますよ。直ぐもうアンナ姫と結婚します。」

「自分が生きてゐるうちは斷じてない。一年前に申し出たのだが、美事にもう刎ねつけられてしまつたので。」

「そりやさうだ、でも、再た申し出るでせう、して、今度はもう刎ねつけられるやうなことはないだらう。まあ、ユージエン！　君に對するこの陰謀が、君の事情をすつかり知つてゐて、アンナ姫との君の結婚の邪魔をしようとする或る人々に依つて、巧みに畫策されてゐるといふことが、どうしても君には分らんのかね？　アンナ姫との君の結婚の邪魔をしようといふ動機を有ち得る人間は、歐洲

中に唯一人しきやない、で、それは自分で姫に結婚したいといふ人間なのだ。」ユージエンは蒼白になつてしまつた。

「では君、オステンドに於ける自分の留置は、ボスニヤ王の手先の者に巧らまれたといふことを、君は自分に言ふ積りかね？」

「その通り。」

「サムソン・レギーとの自分の交渉を差し止めて、アンナとの自分の結婚の可能性に留めを刺さうといふ目論見で？」

アリバートは默頭いた。

「君は實に親切な味方だ。飽くまで僕に盡してくれる積りなのだらう。が、君は確かに誤解してゐる。何でもないことを、君は今まで心配してゐたのだ。」

「レギナルド・デイモックのことを忘れたかね？」

「死んだと君が言つたやうに覺えてゐる。」

「そんな事は少しも言はない。暗殺されたと言つたのだ。そりやほんの一端なのだよ。」

「ちえつ！」ユージエンは言つた。「暗殺されたとは思はんね。で、サムソン・レギーはといへば、千マルク賭けてもきつと請け合つて、立派に今日話が纏り、ロンドンを去る前に、千萬の金はちやんと自分の手に入るよ。」アリバートは頭を振つた。

「君はレギー氏の人物を、可成りよく知つてゐるやうだね。これまで大分交渉があつたのかね？」

「さうね、」ユージエンはちよつと躊躇した、「少しばかり。自分の位置にゐる青年で、いつかサムソン・レギー氏と多少の交渉を有たない者は一人もない。」

「自分は更に交渉はない、」アリバートは言つた。

「君！　君は化石だもの。」彼は銀の呼鈴を鳴らした。「ハンズ！　これからサムソン・レギー氏に接見する。」

そこで、アリバートは愼ましやかに出て行つた、して、プリンス・ユージエンは大きな天鵞絨の椅子へ座を占めて、ハンズが前に卓子の上へ置いておいた書類を見始めた。

「お早う御座ります、殿下、」這入つて來るとお辭儀をして、サムソン・レギーは言つた、「殿下には御元氣でいらつしやること、存じますが。」

「先づ以つて、有難う、」プリンスは答へた。

歐洲の平民としては、誰よりも一番と王族方と交渉を有つて來たといふ事實にも拘らず、サムソン・レギーは未だ、會見の最初の數分間といふもの、斯うした高貴な方々に對して固くならずにゐるやうに、十分の修業が積んでゐないのだ。後になつて、彼は漸く我に返り、談話も自由に出來るやうになつたが、最初のうちは、相變らずもう居章てふためき、顏を眞紅にして、びつしより汗をかいてゐた。

「直ぐさま用談を取り運ぶことにしよう、」プリンス・ユージエンは言つた、「席へ着いてくれないかね、レギー氏？」

「有難う存じます。」

「ところで、既に我々の間に大體の話の纏つた、あの私債に就いてぢやが――確か千萬であつたらうと思ふが、」いかにも輕々とプリンスは言つた。

「千萬でございました、」レギーは同意した、莫迦に太い時計の鎖を弄りながら。

「萬事もう調うてゐる。此處にちやんと書類も出來てゐるので、自分は直ぐさま事を纏めてしまひたいのだ。」

「いかにも仰せ通りで、殿下、ところが――」

「ところがどうしたので？　數ケ月前、擔保に對しても、君はもう十分滿足の意を表したのだ、そりやあの擔保がちよつと變つた性質のものであることは、自分も進んで承認するのではあるけれど。君はまた利子の歩合ひにも同意したのだ。千萬の金を五分五厘の利子で貸すといふのは、君、十人が十人に、出來る藝當ぢやないのだ。してまた、十年以内には、全額すつかり綺麗に皆濟されることになるのだ。自分は――あゝ――自分はあの、これから自分に婚約しようといふアンナ姫の財産といふものは、結局五千萬マルク位の額に上るといふことを、君に言つたやうに思ふが、イギリスの金に直すと二百萬磅以上になるのだ。」プリンス・ユージエンは言葉を停めた。斯うした打ち解けた風で金融

業者に話をすることは、彼は更に好まないのだ、が、今は事情已むを得ないやうに思つた。

「實は斯ういふ次第なのでして、殿下、」彼一流の質朴な英語でサムソン・レギー氏は始めた。「斯ういふ次第なのでして。その位な金は、六月の末までなら空いてゐるやうに致しておくと、手前は申上げたのでした、で、その日限前に、此方で御會見下さる筈であつたのです。殿下からお便りもなく、手前のドイツの代理人に百方詮索させたのでしたが、殿下のお宿處が分らなかつたもので、こりやてつきり他で話をお纏めになつたものと思つてしまひました、この二三ケ月といふもの、金利が莫迦に安いので。」

「自分は不幸にして、オステンドへ抑留されたのだ、」出來るだけ傲慢な態度を取つて、プリンス・ユージエンは言つた、「あの――あの、重大な用件のために。別に他で話を纏めてはをらん、千萬の金は今も入用なのぢや。君が若し自分取引のロンドンの銀行へそれを支拂つてくれるなら――」

「何とも殘念至極の次第ではござりまするが、」我ながらびつくりするやうな、とても素晴らしい鄭重な態度で、サムソン・レギー氏は言つた、「手前の組合はその金を他へ貸付つけてしまひましたのです。南米の方へ參つたのです――申し上げても差し支ございません、チリー政府へそれを貸付けましたので。」

「チリー政府が何の糞ぢや、」プリンスは叫んだ、して、蒼白になつた。「自分は是非その千萬を貰はにやならん。約束なのだから。」

「いかにも約束でございました、」サムソン、レギー氏は言つた、「が、殿下がそのお約束をお破りになつたので。」

長い沈默が續いた。

「では、斯ういふのかね、」妙に緊張した落着きを以つてブリンスは始めた、「君はその千萬を自分に都合してくれる立場にはゐないといふのかね？」

「二年もいたしますれば、千萬を御用立て出來るでございませう。」

いかにも當惑したといふ身振りを、ブリンスは示した。

「レギー氏、」彼は言つた、「明日自分の手にその金を渡してくれないなら、君は一番の舊家といふ王家の一つを亡ぼしてしまふのだ、して、偶然にも君は、歐洲の地圖を變へてしまふのだ。君は信義を守らんのだ、自分は君に信頼してゐたのに。」

「失禮ながら殿下、」激昂したあまり、小男のレギーは言つた、「信義を守らなかつたのは手前ではございません。繰り返して申し上げます、その金はもう手前の自由にはなりませんと、して、これでお暇申し上げます。」

して、サムソン・レギー氏は、迷惑さうに妙なお辭儀をして謁見室を出て行つた。

これぞ實に十九世紀世紀末に特有な一つの場面なのだ——たかぐ〳〵ブリクストンの二軒建ての別莊風情で生れ、その快樂に對する最高の理想は、贅澤な新式の遊山船で日曜に大河を上るぐらゐなもの

である、喰ひ肥つた、平凡な、喘息病みの小男が、アメリカの百萬長者の所有になつてゐる旅館か何かで數百年の間歐洲の歴史の有らゆる頁に指を染め、今は直ほその故郷のお城では、豪華と權力の有らゆる表示に圍まれてゐる一族の人間の代表者を向うへ廻はして、散々に彼を敗北さしたといふことは。

「アリバート、」少ししてブリンス・ユージエンは言つた、「全く君の言ふ通りだつた。萬事もう休すだ。自分にはもう一つしか逃れ途はない——」

「君はまさか——」啞然としてアリバートは言葉を止めた。

「否、その積りだ、」口早にユージエンは言つた、「ほんの偶然の事に見えるやうに、やつて退けるやうする。」

第二十一回　フエリツクス・バビロン歸る

ブリンス・ユージエンがサムソン・レギー氏とのあの不幸な會見の晩に、セオドア・ラツクソールは幾分斯う不安さうに、また別に當てもなく、グランド・バビロンの玄關や、その近くの廊下をぶらぶらしてゐた。ほんの一日二日前にオステンドから歸つたばかりで、先方へ彼を急がしたあの事件を忘れようと、實際もう濟んだものとそれを見るやうに、一生懸命努めてゐた。が、彼はどうしてもさう出來ないのに氣づいた。事物によつてはこれで、放つておいた方が可いものがあると、口の中で言

つて見たが、一向にその甲斐もなかつた——市場の操從者として、ニユーヨークに於ける大計畫の案出者としての彼の經驗が、何物か彼に敎へたとしたならば、それは確かにこの一事を彼に敎へべき筈であるのに。それだのに、彼はどうしても斯ういふ氣分になれなかつた。自分のホテルにプリンス方が宿泊してゐるといふ唯その事が、生涯決してもう敗北されたことのないこの男の戰鬪性を刺戟したのだ。言はゞ先づ、自分はその味方になつて武器を取上げたやうなもので、ポーゼン國の兩プリンスがその戰鬪を續けられないとしても、彼セオドア・ラックソールは、依然として彼等のためにそれを續けたいと思つてゐた。勿論、或る程度までは、戰爭は既に勝つたのだ、プリンス・ユージエンはとても危險な難局から救はれ、ジユール、ロッコー、スペンサー孃、その他から成り立つてゐる敵は、美事にもう退散してしまつたのであるから。が、それだけでは十分でないやうに彼は思つた、なかなか以つて十分どころではないやうに。罪人共が——立派にもう彼等は罪人であるに違ひないので——未だにまだ捕縛されずにゐるといふことは、途方もなく怪しからんことと彼は見てゐた。それにまた、も一つ別に考慮すべき點があつたのだ、卽ち、今まで起つた一切の事に就いて、彼は何等警察へ報告してないのだ。彼は警察を馬鹿にしてゐた、が、警察がもし偶然に、この事件の實情に對する手掛りを得たとしたならば、法律の眼から見れば、今まで自分が祕して來た程の事を祕すといふことは一種の違輕罪になるといふ單にそれだけの理由で、自分の立場はちよつと拙くなりはしないかといふことを、氣づかないわけにはいかなかつた。何で自分は今まで、事を祕すといふ策を取つたものか、

何で自分はこのポーゼン事件に興味を有つやうになつたものか、して、今に至つてまだ、何で自分はそれを飽くまでも遂行したくてならないのかと、千度も彼は自問自答した。最初の二つの質問に對しては、彼はネラに依つて、また生來の冒險好きに依つて影響されたのだと、覺束なくも彼は答へた、第三の質問に對しては、自分は始終物事をやり遂げる習慣になつてゐるので、今もまたこの仕事を飽くまでやり遂げたいといふ、ほんの子供らしい頑强な願望に驅られてゐるのだと彼は答へた。のみならず、自分にはそれを遂行する立派な技倆を具へてゐるといふ、とても素晴らしい自覺を有つてゐたのだ。性來大言壯語は嫌ひなもので、我と自分にそれを認めはしなかつたけれど、も一つの動機を彼は有つてゐたのだ、して、それは卽ち正義に對する抽象的の愛、別段とそれに應じる利益もなく、隨分と重大な危險を犯さなければならぬ場合に臨んでさへも、正しきに與してそれを助けるといふ、アングロ・サクソン人の深く根ざした本性であつたのだ。

七月の最後の日のその晩に、廣いホテルをあちこちしながら、繰り返し斯うしたことを彼は心に考へてゐた。社交新聞はこの一週間、ロンドンはもう空虛だと書いてゐる、が、その報道にも拘らず、ロンドンは何時になく一ぱいになつてゐるやうであつた。グランド・バビロンは確かに、一月前のやうに、さう立て込んではゐない、が、商賣は相當繁昌してゐた。社交季節が終ると、社交界の華やかな蝶は、お城や別莊や、牧場や草原や、湖水や溪流へ飛んで行く前に、一日二日大きなホテルへ徘徊する習慣になつてゐる。柱廊にある大きな籐椅子は、酒やら煙草やら、靜かに大河の上に浮んでゐる

滿月といふやうな、樣々の快樂を享樂しにかゝつてゐる、老人、中年の紳士で一ぱいであつた。其處此處に、五分の隙もないといふ服裝の伊達者の腕に抱かれた綺麗な女が、露臺の散策場をあちこちしながら、美事にその裾を曳いてゐた。ウエイターや制服を着た使用人、また、金の打紐を着けた門番が音も立てずあちこちしてゐた、ちよく〳〵また門番長が口笛を吹くと、ちやら〳〵鈴を鳴らして馬車が着き、一雙の蝶を遊山場へ連れ出して行つた。折々はまた、とても素晴らしい、氣取り返つた馬に曳かれた自家用の馬車がやつて來て、單にその外觀だけでも辻馬車を顏色なからしめた。實に暑い晩であつた。森や泉へ逃れようといふ晩であつた、して、乘物を除いては、何等忙しい動搖も聞えなかつた。世界は——卽ち、グランド・バビロンの世界は——しいんと靜まり返つて消化作用と漫談に餘念もないやうに見えてゐた。左右へずつと擴がつてゐる大河河岸の瓦斯燈の長い列さへも、靜かな熱い、撫でるやうな空氣の中に、殆どちら〳〵もしないのであつた。天上の星は、ちら〳〵と、グランド・バビロンの大厦を見下してゐた、して、月は物和かな、動きなき顏でそれを見てゐた、月と星がそれとその中にゐるものをどう思つてゐるかは、不幸にしてそれを此處へ記すことは出來ない。セオドア・ラックソールがどう月を思つてゐるかは、ちやんとそれを記すことが出來る——彼はそれを厄介なものに思つてゐたので。月はどうやら間の抜けたその凝視で、彼の眼を樂しました、斯くてまた復雜な、彼の冥想を妨げたのであつた。着飾つた、得意の人々である彼の客を彼は見廻した。彼等は全く自分を無視してゐるやうである。恐らくほんのその一二パーセントといふ人達が鐵褐色の頭髮

をし、瘠せた、確つかりとした顏をし、如何にも無頓着に悠然とアメリカ仕立の燕尾服を着流してゐる、丈の高い瘠せたこの人がグランド・バビロンを一手に持つてゐる持主であり、ひよつとすると、歐洲でも一番の金持であるかも知れないといふことを、假りにも思ひはしなかつたのである。前にも既に言つたやうに、ラックソールはイギリスでは名士でなかつたのである。グランド・バビロンの客は、唯彼を妙に落着かない男性の人であり、その落着かないのは何方かといふと自分達の落着きの邪魔となるものではあるが、その面構へから見て、その人を相手に兎や斯う言はないが得策と思つてゐた。それ故、セオドア・ラックソールは別段に話し掛けられもせずその逍遙を續けてゐた、して、「何かせにやならんわい」と、頻りと獨りで言ひ續けてゐた。が、一體何を？　これと言つて別に彼は、爲ることも思ひつけなかつた。

到頭彼は、眞直ホテルを通り抜けて別の入口へ出、それからさして榮えもせぬ通りを通つて、狹い大混雜のストランド通りの喧囂の中へ出た。パトネー行の乘合へ彼は跳び乘つた、して、五文といふパトネーまでの賃銀を拂つた、してからまた、この乘物の見すぼらしい乘客が燕尾服こそ着けてゐるが、塵避けも羽織らないでゐる、自分のこの體たらくをば、じろ〳〵見てゐるのに氣づいて、忽ちまだ飛び下りてしまつた、車掌が彼の方へ拇指を向けて、「狂人が行くよ」とでも言ふやうに、乘客に目配せしたといふ事實には氣づかずに。煙草屋の店へ彼は這入つて行つた、して、葉卷を一本くれと言つた。幾らのをと、店の男は溫和に訊いた。

「幾らのが一番良いので？」セオドア・ラックソールは訊いた。
「一本五志づゝで、」男は早速に言つた。
「一文の奴をくれ、」と、ラックソールは手短かに頼んだ、して、一文の葉巻を吸かしながら、彼は店を出て來た。ちよつと氣分が變つて彼は好い心持になつた。
香料を賣るユージエン・リムメルの名代の店の、芳香を彼が嗅いでゐると、反對の方面から除かに歩いて來た一人の紳士が、穏かに「今晩は、ラックソール氏、」と言つて、彼に挨拶した。百萬長者は初めのうち、旅行外套を着て、手提げ鞄を提げてゐるこの男が分らなかつた。すると、ちよつとした喜びの微笑に彼の面はくづれ、彼は忽ちその手を出した。
「ところで、バビロン氏、」彼は一方の男に挨拶した、「廣い世間の人といふ人の中で、君こそ自分が一番會ひたいと思つてゐた人なのだ。」
「お上手をおつしやつてはいけません、」英國化した、小男のスキス人は言つた。
「否、そんなことはない、」ラックソールは答へた、「君もさうだが、自分はもう平生からお世辭は言はんのだから。君と本當にゆつくり話したいと思つてゐたのだ、ところが、ひよつくり其處へ君がやつて來たのだ！　何處から一體湧いて來たのだね？」
「ローザンから、」フエリックス・バビロンは言つた。
「先方の用事を濟ましてしまひますと、別に何にもすることがないので、鄕愁病になつてしまつたの

です。ロンドンのノスタルジヤを感じましたので、御覽の通り斯くやつて參つたやうな次第で、」して、彼はラックソールの眼の前へ手提げ鞄を持ち上げた。「齒ブラシが一本、剃刀が一挺、スリッパが一足といふやうなわけで、えい！」彼は微笑つた、「斯うして歩いてゐながらも、何處へ泊つたものかと、考へあぐんでゐたのです——手前、このフエリックス・バビロンが、ロンドンで宿なしといふ次第でして。」
「それなら、グランド・バビロンへお泊りが宜しうございますよ、」ラックソールは笑ひ返した、「なかなか好いホテルで、自分は親しく持主を知つて居りますから。」
「ちよつと高くはないでせうか？」バビロンは言つた。
「君にはですな、」ラックソールは答へた、「何もかも入れて、一週きつかり半王冠銀貨になりませうよ。それで宜しう御座いませうか？」
「宜しう御座います、」バビロンは言つた、して、言ひ添へた、「何とも御親切なことで、ラックソール氏。」
二人は一緒に、ぶらぶらホテルへ歸つて行つた、別段これといふことも言はず、が、二人一緒になつてゐるのを顧ると滿足に感じて。
「客は大勢で？」フエリックス・バビロンは訊いた。
「可成り先づ、」出來るだけ專門のホテル業者の態度を裝つて、ラックソールは言つた、「店商人の言

葉を假りて言へば、これが先づ商賣といふものでせうと、言つてよいと思ひますな。今晩は、客は皆柱廊の露臺へ出てゐます——滅法界暑いので——で、氷の要ることは實に大したもので——殆どもうニューヨークにも劣らない位です。」

「左樣と致しますと、」鄭重にバビロンは言つた、「失禮ながら葉卷を一本呈すことに致しませうよ。」

「でも、この方が未だ喫ひきれませんから。」

「それだからこそ、別のを一本呈したいと思ひますので。貴方のやうな葉卷は、グランド・バビロンの地内では、決して喫つてはならんのです、たとへばグランド・バビロンの持主であるにしても、特にまた、客がみな柱廊に集まつてゐる際には。その煙ときては、どのやうなホテルでもさびれてしまひますよ。」

セオドア・ラックソールは笑ひながら、バビロンが彼に渡したロスチャイルド・ハバナを點けた、して、二人携へてホテルへ這入つて行つた。が、段々を上るや否や、フエリックスは忽ち無數の挨拶の的となつた。以前のその客の間に、彼は非常に評判が良かつたらしいのだ。やがて、二人は社長室へ辿り着き、バビロンは其處で雞肉の御馳走になり、ラックソールは側でゆつくり、名代の葡萄酒の一瓶の相伴役を務めてゐた。

「この鷄肉は殆ど申し分なくよく燒けてゐますな、」バビロンはやがて言つた、「家の看板といふものですよ。それにしても、何で貴方は、一體全體何でまあ、ロッコーと喧嘩をなすつたので？」

「ぢや、君はもう聞いたので？」

「聞きましたつて！　そりやもう大陸のどの新聞にも出てゐます。或る新聞は、ロッコーが引き拂つたといふからには、グランド・バビロンは半年以内に戸を閉めなければなるまいと豫言してゐました。でも、勿論、手前の方がずつと消息に通じてをりますので、ロッコーを出してやるに就いては、相當な理由がおありになるに違ひない、してまた、豫め代りの者もお取り極めになつてゐるに違ひないと思つてゐました。」

「實際のところ、自分は豫め取り極めもし何もなかつたので、」少々悄氣かへつてセオドア・ラックソールは言つた、「でも、幸にして次の料理長が、ロッコーなら知らず、他の者には誰にも劣らぬといふ名人と解つたのです。が、そりや唯ほんの幸運といふものです。」

「確にもう、」バビロンは言つた、「斯樣な重大なことで幸運などに賴るのは危いぢやないですか？」

「幸運などに賴りなんどはしなかつたので。何にも賴りはせず、唯一人ロッコーを賴りにしてゐたところ、まんまと彼は自分を欺したので。」

「でも、何で彼と喧嘩をなすつたので？」

「別に喧嘩はしなかつたのです。或る晩貴賓室の寢室で、彼が死體を木乃伊にしてゐるとこを見つけたので——」

「貴方が何をですつて？」バビロンは殆どきやつといふ聲を立てた。

「貴賓室の寢室で、彼が死體を木乃伊にしてゐるところを見つけたので、」この上なし穩かな調子でラックソールは繰り返した。

二人は互に顏を見合せた、そこでまた、ラックソールはバビロンの酒盃を注いだ。

「どうかお話し下さい、」どつかと安樂椅子に身を落ち着け、葉卷を點けて、バビロンは言つた。

ラックソールはそこで、ポーゼン挿話の一伍一什、自分が知つてゐる限りの、有らゆる巨細の事情を彼に語つた。とても長い複雜した物語でそれはあり、殆ど一時間もかゝつた。その一時間の間といふもの、フェリックスはつひぞ一言も言はず、顏の筋一つも動かさなかつた、唯彼の小さな眼が、立ち昇る紫の煙の蔭から覗いてゐるだけだつた。露臺の上の時計は十二時を打つた。

「ウイスキー・ソーダといふ刻限で、」ラックソールは言つて、呼鈴を鳴らさうと起ち上つた、が、バビロンは手を振つて彼を止めた。

「このサムソン・レギーが今日プリンス・ユージェンに謁見したといふお話でしたが、その謁見の結果はまだ伺ひませんので、」バビロンは言つた。

「自分もまだそれを知らんからです。でも、明日は屹度解るに相違ないので。それはさうとして、レギーがプリンス・ユージェン要求の千萬の金は出すまいといふことは、可成りもう確かに思ふね。その金が他へ融通されたと信じられる理由がありますから。」

「ふん！」バビロンは考へ込んだ、してから、頗ると無雜作に、「貴賓室の浴室からそつと覗ける趣

向になつてゐるなどは、一向にもう喫驚しませんね。」

「何で喫驚せんのかね？」

「や、それは！」バビロンは言つた、「そりやもう見えすいた奸計ですからね——すぐと實行出來る。手前はと言へば、決してもう斯ういふ事件には携はらないやうに、特に注意をしてをつたのです。さういふ事件があるといふことも知つてをりました、どういふものかあるといふやうに感じたのです。でも、自分はまた、それが全く自分の領分以外のことのやうに感じました。自分の仕事は、費用お構ひなしに仕拂つてくれる方々に對して、この上なく贅澤な種類のお宿をいたすことなのです、で、手前は何處までも自分の仕事をやつて行きました。何かもし他のことが、祕密にホテルで行はれてゐても、それが現に自分の眼の前へ持つて來られない以上は、何處までもそれを無視するやうに、疾うにもう決心してゐたのでした、してまた、それはつひぞもう自分の眼の前へ持つて來られたことはないのです。それにしても、斯ういふ種類の事件には、一種斯う氣が立つやうな面白味があるには違ひないので、貴方も定めしそれをお味はひになつたのでせう。」

「味はひましたよ、」無雜作にラックソールは言つた、「君は嘲笑つてゐるに違ひないとは思つてゐますが。」

「どういたして、」バビロンは答へた、「ところで、些と立ち入つた話でありますが、次には先づどういふ手段に出ようといふので？」

「それが自分にも分らんで困つてゐるのです、」セオドア・ラックソールは言つた。
「ところで、」と、ちよつと間をおいてからバビロンは答へた、「そろ〳〵本題に入るとして。先づ第一に、これは定めし貴方にも興味を有たれることと思ひます、手前が今日偶然ジュールに會つたとお聞きになるのは。」
「君が會つたので？」可成り落着いてラックソールは言つた、「何處で一體？」
「さうですな、今朝早くバリーででした、手前が恰度先方を立つ前に。全く偶然の會合なんで、自分に遇つたについては、ジュールもちよつと驚いてゐるやうでした。何處へおいでかと、鄭重に彼奴は訊ねました、して、スキスへ行くとこだと手前は申しました。その時には、手前はスキスへ行く考へだつたのです。結局先方の方が幸福かも知れない、またしても故郷へ舞ひ戻つて、ロンドンなどはもう見ない方が可いと、ふと胸に浮んだのでした。ところが、もう一度手前の氣は變つて、ロンドンへやつて行つて、自分のホテルといふものもなく、淋しい目を見るのも構はないと決したのです。何處へこれから向ふのかと、その手前がジュールに訊きますと、これからコンスタンチノープルへ立つて行くのだ、先方の新しいフランス旅館に興味を有つてゐるからといふことでした。折角まあ御機嫌好うと言つて、二人は別れました。」
「コンスタンチノープル、えい！」ラックソールは言つた、「彼奴にやあ打つてつけといふ場所でせうよ。」

「ところが、」バビロンは言つた、「ちらと再た彼奴の姿を見かけましたので。」
「何處で？」
「チエアリング・クロスで、貴方にお會ひする二三分前に。ジュール氏は結局コンスタンチノープルへは行かなかつたのです。先方は自分に氣がつかなかつたがす、若し氣がついたとしたら、バリーからコンスタンチノープルへ行くには、ロンドン經由はちと變なやうだねと言つてやるとこでした。」
「圖々しい奴つたらない！」セオドア・ラックソールは叫んだ、「實にもう物凄い、圖々しい奴つたらない！」

第二十二回　グランド・バビロンの酒庫

「このジュールの素性に就いて、君は何か知つてゐるかね？」一人でウイスキーを注きながら、セオドア・ラックソールは訊いた。
「も、少しも、」バビロンは言つた、「貴方に言はれるまでは、彼奴の本名がトマス・ジャクソンであつたことも知らなかつたやうに思ひます、勿論、ジュールでないといふことだけは承知してをりましたけれど。スペンサー孃が細君であつたことも、手前は確かに知らなかつたのです。が、二人の關係といふものは、ホテル内のそれ〴〵の任務の性質が絶對に要求してゐる以上に、親密であつたやうに、手前は疾うから氣取つてゐました。手前がジュールに就いて知つてゐるのは——彼奴は何時もジ

ユールと呼ぶことに致しませう――或る不思議な魅力で、彼奴が次第に重要な位置を占めるやうになつたといふだけです。明かにもう、彼奴は手前が今まで知つたうちの一番と悧口な、また一番と頭腦の働きのあるウエイターであつたのです、して、彼は特に他人のそれに立ち入ることなしに自身の威嚴を保つといふ離れ業に長けてゐたのです。斯うした報告はちと漠然とし過ぎてゐて、差し當つての面倒に對しては、別段役にも立たないかも知れませんが。」

「差し當つての面倒とは何なので？」呆けた容子をしてラックソールは訊ねた。

「差し當つての面倒は、ロンドンへ彼奴が現はれたに就いての説明だと思ひますね。」

「そりやわけなく説明がつきますよ、」ラックソールは言つた。

「どういふ風に？　彼奴がその筋へ自首する積りでゐるか、それともまた習慣の鎖で、このホテルへ縛りつけられてゐるのだと、貴方はお思ひなのですか？」

「何方でもない、」ラックソールは言つた、「ジユールはもう一度試みようとしてゐるのです――それだけのことで。」

「もう一度何を試みるので？」

「プリンス・ユージエンに對して。彼の一命に對してか、それともまた彼の自由に對してか。十中八九今度は前者の方かも知れない、殆どもうそれに違ひないのだ。プリンス・ユージエンの近況を成るべく世間へ洩れないやうにしたいといふ切望で我々が幾分不利の立場にゐることを、彼奴は察してし

まつたのだ。して、そこへ付け込まうといふのである。自分で打ち明けるところに依つても、彼奴は既に可成り大金を持つてゐるのぢやあるが、今度彼に提供された報酬といふものは莫大であるに相違ない、して、それを手に入れようと、斷然彼奴は決心してゐるのだ。先頃既に五六回、彼奴はとても豪膽者といふところを見せてゐる、自分の考へが間違つてゐないとしたら、彼奴は間もなくまた一層豪膽な行動に出るのに違ひないのだ。」

「でも、何が彼奴に出來るものですか？　まさかあの、このホテルでプリンス・ユージエンの一命を狙ふと、仰しやるのではありますまいね？」

「狙はない限りもないさ。レギナルド・デイモックが若し、一味のものを裏切るかも知れぬといふ、ほんの唯それだけの疑惑で斃れたとすると、プリンス・ユージエンとて斃れない限りはないさ。」

「でも、そりやとても言ひやうのない罪惡に違ひありません、して、ホテルに對してはとても大變な迷惑なので！」

「いかにも！」微笑ひながらラックソールは承認した。途方途徹もないこの考へを把握しようと、小男のフエリツクス・バビロンは頻りと身構へしてゐるやうであつた。

「どうしてまあそんなことが仕出來せませうね？」やがて彼は訊いた。

「デイモックは毒殺されたのだ。」

「さうです、が、あの時分にはロツコーは此方にゐたのです、して、ロツコーも一味に加つてゐたの

です。ロッコーがそれをやれるといふことは、そりや想像されることです――どうにか先づ想像されることです。でも、ロッコーなしには、そんなことはとても出來まいと思ひます。ジュールがそんなことを思ひ立つといふことさへ、てんで手前には考へられませんね。よろしいですか、グランド・バビロンのやうな所では、別段申し上げるまでもないことですが、食物はもう大勢の手を經るので、恐らくもう五十人位も殺さずに、一人だけを毒殺するといふことは、實にもう千番に一番といふかねあひの、際どい離れ業であるのです。それにまた、ブリンス・ユージエンは、今までの習慣をお變へにならない限り、何時も御自分の從者の老ハンズに御給仕を仰せつけられるのです、それ故、差上げる直前に料理の皿へ手を出さうとするなどは、實にもう危險至極なので。」

「と先づ假定して、」ラックソールは言つた、「それにしても、酒の方へはもつと容易に手が下せやうぢやないか。その點を君は考へたかね？」

「そこまでは思ひつきませんでした、」バビロンは承認した、「貴方は實に巧妙な理論家でいらつしやいますな。手前はまた偶然と、ブリンス・ユージエンが何時も御自分の目の前で葡萄酒をお開けさせになるのを知つてゐます。勿論それは、ハンズの手でお開けさせになるに違ひないので。それ故葡萄酒の假說もまた、通らないことになりますな。」

「何故といふことは分らんのだ、」ラックソールは言つた。「黑人として葡萄酒のことは何にも知らんのだし、滅多にまた飲むこともないのだが、一本の葡萄酒はそれが未だ酒庫にあるうちに、何とか惡

戲が出來るやうに思ふね、特にまた、ホテル内に共犯者があるとすれば。」

「では、貴方はまだ惡者共が一掃しきれないとお思ひなので？」

「ジュールスはまだ、この建物のうちに共犯者を有つてゐると思ふのだ。」

「で、一本の葡萄酒が、それを開けて、些か細工の跡も殘さずに、再び栓が出來ようとお思ひなのですか？」バビロンは少々嘲笑的になつて來た。

「葡萄酒へ毒を入れるのに、瓶を開ける必要はないやうに思ふね、」ラッソールは言つた、「一本の葡萄酒で誰も毒殺しようとしたことはなし、また、毒殺者として性來技倆を有つてゐるとは言へないけれども、その奸計をやるに就いては、いろ〳〵の方法が工夫出來ようと思ふね。勿論、ジュールの思はくに就いては、自分は全く間違つてゐるかも知れないけれど。」

「あゝ！」フエリックス・バビロンは言つた、「この下にある酒庫こそ、ロンドンの奇觀の一つなのです。ラックソール氏、貴方がグランド・バビロンをお買ひ取りになつた時、貴方は實に、よし歐洲で於てゞなくとも、イギリスに於ける一番と立派な葡萄酒の貯藏をお手に入れになつたといふことを、御承知あつて頂きたいので。評價をしますと、何でも六十萬にはなると思ひました。それにまた、酒庫は適當に擁護されてゐるやうに、手前は始終注意してをつたと申してよいのです。ジュールスでさへも、葡萄酒係の默許なしに酒庫へ入るといふには、非常な困難を覺えたに違ひないのです、して、葡萄酒係は到底買收出來ないのです、否、出來なかつたのでした。」

「お恥しい話ながら、私はまだ自分の葡萄酒へ眼を通してないので、」ラックソールは微笑つた、「ちよつともその方へ考へを注いだことがないのです。一度か二度、ホテルを一周するだけの勞は取りました、が、その際つい酒庫の方は省いたので。」

「そりや到底あり得ないことで！」葡萄の美酒の偉い鑑識家でもあり、また愛好者である彼に取つては、殆どもう信じられない、斯うした告白に興を覺えて、バビロンは言つた、「でも、明日は是非御覽にならなければいけません。出來れば、手前がお供を致しませう。」

「今晩でも可いではないか？」落着いて、ラックソールは促した。

「今晩！　もう大分遲うございます、ハッバードも寢てしまつてゐるでせう。」

「で、そのハッバードといふのは誰でしたね？　朧ろ氣にしかその名を覺えてをらんので。」

「ハッバードはグランド・バビロンの葡萄酒係です、」ちよつと語勢を強めてフェリックスは言つた。「四十歳の落着いた男で、彼が酒庫の鍵を有つてゐるのです。どの箱にある何の瓶も皆悉く、その年代、その素質、その値打をちやんと心得てゐるのです。して、彼は下戸なのです。ハッバードは實に珍品ですよ。彼に知らさなければどの葡萄酒も酒庫を出ることが出來ず、して、彼に知らさなければ、何人も酒庫へ這入ることは出來ないのです。少くとも手前の時代にはさうであつたので。」

「ではその男を起すことにしませう、」ラックソールは言つた。

「でも、もう午前の一時ですから、」バビロンは抗議した。

「そんなことは構ひません——君が同道することを承知してくれさへすれば。酒庫は夜も晝と同じです。ぢやに依つて、今出かけたつて差支ひないぢやないか？」

バビロンはその肩をすぼめた。「どうなと宜しいやうに、」とても懇ろに彼は同意した。

「さあ、これからそのハッバードを探すのだ——戸棚の鍵を預つてゐる、」二人一緒に部屋を出ながら、ラックソールは言つた。大分にもう遲いのではあるが、ホテルは勿論閉つてはゐなかつた。二三の客はまだ、社交室の邊りに殘つてゐた、して、二三人の疲れたウエイターは今にまだ御用を承つてゐた。このウエイターの一人が、早速その珍品のハッバード氏を探しにやられた、して、幸ひにもこの紳士は、そろ〳〵もう左樣しかけてゐたのではあつたが、現に寢んでしまつてはゐなかつた。彼は自分でラックソール氏のところへ鍵を持つて來た、して、前の主人と彼がちよつと話を濟すのを待つて、グランド・バビロンの持主、並びに前持主は、二人携へて酒庫の方へ向つた。

この酒庫といふのは、ホテルの全面積の優に半分に——ストランドの通りに隣つてゐる方の、縱の半分に亙つてゐるのである。地面が通りから河の方へ急な傾斜をなしてゐるために、グランド・バビロンは、言はゞ先づ、大河に近い方よりストランドへ近い方が深いのである。大河へ向つた方には入口の面の下に地階があり、その下に地下室があるが、ストランドへ向つた方には、地階があり、地下室があり、そのまた下に巨大な酒庫があるのである。四條の梯子段を下りて、庖厨と平行になつてゐる長い廊下を通り過ぎてから、二人は一つの扉の向ひへ出たが、それには錠が下りてゐないので、直

ぐも一つの梯子段へ出られた。この梯子段を下りると酒庫の入口があつた。この入口の外に、酒を上層へ運ぶための昇降機があり、その向ひにハッバード氏の小さな事務所があつた。到るところに電燈の裝置があつた。案内をよく知つてゐるので、鍵の束を預つてゐたバビロンが大扉を開けると、二人はもう第一の庫へ這入つてゐた——五室續きの第一の庫へ。ラックソールはその場所が氷のやうに冷たいのに打たれたのみならず、その廣いのにもまた驚いたのであつた。バビロンは、手近にあつた、長い針金へ附いてゐる、持ち運びの出來る電燈を手にし、それを振り廻して、場所の面積を示した。きらくいふその照明で、地中に隱れたこの室は、言ひやうもないやうに無氣味で、神祕的に見えてゐた、番號の打つた箱が幾列にも竝び、光は折々瓶の肩へちらくと映るまでになるまでも、ずつと遠い所まで擴つてゐた。そこで、バビロンは据ゑつけの電燈を捻つた。して、セオドア・ラックソールは自分の財産の一番と興味のあるものに對して、身親しくその踏査に取り掛つた。

斯うした興奮劑の貯藏に對して、フエリックス・バビロンが無邪氣に熱狂するのを見るのは、北英の言葉で言へば先づ「病ん目にも法樂」と呼ばれるものであつたのだ。途方もなく驚いてゐるラックソールの眼に對して、それくちやんと順序を追つて、三大陸の——否、四大陸の有らゆる葡萄酒を彼は示した、南亞殖民地の、とても素晴らしい、挑發的なコンスタンテッア葡萄酒もまた、飲物のこの最も廣汎的の蒐集に缺けてゐないのであつたから。バーガンデイの逸品から始まつて、メドック、ボルドー、ソルテルヌの赤葡萄酒に及び、それからアイ・オーギリア、竝びにピエリーのシャンペン

へと進み次にドイツの白葡萄酒やモーゼル酒、メイン、ネッカー、ノーンベルグの立派な模造シャンペン酒、次にハンガリー名代のトーケー酒、カロキッツ、ソムローアをも含んでゐる、オーストリヤ葡萄酒の有らゆる種類、次に、この上もなく純なマニザニラ、アモンテイラド、キノー・ド・バストをも含んでゐる、スペインの味の枯れたシエリー酒、次に甘口、辛口雙方のマラガの美酒、聖餐式にもよく用ひられる眞黑な「テント」をも含んでゐる、カタロニヤ產の有らゆるスペインの赤葡萄酒、オポート名代のポート酒に及んだ。次に、イタリー酒庫へと進み、ピエドモント產のバロ、、タスカニー產のキヤンテイ、ローマ地方產のオーキエト、ネープルス產の「キリストの涙」してまた、シシリー島產の、稍月竝のマーサラ酒の美味を說き立てるといふ風で、範圍も實に廣く、微細の點に及んだのであつたが、それは一々此處へ書き誌すわけにはいかない。

五室續きの酒庫の先端の方にガラス扉の入口があつたが、それを拔けると、殆ど十五六呎四方の部屋である、補助の小酒庫へ出られるのである。

「此處にも何か特殊のものがあるのかね？」二人扉の前に立つと、珍らしさうにラックソールは訊いて、室內の揃つてゐる瓶を眺めた。

「あゝ！」殆ど舌舐めずりもせんばかりにしてバビロンは叫んだ、「庫中の精粹とも言ふべきものが此處にあるのです。」

「最上のシャンペンだらうね？」ラックソールは言つた。

「さうです、」バビロンは言つた、「最上のシャンペンがあります――何處にもない程の結構な、シラの逸品が。それにしても、シャンペンを葡萄酒中のお職とする普通の誤りに、貴方も落ちていらつしたるやうですね。その名譽はバーガンデイのものなのです。この庫には、ラックソール氏――幾らだと思ひますか――一本八百金もするやうな、古いバーガンデイがあるんですよ。恐らくそれはもう飲まれるやうなことはありますまい、」嘆息するやうに彼は言ひ添へた、「王族や富豪連に取つても、餘りに高價過ぎますから。」

「否、飲まれるさ、」口早にラックソールは言つた、「君と二人で、明日一本やることにしよう。」

「それから、」容易にその道樂談をやめる氣色はなく、バビロンは續けた、「一八七三年のビイエナ博覽會で大評判になつた、一七〇六年の銘付きの、ライン葡萄酒の標本がありますよ。それからまた、とてもそんな物は他では見られない、シラズ產の素晴らしく美事なベルシヤ葡萄酒もあります。それからまた、近代のバーガンデイ酒中では一番の豪のものである、無類飛切りといふロマネー・コンテイの葡萄酒もあります。手前の記憶が若し誤らないとすれば、プリンス・ユージエンは此方に御滯在中、何時もそれを召し上がるのです。勿論ホテルの酒の目錄に載つてはをりませんので、食堂では先づ、これを賣らないことにしてをります。」

「ま、さうかね！」ラックソールは言つた、「室内へ這入つて見よう。」

その内容の貴重なために殆ど神聖になつてゐるこの石藏へと、二人は這入つて行つた、して、ラッ

クソールは妙に緊張した、物珍しさうな容子で四邊を見廻した。遙か向うに一つの鐵格子があつたが、其處から微かな光が洩れてゐた。

「ありや何だね？」きつとなつて百萬長者は訊いた。

「ありやほんの通風窓なので。風通しをよくすることは絶對に必要なのですから。」

「破れてるやうだね、さうぢやないか？」ラックソールは注意した、してから、急いでその手をバビロンの肩へかけ、「酒庫に誰かゐる。向うの、あの箱の蔭で、息をしてゐるのが聞えるぢやないか？」

天井の、唯つた一つの電燈の灯の下で、二人は漸くぢつと押し默り、聽き耳を立ててゐた。酒庫の半分は闇に包まれてゐた。やがてラックソールは、箱の間の眞中の通りをづか〳〵歩いて行つて、右手の角へ曲つた。

「出て來い、こら惡者！」低い、殆どもう毒づくやうな調子で言つた、して、蹲つてゐる人間を引き出して來た。

男であらうと思つてゐたところ、それは現在自分の娘のネラ・ラックソールであつたが、それとは知らず彼は今まで、荒々しくその手をかけてゐたのだ。

第二十三回　酒庫の出來事

「まあ、お父さん、」ネラは喫驚仰天した彼女の父に挨拶した、「恐しいその腕力を用ひる前に、人違

ひではないかどうか、ちやんと確めなければいけなかつたんですね。私、肩の骨が折れちやつたと思ひますわ。」滑稽的な苦痛の表情をして、彼女はその肩を撫で、それから二人の前へ立ち上つた。濃い灰色の着物のスカートは裂れて、汚れてゐた、して、平常はちやんと整然としてゐるネラは、帆布の避難梯を駈け下りでもしたやうに見えてゐた。機械的に彼女はその着物の皺を延し、頭髪の亂れを直した。

「これは、ラックソール嬢、」鄭寧にお辭儀をしてフェリックス・バビロンは言つた、「こりや何とも思ひがけない喜びで。」フェリックスの客間の作法は、どのやうな場合に臨んでも決して彼から去らないのである。

「ちよつと訊ねますが、私の酒藏で何を貴女はしてゐたのです、ネラ・ラックソール？」少々堅くなつて百萬長者は言つた。娘を罪人と間違へたに就て、彼は確かに幾分困つてゐたのだ、それにまた、不意を食ふといふことは彼の大禁物であり、この場合は、もう普通以上の不意打ちを食つたのであつた、最後にまた、ネラがそんな不思議な體たらくで、第三者に見られるといふことは、何とも實に面白くなかつたのである。

「申し上げませう、」ネラは言つた、「私自分の部屋で、ちよつと遲くまで讀書をしてゐたのです——如何にも蒸し暑い晩なので。ビッグ・ベンの時計が十二時半を打つのを聞きました、それから本を置いて、寢る前に少し涼むため、私の窓のバルコニーへ出かけて行きました。ぢつと靜かにバルコニー

へ寄りかゝつて——私は今四階に居るんですが——ホテルの塀とソーリズベリー小路の間にある小さな、低い中庭を見下してゐました。ところが、その中庭を忍び足で一人の人間が歩いて來るのを見て、ちよつと喫驚りしました。その中庭からホテルへは別段に入口のないことを知つてゐました、それにまた、その中庭といふのは往來の面から十五呎か二十呎下になつてゐるのです。そこで、ぢつと私は注意してゐました。その人間は塀の方へずつと寄つて行き、見えなくなつてしまひました。出來るだけバルコニーの欄干から乗り出して見ましたが、どうしても見えないのです。が、音は聞えたのです。」

「どんな音が聞えたのかね？」きつとラックソールは訊ねた。

「何か斯う鋸で挽いてゐるやうに聞えました、」ネラは言つた、「して、それは良久らく續いたのです——殆ど十五分間位でしたらう——鑢でもかけるやうな音が。」

「何で一體お前は、早速にやつて來て、私なり、また、ホテルの誰か他の者なりに言つてくれなかつたんだね？」ラックソールは訊いた。

「あら、私知らないわ、」甘えるやうに彼女は答へた、「私、それに興味を有つてたんです、そして、自分でそれを見屆けようと思つたんです。ところで今申したやうに、バビロン氏、」滿面に微笑を湛へて、今度はフェリックスの方へとその言葉を向けて彼女は續けた、「その音は大分に長い間續いたんです。やがてそれは止みました、そして、その人間は再びまた塀の下から現はれて、中庭を渡り、

何かの手段で向ひの塀へ攀り、それからまた、忍び返しを越えてソーリズベリー小路の方へ下りました。それで先づほつとしました、現にホテルへ押し入つては來ないと分つたので。除々と彼はその通りをやつて行きました。恰度そこへ、巡査が一人やつて來ました。『今晩は、』彼が巡査に言ふのが聞えました。して、マッチを一つ下さいと言ふのでした。巡査がマッチを提供すると、一方の男はそれで煙草を點けて、ずつとまたあの小路をやつて行きました。私の窓から首を延すと、バビロン氏、河岸通りを突つ切つて、河の欄干へ寄りかゝつてゐるのを私は見ましたが、其處で彼は誰かに話をしてゐるやうでした。彼はそれから、河岸通りをずつとウエストミンスターの方へ行きましたが、それ限りもう見えなくなつてしまひました。戻つて來るかと一二分待つてゐましたが、別段戻つても來ませんでした。そこで私は、こりやいよ〳〵事の詮索に取り掛る時だと思ひました。直ぐさま階下へ行つて、中庭を抜けて、ホテルの外へソーリズベリー小路へ出て、あの忍び返しを見ました。向う側に梯子があつて、それを使へ、――忍び返しを乘り越えてしまつた以上は――あの中庭の方へ下りるのは、實にもうわけはないのでした。誰かゞ、あの通りをやつて來て、あの忍び返しを乘り越えようとしてゐるところを捕へられやしないかと思つて、そりやとても心配したのでした、が、誰もやつて來ず、スカートをちよつと破つた位のもので、どうにか先づそれを越してしまひました。忍び足で、あの中庭を渡りました、して、地面へ寄つた、私の窓の殆ど眞下の壁のとこに、長さ一呎、幅十四吋位な鐵格子のあることに氣づきました。近くに別段他の鐵格子はないのだから、あの怪賊は何かの目的が

あつて、この格子に鋸をかけて行つたに違ひないと思ひました。力を出してそれを搖つて見ましたすると、別段喫驚もしませんでしたが、その大部分が抜け落ちて、人が一人潛れる位な場席が開いたのでした。それを潛ることに私は決心致しました、今はもう、そんなことしなければよかつたと思ひますけれど。貴方これまでスカートを着けて　さい穴を潛らうとなすつたことございまして、如何でございますか、バビロン氏？」

「生憎とその經驗はございませんので、」再たしてもお辭儀をし、手近にあつた瓶を一本、ぼんやり取り上げながら、フェリックスは言つた。

「そりやまあ御幸福といふもので、」落着き拂つてネラは再び言ひ續けた、「全三分の間といふもの、あの格子の中で、私はもう死ぬかと思ひましたよ、父さん、肩だけ中へ這入つて、餘部の體はすつかり出たまゝで。でも、到頭、とても凄まじい苦しみをして、どうにか向うへ抜けますと、まるでもう生心地もなく、この大變な穴倉へ落ちてしまつたんです。それから、今度はまあどうしたらいゝと思つてをりました、あの怪賊が戻つて來るのを待つてゐて、先方が若し這入らうとするなら、衣嚢鋏で刺し殺してやらうかしら、それとも、大聲を擧げて、一同を起さうかしらと。何よりも先づ、私は破はれた鐵格子を舊の所へはめました、それからマッチを擦りますと、自分はもう無數の瓶の中へ這入つてゐるのに氣づきました。マッチは消えてしまひました、他にはもう一本もないのです。仕方がないから、一隅へ坐つて、ぢつと考へました。待つてゐて、あの怪賊が戻つて來るかどうかを見屆けよ

うと決したその途端に、忽ち跫音が聞え、それから聲が聞えて、貴方がたが這入つておいでになつたのです。私もうぎよつとなつてしまひました、殊に、バビロン氏のお聲と分つ時には。私何も貴方がたを驚かす積りぢやなかつたのです。瓶の蔭から跳び出して行つて、『ばあ！』とでも言つたなら、それこそ貴方方は、氣を失つてしまつたかも知れないんです。貴方方が喫驚なさらないやうに、溫和に斯う私のゐることをお知らせする方法はないものかと、それを考へるとこだつたのです。でも、お蔭でその面倒は省けましたんですわ、父さん。貴方に聞える程にも私本當に、そんなに高い息をしてゐましたでせうか？」

娘はその不思議な物語を終つた、して、酒藏には瞬時の沈默が續いた。彼女の最後の質問に對しては、ラクツソールは唯點頭いて、然うと知らせるだけであつた。

「ところでネラ、お前、」やがて百萬長者は言つた、「大變に骨の折れる體操をやつてくれて、何とも御苦勞でしたね——何とも實に御苦勞でしたね。でも、お前は床へ就いた方が可いと思ふね。重大な難儀がこれから湧いて來やうといふのだ、最後の一弗を賭けても誓ふがね。」

「でも、强盜でも這入つて來ようといふのなら、私、是非それを見たいんですわ、父さん、」ネラはかき口說いた、「强盜がそのまゝ捕りおさへられたところを、私見たことがないんですもの。」

「こりや强盜沙汰どころぢやないんだよ。强盜沙汰などよりずつと困ることだらうと思ふのだ。」

「ぢや、何です？」彼女は叫んだ。「人殺しですか？　放火ですか？　ダイナマイトの爆發ですか？

まあ、實に素敵ね！」

「バビロン氏の話に依ると、ジユールは今ロンドンにゐるのだよ、」暫かにラツクソールは言つた。

「ジユール！」聲を潛めて彼女は叫んだ、して、その調子は急にこの上なしの眞劍に變つた。「燈火を消して下さい、早く！」スヰツチへ跳び付いて、彼女は酒庫を闇にしてしまつた。

「そりや何のためで？」父は言つた。

「戻つて來ると、燈火を見て、逃げ出してしまひませうから、」ネラは言つた、「それでは何にもなりませんからね。」

「左樣でございますとも、ラツクソール孃、」バビロンは言つた、してその聲には、娘の賢しさに泌み泌み感心してゐるといふ調子が見えたので、ラツクソールは流石に得意の面持ちで聞いてゐた。

「さ、よくお聞きよ、ネラ、」酒藏の眞暗闇の中で、娘をずつと自分の方へ引寄せて彼は言つた、「ジユールがひよつと、葡萄酒の或る瓶へ、惡戯をしようとしてゐるのではないかと思ふのだ——ブリンス・ユージエンが召し上がるかも知れぬ一瓶へ。ところで、お前が見た男はジユールであつたと思ふかね？」

「私前には、ジユールであらうとはちよつとも氣づきませんでした、が、貴方がその名を仰しやるなり、こりや何うもさうらしいと思つたのでした。さうですとも、そりや確かにジユールに違ひありません。」

「ところで、ちよつとまあ私の言ふことをお聽きよ。もう一刻の猶豫もないんだ。來るとすれば直ぐもうやつて來るに違ひないのだ――さうすれば、お前も手助けをしてくれられようといふもので。」ジユールの策戰がどう出るかを、ラックソールは說明した。あの男が戻つて來ても、別段手出しをしてはいけない、ガラス扉の向う側からぢつと唯見てゐる方が可いと、彼は提案した。

「言うて見れば先づ、ジユール氏を生捕りになるお積りなので？」罪人を扱ふこの新奇な方法にちよつと喫驚したやうにバビロンは言つた、「確かにあの、」彼は言ひ添へた、「貴方のお考へを警察へ報告して萬事先方へお任せになつた方が、ずつと簡單で、樂でせうと思ひますが。」

「君、」ラックソールは言つた、「警察の手を借りず、大分ともう深入りをして來たので、此處まで來て、今更その手を煩はすのは、我々として得策ぢやないんだ。それにまた、是非聞きたいと言ふなら申し上げるが、私は特に、自分であの惡漢を捕へたいといふ願望を有つてゐるんだ。君とネラを此處へ置いて行きませう――何もかも見屆けなければ、ネラは承知しないんだから――で、自分はジユールがこの穴倉へ這入つて來た以上、また此處から出られないやうに――兎も角、あの鐵格子からは出られないやうに、手配をします。君達は、大酒庫の方の、ガラス扉の向う側の方へ陣取つてゐた方がよいです、先方からならよく觀察が出來るから。自分はこれから直ぐ跳んで行きます。君達はたゞ、彼奴が何をするか、一々ちやんと注意してゐればいゝのだ。ホテル内に一味の者があるとすれば、誰がそれであるか、その手段で大抵發見出來やうしいふものだ。」

マッチを點けて、手でそれを翳しながら、ラックソールは二人を小酒庫から送り出した。ところで、このガラス扉へ室外から錠を下せば、彼奴は此方へは逃げられない、ガラス板が小さいし、格子も頑丈に出來てゐるから。だから、彼奴が若しこの係蹄へかゝつて來れば、君達二人は少しも身に危險を招くことなく、彼奴が現に死に物狂ひになつて悶いてゐるのを見られるといふものだ、でも、姿はまあ見せない方が可いかも知れない。」

もう瞬時すると、フエリックス・バビロンとネラは、酒庫の暗がりへ取り殘された、向うの方へ行くセオドア・ラックソールの跫音を聞きながら。ところが、この跫音が全く未だ消えきらないうちにも一つの跫音が彼等の耳へついた――小酒庫の鐵格子が取り外されてゐるところなのだ。

「お父さんが間に合へばよござんすがね、」フエリックスは耳打ちした。

「靜かに！」娘は彼に注意した、して、二人竝んで、ぢつと息を殺して屈んだ。

一人の男が注意に注意をし、が、頗ると手際に、鐵格子の穴へその體を入れた。此方からはたゞ、暗がりの中にぼんやりとその姿が見えるばかりである。すると、首尾よく酒庫内へ這入れたもので、些か躊躇せず、電燈のスヰッチへ歩み寄り、灯を點けた。擬ふかたなくそれはジユールであつた、して、彼は酒庫の地理を知り拔いてゐた。大膽不敵なこの前ウエイターが、斯くも圖々しく尊い酒庫のあたりをあちこちするのを見た時、バビロンはやうやくにしてぎよつとなるのを抑へたのでした。ジユールは直ぐさま、十七號と番號の打つてある小さな箱へと進み寄り、其處から一番頂上の瓶を取り

出した。

「ロマネー・コンテ――プリンス・ユージエンの酒で！」とても低い聲でバビロンは叫んだ。

明かにその目的のために持つて來た機械で、ジユールは手際に、また手早く封を切つた。彼はそれから、黑い膏藥のやうなものが入つてゐるらしい、小さな遍平い筐を衣嚢から取り出した。この膏藥を指へ着け、瓶の首の上のとこの、栓が恰度ガラスへふれる處へそれを塗つた。直ぐさま彼は巧みに封をして、瓶を舊の位置へ戻した。そこで、燈火を消して、彼は穴の方へと向つた。彼が其處へ體を入れると、ネラは叫んだ、「結局逃げてしまひます。父さんは間に合はない――私達で捕り抑へなくては。」

が、注意の化身ともいふべきバビロンは、力强く、が、依然として鄭重に、實にもう向う見ずと見てゐるこのヤンキー娘を押し止めた、して、彼女がその手を逃れないうちに、、身輕なジユールの姿は消えてしまつた。

第二十四回　葡萄酒の瓶

小酒庫の外から彼奴を捕へる筈であつたセオドア・ラツクソールはといへば、出來るだけ早く酒庫から地階へ進んで行き、方庭の側からホテルを出て、その方庭を通つてソーリズベリー小路の先端へ出た。ところで、グランド・バビロンの構造が莫迦に大きいために、斯うして通り過ぎなければならない距離だけでも、優に一哩四分の一足らずに上つた、して、それはまた、とても澤山の梯子段、殆ど二十以上の曲り目、夜もその時分になつては既う先づ以つて眞暗闇といつて可いやうな、五六の廊下を含んでゐたので、どんなに急いでも、五分以下では目的の所まで行かれない筈である。實際のところ、彼がソーリズベリー小路の先端に達しないうちに、六分といふものが既う過ぎてしまつたのである、廊下で迷子になつてゐた泥醉の客にかけられた質問のために、殆ど一分は遲れてしまつたので。誰も知つてゐるやうに、ソーリズベリー小路には、先端の近くの處に、急な曲り道がある。ラツクソールは可成りに速い駈け足の速力でこの角を曲つた、曲つたは可いが、不幸にして彼は、つい先刻、鄭重にジユールにマツチを提供した、その同じ巡査に突き當つてしまつた。巡査はその時あまり素直な氣持にはなつてゐないやうだつた。

「おい！」もと〳〵疑ひ深いのを、燕尾服を着た帽子なしの男が、劇しくあの小路を駈けて行くのを見て、愈よ怪しいと思つたらしいのだ。「どうしたのだ？　そんなに急いで何處へ行くのか？」して、無理にセオドア・ラツクソールを押し止め、穴の開く程その顏を見た。

「ところで、警官、」落着いてラツクソールは言つた、「御冗談はどうかお措き下さるやうに。もう一刻の猶豫も出來ませんのですから。」

「失禮をしました、」躊躇しながらではあり、餘り機嫌好くではなかつたけれど、巡査は兎も角斯う言つた、して、ラツクソールはそのまゝ進んで行くことを許された。ジユールを係締にかける百萬長者

の計畫は、梯子であの小さな低い中庭へ下り、トム・ジヤクソン氏が酒庫へ這入つてしまふまで、何處ぞ便利な煉瓦塀の蔭へ身を隱さうといふのであつたのだ。彼はそれ故、素早く忍び返しを――自分のホテルの忍び返しを乘り越えて、こつそり梯子を下りようとしてゐると、恰度その途端に、手荒く彼の着物の襟を引つ捕へ、とても亂暴に、ぐい〳〵彼を引き戻すのでした。實際を言ふと、セオドア・ラックソールは巡査はゐないものと思つてゐたのでした。安寧のその守護者殿は、ラックソールの擧動を不審に思つて、そつと後をつけて來たのだ。百萬長者が忍び返しを攀るのを見て、唯事ならじと勢ひ込め、見苦しくも斯くラックソールはその手に捕へてしまつたのである。セオドアは百方言譯けもし說明もし、痰呵も切つて見たけれど、一向にその甲斐はなかつた。頑强なこの巡査を納得させる途は唯一つしかなかつた――卽ち、ラックソールは一緒にホテルへ歸つて、其處で自分の身分を證明するより外はなかつた。その時若しラックソールが、グランド・バビロンの持主のラックソールであるといふことになれば、それでもう結構至極――巡査は如何やうにもお詫びを致すと約束した。さう言はれて見れば、この途を取るより仕方がなかつた。自分の身分を證明することは、勿論もう二三分で濟んでしまつた、その後でラックソールは、當惑はしてゐるものゝ相變らず冷靜になり、再た舊の忍び返しへ戻つたが、そのうち巡査の方はまた別の持場へ行き、多分は同僚の一人にでも會つて、無駄話でもしてゐたのであらう。

一方再たジュールの方は、戸外で行はれてゐた爭論や、自分が冒してゐる特別な危險など一向に御

存知なく、ラックソールが初めまだ忍び返しのところへ行かないうち、彼が既に行き着いてゐた酒庫へと、勿論現に入つてゐたのだ。酒庫から彼が出ることが、ラックソールが忍び返しを離れてゐた恰度その時になつてゐたのは、ジュールに取つて何とも實に幸福だつたのである。ラックソールが二度目にあの小路をやつて行くと、彼は一人の人物が、自分より五十碼ばかり先へ河岸の方へ歩いて行くのを見た。直ぐさま彼はそれがジュールであり、巡査のお蔭で一足遲らされたなと見て取つた。彼は駈けた、して、ジュールもまた、後から追つかけられるのを聞きつけて、駈け出した。前ウエイターはとても速いといつたらなかつた。河岸の欄干の或る個所を目がけて彼は駈けて行き、綺麗にその欄干を跳び越えて、河へ飛び込んだらしかつた。これにはラックソールも實に喫驚してしまつた。

「自殺をするほどの絕對絕命になつてゐるのかな？」駈けながらラックソールは叫んだ、が、ほんの一秒すると、小蒸氣が煙を吐く音で、ジュールは、未だ自殺まで追ひ詰められてはゐないと知つた。百萬長者が河岸通りを横切ると、彼は蒸氣の煙筒が河の欄干の蔭から出て行くのを見た。中流へそれは浮び出で、ロンドン橋の方を指して行つた。河には靜かに霧がかゝつてゐた。ラックソールはもうどうすることも出來ない……

グランド・バビロンの地内での智慧競べの試合で、一度はロッコーに依つて、一度はまたジュールに依つて、二度も散々な敗北の憂き目をラックソールは見たのであつたが、自分の計畫のこの度の失敗――餘計な人間の干涉と純然たる不運から起つた失敗に對して、さして深く身を責めるわけにはい

かなかつた。それ故、その出來事のために、別段その夜の睡眠を妨げられることはなかつた。

その翌日彼は、その人と自分の間には、かけ隔てなき友情の念が存してゐたプリンス・アリバートに會ふやうにして、前夜の出來事、殊にあの、ロマネー・コンテイの葡萄酒の瓶に對する惡戯の件を彼に打明けた。

「昨夜も、プリンス・ユージエンと御一緒に御食事をなさつたことゝ思ひますが？」

「致しました。で、不思議なことに、二人はあのロマネー・コンテイの一瓶をやつたのでした、ユージエンがとても好いてゐる、美事なあの葡萄酒を。」

「今晩も、御一緒に御食事をなさいませうか？」

「大低致します。今日ばもう、此方での我々の最終の日となりはすまいかと思ひます。明日早くボーゼンへ歸りたいやうに、ユージエンが申してをりますので。」

「斯ういふことには御氣づきになりませんでしたか、プリンス、」ラックソールは言つた、「ジユールが若し、貴方の甥御を毒殺することに成功したならば、彼は恐らくまた、貴方を毒殺することにも成功するであらうといふことを？」

「そこまでは思ひつきませんでしたよ、」アリバートは笑つた、「でも、先づさういふやうに思へますな。彼奴が特に狙つてゐる獲物を射とめる以上は、ジユールはもう、そのお相伴としてどんなものをやつつけやうが構はないやうです。が、その點に就いては別に心配するには及びますまい。貴方はち

やんとその瓶を御存じでせうし、直ぐさまそれを捨てゝおしまひになれませうから。」

「でも、自分はそれを捨てるつもりはありませんよ、」落着いてラックソールは言つた、「プリンス・ユージエンが、今晩ロマネー・コンテイを召し上るといふことであれば——大低さうなさることと思ひますが——自分は、きつかりあの瓶をプリンスに——從つて、また貴方にさし上げるつもりでをります。」

「では、我々の意志に反して、我々を毒殺なさらうといふのですか？」

「といふ次第でもないので、」ラックソールは微笑つた、「自分の考へはホテル内の共犯者を發見しようといふのです。葡萄酒係のハツバードに就いては、既にもう樣子を探りました。ところで、特に今日といふ日に、ハツバード氏が病氣で床に就いてゐるといふのは、何とも實に變なことゝお思ひにはなりませんか？　ハツバードは何でも、夜中に續發した胃痙攣のために惱んでゐるといふことです。何の原因か、分らないと言つてをります。酒庫に於ける彼の位置は今日、ほんの青年ではあるが、どう見ても可成りはしこい青年である彼の助手が取ることになりませう。申すにも及ばぬこと、その青年に對しては、我々は精々注意することに致しませう。」

「ちよつとお待ち下さい、」プリンス・アリバートは遮つた、「毒が既に廻つてゐるやうに、何でお考へになるのか、私には諒解出來ませんな。」

「その瓶は今、或る專門家が篤と檢査をいたしてをりますが、その者に對して、ジユールがその口の

緣へ塗つた物を、成る可く取り除かないやうにといふ命令を下してあります。書間のうちに、その瓶は窃つと舊の箱へ收めることになりませう。自分の考へでは、葡萄酒をたゞ注ぐだけで、頗ると強い毒を幾分取つて、酒盃へ入ると、忽ち恐ろしいものになるといふやうに思ひますので。」

「それにしても、給仕の召使が、注ぐ前に瓶を拭くに違ひないのですが？」

「拭くにしても、極く粗末にやるかも知れませんな。それにまた、その塗つてある物をすつかり拭き取つてしまふといふことは、到底ありさうもないことです、その幾分は緣の内側へ巧に塗り込んでありませうから。それにまた、給仕の者が瓶を拭くことを忘れたとしたらどうで？」

「プリンス・ユージエンの食事の際には、何時もハンズがお給仕をするのです。その役目こそ、忠實なあの老人が自分の身一つに收めてゐる光榮なのでして。」

「が、假りにハンズが——」ラックソールは言葉を停めた。

「ハンズが共犯者ですつて！　ラックソール氏、そりやとてもあり得ないことです。」

その晩プリンス・アリバートは貴賓室の善美を盡した食堂で、甥の殿下と一緒に食事をした。ハンズがお給仕をした、料理は他の召使の手で入口のとこまで運ばれて。甥は妙に悄氣返つて、言葉少なであるやうに、アリバートは思つた。前日に、サムソン・レギーとの無益な會見の後で、プリンス・ユージエンが如何にも絶望的に、「ほんの偶然のことに見える」やうに、自殺をすると嚇した時、アリバートはこれを止めて、誓つて左樣いふことはしないやうにと約束させたのでした。

「殿下には、どのお酒を召し上りで？」肉汁が出ると、老ハンズは慰めるやうな調子で訊いた。

「シエリー、」レブリンス・ユージエンは手短かに命令した。

「それから後でロマネー・コンテイを？」ハンズは言つた。アリバートは急いで見上げた。

「否、今夜は止そう。今夜はシラリをやつて見よう、」プリンス・ユージエンは言つた。

「結局ロマネー・コンテイをやることにしようよ、ハンズ、」彼は言つた、「シヤンペンよりはその方が口に合ふから。」

天下に類なき、名代のその葡萄酒は、蒸し燒きの肉と一緒に出された。籐の籠へ入れて大事さうに老ハンズはそれを持つて來、數學的の精確で栓拔きをぐつと刺して栓を拔き、それをば主人の目の前へ出した。ユージエンは點頭いた、して、其處へ置けと彼に命じた。緊張した興味を以つてアリバートは凝つと見てゐた。ハンズがまさかに忠義の化身そのものでないとは、一刻も彼は信じられなかつた、それにしても、ラックソールの言葉が、心ならずも一種の不安を彼に起したのであつた。その瞬間にプリンス・ユージエンは卓子越しに呟いた——

「アリバート、約束は徹回しますよ。宜しいですか、徹回しますよ。」

ハンズからはその眼を離さず、アリバートは強くその頭を振つた。白髮の老僕は、そのナプキンでほんのお役目にロマネー・コンテイの瓶の首の邊りを拂つて、酒盃へ注いだ。アリバートはわなゝく頭から足まで震へた。

ユージエンは酒盃を取つて、燈火の方へ高く上げた。
「飲まないやうに、」非常に溫和かにアリバートは言つた、「毒が入つてゐるから。」
「毒が入つてゐる！」プリンス・ユージエンは叫んだ。
「毒でございますつて！」深い驚愕と心配の容子でハンズは叫んだ、して、彼はその酒盃を取つた。
「到底あり得ないことでございます。手前自身で瓶を開けましたので。誰も他に手を觸れた者はございません、して、栓も完全でございました。」
「確かに毒が入つてゐる、」アリバートは繰り返した。
「殿下に對して、何とも失禮な申分ではございますれど、」ハンズは言つた、「この葡萄酒が毒であると仰しやるのは、手前が殺害者であると仰しやるも同じです。毒の入つてゐないことを證明致しませう。手前がそれを頂きます。」
して、彼はその酒盃をわな〳〵震へる脣へ上げた。その瞬間にアリバートは、老ハンズが兎も角ジユールの共犯者でないことを知つた。自分の席から跳び立つて、彼はその酒盃を老僕の手から打落した、して、その碎片はちやら〳〵いふ音を立てゝ半ば卓子の上へ、半ば床の上へ落ちた。プリンスと僕とは、傷ましさうに凝つと押し默つて互に顏を見合せてゐた。ちよつとした音がした、して、アリバートは側を見た、ユージエンの體が椅子の右手の方へ、よろ〳〵と滑り落ちるのを彼は見た、プリンスの兩腕は生氣なく棒のやうになつて垂れてゐた、彼の眼は閉ぢてゐた、彼は全く氣を失つて

ゐた。
「ハンズ！」アリバートは呟いた。「ハンズ！　こりやどうしたことで？」

第二十五回　蒸氣船

蒸氣船でホテルから脫走を遂げようといふトム・ジヤクソン氏の考へは、それだけでは先づ立派なものであつた、が、セオドア・ラックソールの方ではまた、なに、甘いものだ位に思つてゐた。セオドア・ラックソールは特別上機嫌で、自分は愈よグランド・バビロンの前ウエイターを捕へる、確實正確な手懸りを握つたものと推測した。ロンドンの港に就いては、彼は何にも知らない、が、幾分小さいけれども、遙かにずつと複雜したニューヨークの港の樣子には大分とよく通じてゐた、して、ジユールの蒸氣船を引捕へるにも、別に大した困難はない筈だと思つた。隈なくその樣子に通じてゐない人々に取つては、テムスの大河と、ロンドン橋からグレイヴゼンドに至るその船渠は、まるで廣い船の荒野——三檣船などを首尾よく隱すのも朝飯前であらうといふ廣い荒野のやうに思へるのである。斯やうな人々に取つては、大河で小つぽけな小蒸氣を探すのは、一束の枯草の中で、一本の針を探すと同じであるかも知れない。ところが實際は、聖キヤザリンの波止場とブラックウオールの間には、郊外に住んでゐる人がその裏庭を知つてゐるやうに、文字通りにテムスを知り——數千の船もちやんとよく覺えてゐて、半哩位な先きから一々その名が言へ、あの大河流に於ける船の一切の

動靜に通じてゐ、ロンドン塔からグレイブゼンドに至る間の有らゆる船長、有らゆる機關士、有らゆる艀の船頭、有らゆる水先案内、有らゆる公認の船人足、有らゆる認可のない無賴漢、それからまだいろ〳〵なものを知つてゐる數百人の人があるのである。テムスの斯うした消息通に依つては、水上に於けるちよつと變つた出來事でも、すぐもう注目され、評判されるのである――艀が人手に渡れば、きつともうその賣値段が推測され、それに就いての新しい持主の思はくが察しられるのである。單に見るといふ興味のために、この人達は河を觀察してゐる習慣なのである、して、何事に就いても晩に長屋の角に集る女房連のやうに喋り合ふのである。キャッスル航路の一等運轉手が免職になれば彼がどう船長に言つたか、船長の老爺がまたどう彼に言つたか、してまた、二人がどう船舶局へ申し立てたか、ちやんと彼等は言へるのであつた、して、その事件を片付けてしまふと、彼等はまた面白さうに、西印度第二號船渠の外で、ビル・ステイーブンドの奴がその荷足船を沈めたのは、偶然なのか故意なのかと、その評判の方へ轉じるのである。

トム・ジャクソン氏を乘せて行つた蒸氣船を突き止める、何等滿足な手段をラックソールは有つてゐなかつた。夜半後間もなく、空はどんよりと曇つてしまひ、霧も少し下りてゐたので、それが多分黑く塗られた、六十呎ばかりの長さの、低い船であるといふこと知ることが出來ただけであつた。夜中づつと、彼は自分で親しく河を上つて行く船へ目をつけてゐた、して翌日の午前中も、自分に代つて一人の男に、蒸氣船がウエストミンスターの方へ行つたならば、何時でも自分に知らしてくれと

命じておいた。正午にプリンス・アリバートと會談した後で、彼は貸しボートで河を下つて、稅關の方まで漕いで行つた、して、ひよつと自分が探してゐる船であらうと思はれる船はゐないかと、到る所覗き廻つた。が、一向に何にも見つからなかつた。それ故、彼は先づ、あの怪船は何處か稅關の下流にゐるに違ひないと思つた。稅關の段々の處で彼は上陸した、して、長官のすぐ次位といふ一人の上官に――ニューヨークで嘗て餐應したことがあり、ロンドンでも、或る用件でロイドの會社で會つたことのある一人の上官を訊ねた。この大官の大きな、が、むさ苦しい事務室で長い會話が行はれたが、その際ラックソールは、大分にその說服的手腕を振つたので、その結果、やがてそのお役人が卓上の呼鈴を鳴らすといふまでに立ち到つた。

「ヘイゼル氏へ――三百三十二號室の――ちよつと話があると言つてくれ、」呼鈴の音に應じてやつて來た給仕に向つてその役人は言つた、それからラックソールの方を向いて――「申し上げるまでもないことですが、こりや全く非公式なのですから。」

「そりや勿論承知なのですとも、」ラックソールは言つた。

ヘイゼル氏は這入つて來た。紺サージの服を着け、蒼白い、鋭い顏をし、褐色の口髭と、ちよつと綺麗な褐色の顎鬚を生やした、三十恰好の青年で彼はあつた。

「ヘイゼル氏、」高官は言つた、「セオドア・ラックソール氏を御紹介致しませう――豫ねて御名前は承つてゐるだらうが。ヘイゼル氏は、」ラックソール氏の方へ向つて彼は言つた、「我々の外勤部員

——所謂檢査官の一人なのです。今は恰度夜勤をやつてをられます。大河にボートを一艘有つてをり部下も二人程ゐて、どんな船でもそれへ乘り込んで、檢査をする資格を有つてゐるのです。此處とグレイヴゼンド間のテムスに就いては、ヘイゼル氏とその乘組の者は、何でももう知らないことはないのです。」

「お目にかゝることは何とも嬉しいことで、」無雜作にラックソールは言つて、二人は握手した。ヘイゼル氏が少しも固くなつてゐないのを見て、ラックソールは滿足した。

「ところで、ヘイゼル、」高官は續けた、「今晩大河での、ちよつとした祕密の探檢に際して、ラックソール氏は君の助力を賴みたいのだ。今晩は暇をやりませう。一つには、君も定めしその事件を面白く思ふだらうといふのと、一つにはまた、君が全くそれを非公式の事と見て、それに就いてお喋りはしないやうに君を信賴出來ると思つたから、實は先づ君を迎ひにやつたわけなので、可いかね？ ラックソール氏のお役に立つておけば、別段後悔するやうなことはないと思ふね。」

「御事情はよく呑み込めたやうに思ひます、」ちよつと微笑つてヘイゼルは言つた。

「それにあの、」高官は言ひ添へた、「用件は非公式ではあるけれど、君の官服の外套を着けても可いだらうよ。解つたかね？」

「よく解りました、」ヘイゼルは言つた、「どんな場合でも、自分は何時もさう致しますので。」

「ところで、ヘイゼル氏、」ラックソールは言つた、「自分と一つ晝餐を附き合つて下さいませんでせ

うか？ お差支なくば、貴方が始終行きつけの所へ參りたいもので。」

斯くてセオドア・ラックソールと稅官の外勤書記ジョージ・ヘイゼルとは、ロンドン下町のトマス簡易料理店で骨付羊肉とコーヒーで一緒に晝餐をやつたのであつた。百萬長者は間もなく、鋭い頭腦の、なか〳〵に慧眼な人物を捉へたことを知つた。

「ちよつと伺ひますが、」そろ〳〵煙草を取り出すといふ段になると、ヘイゼルは言つた、「雜誌記者といふものはあれで、少しは正確なものでせうか？」

「そりやどういふ理由で？」ちよつと煙に卷かれてラックソールは訊いた。

「さうですな、貴方は百萬長者でいらしやるのでせう——所謂一流どころの。その百萬長者に就いての記事、また、その方々との會見記事などに、個人用の鐵道とか、ハドソン河の蒸氣の快走船とか、大理石の厩とか、何とか彼んとかいろんなことが出てゐますが、貴方もさういふ物をお持ちなのでせうか？」

「自分もニュー・ヨーク・セントラルに個人用の鐵道を有つてゐます、それからまた、二千噸の三檣縱帆快走船も有つてゐますよ——ハドソン河にではないけれど。今それはイースト・リバーの方にあるんで。それにまた、自分の山の手の屋敷の厩も大理石で裝置してあるに違ひないと言はなければなりませんな。」ラックソールは笑つた。

「あゝ！」ヘイゼルは言つた、「これで初めて僕も百萬長者と一緒に晝餐を食つてゐると思へますよ。

斯ういふ事實は――それ自身別に重要なことではありませんが――妙に空想に訴へるものでしてね。これで初めて、貴方も本當の百萬長者と思へますよ。貴方の方でも多少身邊のことをお話し下すつたのですから、御禮として、僕の方のことを申しませう。僕は年三千の俸給で、時間外の働で年六百位また餘計なものが貰へるんです。マスコヴイー・コートへ二部屋ほど借りて、自分一人で住んでゐるんです。好き勝手なことをしてゐるんです。務めの方は、僕はもう出來るだけ少しの仕事しきやしないんです、主義として――それはまるで我々と、一番巧い汁を占めてゐる長官連との戰爭のやうなものですよ。先方では此方をしてやらうとし、此方ではまた先方をしてやらうとする――大體まあ同じになるんでして、これで戰爭といふものは大體公平なものでしてね、お役所には、十誠なんてものはないんですから。」

ラックソールは笑つた。「今日の午後出拔かれませんかね？」彼は訊いた。

「可うございますとも、」ヘイゼルは言つた、「老爺の一人に、ちよつと署名をして貰へば、それで可いんですから。」

「ところで、」ラックソールは言つた、「自分と一緒に、グランド・バビロンへやつて來て貰ひたいのです。そこで愈よ、自分の小事件に就いても篤とお話が出來ようといふもので。君のボートで行くわけにはいきませんかね？　乘組の方にもお目に掛りたいんで。」

「そりやもう差支ありませんとも、」ヘイゼルは言つた、「僕の部下の二人といふものは、とても呑氣

な、ぼんやりした連中なんでして。大食ひで、ビールときたら目がないんです、が、大河はよく知つてゐますし、仕事はちやんと心得てゐます、それに、賃銀さへ貰へば、卑劣なことでない限り、何でももうするんです、急き立てなどしないでも、進んでどし〳〵やるんでして。」

その晩、暗くなるなり直ぐ、セオドア・ラックソールは新しい知合ひのジョーヂ・ヘイゼルと一緒に、その二人の部下の乘り込んでゐる、黑塗の稅關の艀の一つで船出した――部下といふのは二人とも、大河では木戸御免といふ連中で、唯の陸者の夢にも知らない特權を帶びてゐるのである。曇つた蒸し暑い晩で、恰度、今滿潮時を過ぎたばかりの、緩い潮流を照らすやう、星一つ出てゐないのでした。碇泊してゐる蒸氣船の大きな姿が――主として近海汽船會社とアバーデイン航路のそれなのだが――水の中から高く浮いてゐた――その繫いである浮標のところで物憂げに悶きながら。左右には、むき出しの倉庫の壁が、變てこな起重機の腕をぬつと出して、灰色の崖のやうに水流から立ち上つてゐた。西の方には、倫敦塔橋が凄じいその弓門と、その上へまた、地面から百五十呎といふ高さの、宙に浮いた步道を控へて、大河へ架つてゐた。東の方とロンドン・ブールの方には、煙筒と帆柱の森がぼんやりと薄氣味惡い空に見えてゐた。たつた一人の男が大きな二挺の櫂で操つてゐる大荷足船が、到る所をのろのろと河下へ下つて行く。折々、曳船がその赤い線の信號機を閃めかし、その後へとても重さうな荷足船を幾艘も從へて、忙しさうに音を立てゝ行く。するとまた、マーゲート通ひの客船が舷窓といふ舷窓から電燈をきらつかせ、二千人といふ疲れきつた遊山客の荷を載せて、つつ

と曲つて碇泊する。一切の物に一種神祕な容子が立て込めてゐた——不思議と離隔と不可解の氣分が漂つてゐた。廣い、扁平い小さなボートが巨大きい船體の影の下を、張り廻した大索の下を、青い粘土のついた浮標の中を通つて進んで行つた時、ラックソールは殆どもう、世界でも一番と平凡な都である、ロンドンの中心にゐるとは信じられなかつた。十時といふこの無氣味な刻限に、見たところ實に茫漠たる廣いこの水上では、どんな事が起るかも知れないといふ、妙な考へを彼は抱いてゐた。ほんの一哩か二哩の先きの所では、人々が芝居の座席へ納つて、喜劇の狂言に見惚れてゐ、二三碼先きのカノン・ストリート停車場ではまた、彼がそろ〳〵その名を覺え出して來た、樣々な頗ると上品な郊外住宅へ向つて、靜かに汽車へ乘り込むところであるといふことは、全くもう信じられないやうに思へた。我々の平生の周圍とは甚だしく異つた周圍の中へ這入ると、時々我々の胸の中へ湧いて來る、何か斯うまるで別世界にゐるやうな、天へでも昇つたやうな感じを彼は有つた。この上なしといふ平凡な物事が——人が呼んでゐるとか、鎖が機械の溝孔を通るとか、遠くでサイレンが鳴るとかいふやうな物事が——彼の耳にはもう、不吉の意味を含んだ、恐ろしい魔の音のやうに響いた。船縁から褐色の水を覗いて、何か恐ろしい祕密が深いその底に潛んでゐるのではないかと思つた。そこで彼は腰衣囊へ手を入れて、コルト式ピストルの臺尻を觸つて見た——これがあればと、大きに氣丈夫になつた。

漕手は、倫敦塔の下流の廣い區域がさう呼ばれてゐるのであるが、その所謂プールの方へ除かに下

つて行けといふ命令を受けてゐた。この二人は、遠征の目的に就いては、前に詳しく聞いてゐなかつたのだ、が、今はもう漸く無事に廣い所へ出拔けたのだから、多少ともその考へを與へておく方が便利とヘイゼルは思つた。「ちよつと胡亂な蒸氣船に出會すだらうと思ふんだ、」彼は言つた、「此方のお方は、ちよつとその姿を見たく思つてゐられるので、それを見るまでは、何にもこれといふ事は出來ないんだ。」

「どんな船でございますかね？」後櫓を漕いでゐる、眞劍な事は絕對に何にも出來さうもないやうな肥つた顏の男が訊いた。

「どうも分らんのだ、」ラックソールは答へた、「が、大圖の見當では、長さが凡そ六十呎で、黑く塗つてあるんだ。見ればすぐ分ると思ふよ。」

「そりやどうも當てになりませんな、」一方の男はぶつきら棒に叫んだ。が彼はもう何にも言はなかつた。彼も、またその仲間も、一種前拂ひの御禮として、金貨を一個づつラックソールから貰つてゐたのだ、して、金貨一個といふものは、テムスの船頭の人の惡い惡口を默らせるに、とても大した效能があるので。

「一つ自分が眼につけておいたことがあるんだが、」急にラックソールは言つた、「つい君に言ふことを忘れたんだよ、ヘイゼル氏。推進機がちよつと斯う調子外れの、不規則な音を立てゝ、動くやうだつたんで。」

船頭は二人ともどつと笑つた。

「や、そりや、」肥つた漕手は言つた、「何を追つかけてるか分りましたよ——そりやあの、『のたくり船』の名で通つてゐる、ジッヤク・エヂレットの船なんで。四枚の翼機付きのプロペラになつてるんだが、その一枚が破はれてるんでして。」

「それに違ひありやせんよ、」船首にゐる男が同意した、「それを探してゐなさるなら、現に今朝チエリー・ガードンズ・ビアーのとこへ碇泊つてゐるのを見やしたよ。」

「ぢや、何をおいても、そのチエリー・ガードンズ・ビアーへ急がう、」ラッソクールは言つた、して、ボートは急いで流れを渡り、それからそろ〳〵右河岸の側を傳つて行つた、この刻限になつても今にまだ、空つぽで船の内部へと落ち、一ぱいになつてまた上つて來る起重機で忙しい荷揚げ場の中を通り抜けて。二人の船頭が用心深く退け潮の潮流にボートを操つて行くうちに、ヘイゼルは百萬長者に向つて、「のたくり船」といふのは、大河でも札付きの船の一つであるといふことを説明した。誰にせよ、河の仕事が必要な、不都合至極の祕密な計畫をやつてゐる時は、エヂレットのあの船は、相當な金さへ出せば、何時でも利用が出來るらしかつた。

「のたくり船」そのものも、今まで種々樣々な窮境に落ちたこともあつたが、潔白とまではゆかなくとも、無事に先づその窮境を出抜けて來たのだ。水上警察は始終その眼を光らしてゐた、で、不思議なことに、持主の老エヂレットは、つひぞこれまでどんな不正な突飛な仕事にも、本當に卷き添ひを

食つたことがないのである。唯の一度としてその筋の役人も、「のたくり船」の持主に對してこれといふことが證據立てることが出來なかつたのだ、現にその瞬間に、前にそれを備つた五六人の者はイギリス國内の種々な政府の監獄へ繫がれてゐたのであつたけれど。ところがこの頃になつて、エヂレットがどうあてつも修繕をしない、破はれたプロペラの付いたあの船は、惡者仲間にさへ評判が惡くなり、その連中も段々と、もつと見分けの難しい船へとそれを見換へるやうになつたのだ。

「お話のそのトム・ジャクソンも、」ヘイゼルはラックソールに向つて言つた、「『のたくり船』なんかを備ふとは、千慮の一失といふものですな。あれだけ經驗の積んだ、手腕のある惡黨なら、もそつと分別があつて可い筈なんで。こりや請け合つて手懸りがつきますよ。」

この時にはもう、ボートはそろ〳〵チエリー・ガードンズ・ビアーへ近づいてゐた、が、不幸にして、薄い川霧が一ぱいに立て籠めてゐて、三十碼先きの物は、はつきりと見分けられなかつた。稅關のボートが波止場の下の淺瀨をやつて行く時、あの怪船は見えないかと、乘つてゐる者一人殘らずその眼を瞠つた、が、何れもそれらしいものは見なかつた。ボートはのらくら下流へ下つて行つた、船頭はその手を休めて。すると、船首を下流の方へ向けて碇泊してゐる、大きなノルウエーの帆前船へ、もう少しで衝突しさうになつた。この船の左舷の方を通つて行つた。恰度その第一斜檣のとこを出抜けてしまふと、肥つた男は躍起になつて叫んだ、「先方へ船鼻が見える！」して彼は、ボートを廻して潮流を逆に漕ぎ出した。して、確かにあの失せてゐた『のたくり船』は、ノルウエー船の右舷

の後半部のとこへ氣持好ささうに碇泊してゐた、船と岸との間へ手際よく隱れて。船頭は靜かにその側へ漕ぎ寄せた。

第二十六回　夜中の追跡と浮浪少年

「手初めに先づ乘り込んでやりますから、」ヘイゼルはラックソールに耳打ちした、「何か稅のかゝる品物を積んでるかどうかを見る體にしませう、さうすれば自然、隈なく船中を見て歩けますから。」

官服の外套を羽織つて、ラックソールから見るとちよつと斯う氣輕に、船の低い甲板へ乘り移つた。「誰かをるか？」彼が怒鳴るのをラックソールは聞いた。すると、一人の女がそれに應へた。「自分は稅關の檢査官だが、これから船を搜索したいのだ、」ヘイゼルは叫んで、船の中部の小さな客室の中へ消えてしまつた、して、後はもう何にも聞えなかつた。ヘイゼルが行つてからもう、幾時間にもなるやうに百萬長者には思へた、が、やがて、彼は歸つて來た。

「何にも見つからない、」ボートへ跳び込むと彼は言つた、それからラックソールに向つて內證で、「女が一人ゐますよ。どうも貴方のお話のスペンサー孃とよく合つてゐます。蒸氣の煙は上つてゐますが、機關士は一人もゐません。機關士は何處にゐると聞いたところ、一體貴方の用事は何であると女は訊ね、早速に用事を濟まして降りて貰ひたいと言ふのです。ちよつと手ごはい奴のやうですよ。何へでも皆鼻を突込んで見たのですが、他には誰もゐる樣子はありません。ボートを出して暫くのう

ち近くへ泊つてゐて、何か變な事が起るか、見た方が可いかも知れません。」

「確かに彼奴は船中にゐませんかね？」ラックソールは訊いた。

「確かに。」きつぱりとヘイゼルは言つた、「船を探すことは、僕はよく心得てゐます。これを御覽なさい、」して彼は木の柄のついた、二呎ばかりの、鐵の燒串のやうなものをラックソールへ渡した。

「これが、」彼は言つた、「稅關の責め道具の一つなんで。」

「先方へ乘り込んで行つて、あの婦人を引つ攫つて來るわけには行かないだらうね？」疑はしさうにラックソールは言つた。

「さうですな、」同じやうに疑はしさうに、ヘイゼルは言ひ始めた、「そいつは——」

「何處え逃げるんで？」ヘイゼルの言葉を遮つたのは、船首の男であつた。その男の指ざす方に當つて、ヘイゼルもラックソールも、一艘の小艇がノルウエー船の船首の直ぐ前からするつと拔け出て、霧の中を下流の方へ消えて行くのを、多少ともはつきりと見た。

「ジュールスだ、誓つてもう、」ラックソールは叫んだ、「追つかけてくれ。追ひ着いたら十磅づつ奮發するぞ！」

「先方を目がけて下つて行け！」ヘイゼルは言つた、して、重い稅關のボートは後追つかけて走つて行つた。

「こりや面白い事になりさうだ、」ラックソールは言つた。

「面白いにも次第がありますよ、」ヘイゼルは言つた、「霧の中をこんなにして、中流を下つて行くなどは、あんまり面白いこつてもありませんからね。周圍にはこんなに荷足船がぶつ突き合つてゐるんですから、いつお陀佛になるか知れたもんぢやありませんよ。初めちらつと我々を見た時、彼奴はあの小艇へ隱れて、自分が彼船へ行くなり直ぐ、するつと出て行つたに違ひありません。」

ボートは潮流について、とても速い速力で動いてゐた。船の操縱はもと〳〵運のもので、氣分が何より大切なのだ。折々舵の索を持つてゐたヘイゼルは、荷足船なり碇泊してゐる船舶なりを避けるために、ボートの鼻を急に廻さなければならなかつた。船舶がもう、河中一ぱい碇泊してゐるやうに、ラックソールには思へた。氣遣はしさうに頻りと彼は四邊を見廻した、が、良久らくの間、霧とぼうとした船體の外、何にも別に見えなかつた。すると、急に彼は言つた、可成りに落着いて、「首尾よく先づ行きましたよ、先頭の方に彼奴が見える。そろ〳〵もう追ひ着きませう。」もう一分すると、小艇はもうはつきりと見えて來た——二十碼と離れない所へ。漕手は——二挺櫓で死に物狂ひになつて漕いでゐる——擬ふ方なくジユールであつた——薄色スコッチ織の服と山高帽を被つてゐるジユールであつた。

「當りましたな、」ヘイゼルは言つた、「これこそ本當に面白いんで。僕はもうとても興奮してしまふかも知れませんよ。管絃樂で大喇叭を吹くよりも痛快ですよ。一つ突き當つて、沈默させてやりませうかね？——それからゆつくり引き上げればいゝんで。」ラックソールは點頭いた、が、その瞬間

に、赤い帆を上げた荷足船が、濃霧の中から出て來て稅關のボートの船首を突つ切つたので、ボートが危ふくも目茶々々に破はれてしまふとこだつた。兩船が交つてしまつて、お定りの無頓着な惡口も取り交はされてしまふと、小艇は微すかに霧の中に見えてゐた、して、肥つた方の船頭は、その呼吸が殆ど兩岸へ聞える位な風で息をしてゐた。ラックソールは何かしたくてとても耐らなかつた、が、何にも手の出しやうがなかつた、艇尾臺のヘイゼルの側で、氣がなささうに坐つてゐるきりだつた。次第に再た小艇へ追ひ着き出したが、先方の一人船頭は、てつきりもう疲れてゐるらしかつた。すれすれに此方が近寄ると、小艇の鼻は急に側へ曲つた、して、その小さな船は、サレー岸から殆ど五百碼のところに、眞黑になつて、人の氣もなく止つてゐた二艘の石炭船の間の、細い水路を通つて行つた。

「右へ、」ラックソールは言つた。「否、そりやいかん！」ヘイゼルは答へた、「そこを拔けるわけにはいかん。屹度また出て來るに違ひない、ありやもうほんの見せかけなのだ。此方は眞直ぐ進んで行くんだ。」

して、彼等は進んで行つた、その眞暗闇の中でさへぴか〳〵光るやうな顏をして、肥つた男は無理矢理に船を進めて。二艘の荷船の間から出て來て、グリニッヂの方指して、くる〳〵舞つて流れて行くのは、空虛の小艇であつた。

肥つた男は喘ぐやうに、同僚に向つて一とこと言つた、して、稅關のボートは、はたと停つてしま

つた。

「大丈夫でやすよ、」船首の男は言つた、「彼奴が若し貴方方の探してゐる男なら、先方の荷船の一つにゐやすよ、上つて行つて、引つ捕へて來れば可いんで。」

「それだけのことさ、」手前の方の荷船の奥から一つの聲は言つた、してそれは、又の名トム・ジャクソン氏として知られてゐる、ジユールの聲であつた。

「聞えやしたかね？」微笑ひながら肥つた男は言つた、「感心な奴ぢや、本當に。それにしても、俺が若し貴方だつたら、ヘイゼル氏、それともまた此方の日那だつたら、そんなに急いで、あの荷船へは上りませんよ。」二人は手前の方の荷船の船尾の下へボートを寄せて、上の方を見てゐた。

「大丈夫です、」ラックソールはヘイゼルに言つた、「ピストルを持つてゐますから。どうして先方へ上つたら可いでせうな？」

「そりやピストルを持つてゐるのは差支ないでせうが、」きつとなつてヘイゼルは答へた、「でも、それを使つてはいけませんよ。少しでも音を立てゝはいけないんで。ずどんと一發放さうものなら、瞬く間に水上警察がやつて來ますよ、すればもう、僕の身の破滅です。訊問が開かれゝば、上官がこの仕事をやらせたのだといふ事實なんかは、長官連は少しも認めてくれるものぢやありません、で、自分はもう職を去るやうに要求されるに違ひないんで。」

「その點に就ては御心配ないやうに、」ラックソールは言つた、「自分が勿論全責任を負ひますから。」

「どれ程の責任をお負ひ下つても仕方がありません、」ヘイゼルは報いた、「僕を職へ戻すことは出來ませんよ、で、僕の進路は忽ち防がつてしまひます。」

「でも、他に進路がありますから、」ラックソールは言つた、ちやんと狙ひを定めた彈丸で自分の前ウエイターを不具にしてやりたくて耐らないもので。「他にまた進路がありますから。」

「稅關が僕の進路なんです、」ヘイゼルは言つた、「だからまあ、射擊だけはおやりにならないやうに。少し先づ待つてゐませう、逃げられやしませんから。宜しければ僕の鐵棒をお持ち下さい。」——して彼は、その搜索道具をラックソールへ渡した。「これでもう、どうなと好きなやうになさいまし、手際にそれを使ひこなして、大立廻りをやらない限りは。」

暫くの間、四人の男はボートの中で、手を束ねて何にもしないでゐた、渦まくやうな霧に取り卷かれ、下には眞黑な水を控へ、頭上にはまた、死物狂ひの、策略に富んだ男を載せた石炭船が聳え立つて。急に霧が割れた、して、或る怪物の息でも吹きかけられてゐるやうに、片々になつて退散して行つた。空が見え出して來た、綺麗に晴れてゐて、月が照つてゐた。驚くべきこの轉化は、大きな河にはよく起る、氣象上の急變の一つに過ぎないので。

「こりやとても上等だ、」肥つた男は言つた。その同じ瞬間に、一つの頭首が荷船の端へ現はれた。それはジユールの顏であつた——兇惡な、薄氣味惡い、にやゝ嘲笑つてゐる。

「そのボートにゐるのはラックソール氏で？」落着き拂つて彼は訊ねた、「何故といふと、若し左樣な

ら、ラックソール氏に上つて來て頂きませう。斯うなつた以上はもう、一言言はれゝば、自分は直ぐ縄にかゝります。自分はちやんと此處に居りますから。」夜の空を背景に控へ、威丈高に彼は荷船の上へ立ち上つた、して、ボートに乘つてゐる者は一人殘らず、彼がしつかりと右の手に短劍を握つてゐるのを見た。「ところで、ラックソール氏、大分と長い間、私の跡をつけてくれましたね、」彼は續けた、「自分はちやんと此處に居りますよ。何で上つて來られないので？　貴方に若しその勇氣がないならば、誰ぞ貴方に代つて上つて來るやうに說いたがよいので……誰れ彼れの差別なく、皆一樣に扱つてくれるから。」してジユールは、低い、突き通るやうな聲で哄笑つた。

この哄笑の眞つ最中に彼は急に、よろ〳〵と前へのめつた。

「俺の荷船で何をしてやがるんだ？　ざまあ見ろ！」一人の少年の甲高い聲が闇に響いた。襤褸を着た少年の小さな姿が、靜にジユールの後に現はれてゐた、して、小さなその兩腕でずしんと突くと、忽ち眞倒さまに彼を水の中へ落してしまつた。どぶんと音を立てゝ彼は水の中へ落ちた。水泳がジユールの才藝の中になかつたといふことは、直ぐもう明かになつて來た。散々に彼は跪いて、沈んでしまつた。浮き上つて來ると、彼は忽ち稅關のボートへ引き上げられた。縄が取り出された、して、一二分すると、彼奴はもう見苦しくも縛られて、ボートの船底へ寢かされた。一人の浮浪少年――荷船に對する權利といつては、ジユール同じに、少しもなかつたかも知れぬ、たか〳〵荷上げ人足の小僧といつたものゝ手助けで、ラックソールはその獲物を手に入れたのだ。五六週間この方、初めて落着

きと滿足の感じを彼は味つた。ヘイゼルの職業用の鐵棒を手に持つたまゝ、彼はジユールの寢てゐる姿を覗き込んだ。

「これから此奴をどうなさるお積りで？」ヘイゼルは訊いた。

「グランド・バビロンの前の船着のとこへ、漕いで行きませう。此奴はちやんと自分のホテルへ泊めてやります。」

ジユールは一言も言はなかつた。

ラックソールがその晩、稅關の人と別れる前、ジユールは無事にグランド・バビロン・ホテルへ移された、して、二人の船頭は、銘々十磅の御褒美にあづかつた。

「此方でお寢みになつては？」百萬長者は、ジョージ・ヘイゼル氏に言つた。「もう遲いから。」

「そりやもう喜んで、」ヘイゼルは言つた。翌朝起きると、贅澤な朝飯の用意がちやんと彼のために出來てゐた、して、その食卓ナプキンには、百磅の英蘭銀行の紙幣が入つてゐた。が、こりやずつと後になるまで彼の耳へは入らなかつたことだが、ヘイゼルがその贅澤な朝飯を平げてしまふ前に、種々の事が起つたのだ。

第二十七回　トム・ジャクソン氏の告白

グランド・バビロンの給仕頭であつた時代に、ジユールが占領してゐた小さな寢室が、セオドア・

ラックソールに急に免職されて以來、ずつと空いたまゝでゐた。他の給仕頭といふものは、彼の代りとして別段に正式に任命はされなかつた、して實際、一人ぐらゐ居ないことは——例へば、それが天下一品のジュールであつてさへ——グランド・バビロンのやうな大世帶では、殆ど人の目につかないのであつた。元來給仕頭の働きといふものは大抵、實用といふより、ほんの外觀の體裁に過ぎず、何となく唯勿體をつけるのに過ぎないのだが、大河河岸のこの大ホテルでも、やつぱり左樣であつたのだ。ラックソールはそれ故、出來るだけ祕密にその捕虜を、この空いてゐる寢室へ移すといふ妙案を思ひついた。さうするのに、別段の面倒もなかつた、とても敵はぬ力を見せつけられて、ジュールはもう溫和しくなつてしまつたのだ。ラックソールは、多年ホテルの外廻りのやうに使はれてゐた小使——テリヤー種獵犬のやうに逞ましい、マステイフ種鬪犬のやうに頑丈な、胡麻鹽頭の老人を、ジュールと一緒に二階へ連れて行つた。手を縛られてゐるジュールをその寢室に入れてしまふと、そのまま扉の外にゐるやう、彼は小使に命じた。ジュールの寢室は全くもう普通の部屋だつた、西端區の宿屋で傭人のために備へてある設備に較べれば、ちよつと增しであつたかも知れないけれど。長さ約十四呎、幅約十二呎ばかりの部屋であつた。寢臺と小さな衣裳簞笥、小さな洗面臺と化粧臺、それに二脚の椅子が備へつけてあつた。扉の後には二つの鉤がついてゐ、寢臺の側に細長い敷物が一枚敷いてあり、鐵の爐臺の上には安つぽい裝飾品が載つてゐた。電燈も一つ取りつけてあつた。窓は床を高く離れた、小さな四角の窓だつた、して、それは奧の中庭に臨んでゐた。部屋は八階といふ、頂上

の階にあつた、して、それからは、ずつともう下の地面まで見下せた。二十呎下には、殆ど一呎ばかりの廣さの、狹い蛇腹がついてゐた、窓の三呎かそこら上には、も一つの、ずつと廣い蛇腹が出てゐた、してその上に、窓からは見えないけれど、ホテルの高い、急勾配の屋根があつた。ラックソールは、この窓と外の眺めを篤と檢査して、ジュールは兎も角、その出口からは逃げられまいと思つた。煖爐の煙突もちよつと覗いて見たが、煙道はとても小さくて、人間の體など入らないことを知つた。

そこで、彼は小使を呼び入れて、二人で一緒に確つかりと寢臺へジュールを結ひつけた、寢られるやうにだけはしてやつて。その間始終、捕虜のジュールは決してもう口を開かず、唯侮蔑の微笑を見せてゐるだけであつた。最後にラックソールは、裝飾品やら敷物やら、椅子やら、扉の鉤やらを取り除き、電燈のスヰッチを捻ぢ取つた。そこで、彼と小使は部屋を出た、して、ラックソールは外側から扉へ錠を下して、鍵を自分の衣囊へ入れた。

「此處で番をしてゐてくれ、」彼は小使に言つた、「夜中ずつと。この椅子へかけてゐても可いんだ。眠つてしまつてはいけないよ。部屋でちよつとでも音がしたらば、君の馬車を呼ぶ笛を吹いてくれ、ちやんとその合圖に應じるやう手配をしておくから、音が少しもしないなら、何にもしてはいけない。このことをべらべら喋つては困るよ、可いかね。自分は君を信賴する、君も自分に信賴して差支ないんだ。」

「でも、女中達が明日起ると、手前が此處にゐるのを見るでございませう、」にやゝ笑つて小使は言つた、「すればきつと、手前が此處で何をしてゐるか訊くに違ひないんで。何と申したら宜しいでせうな？」

「君は軍人だつたんだらう、左樣ぢやないかね？」ラックソールは訊いた。

「三度も實戰に臨んでをります、」これが返答であつた、して、それも先づ尤もと見られる、自慢さうな身振りをして、胡麻鹽頭の老人は胸の勳章を指した。

「それなら、假りに君が歩哨の任務に立つてゐて、誰か厄介な人間が何をしてゐると訊いたなら——君は一體何と言ふね？」

「其處退いてくれ、退かずば直ぐさま物見せてくれるぞと申しますんで。」

「ぢや、必要が起つたら、明朝も左樣いふやうにやつてくれ、」ラックソールは言つて、出て行つてしまつた。

その時は殆どもう、午前の一時であつた。百萬長者は床へ就いた——自分の床ではなく、七階の或る床へ。が、餘り長くは眠れなかつた。夜が明けると間もなくもう、彼は眼を覺まして、ジュールの物語が聞きたくて耐らなかつたのだ、それが出來るとしたら、說得なり、また、その他の手段なりで無理にもそれを話させようと決心した。セオドア・ラックソールのやうな氣性の人には、今が實に絕好の時なのだ、して、朝日が華かに窓へ差し込んで來る六時といふ刻限に、彼はちやんと着物を着換

へ、再た八階へ上つて行つた、小使はのつそりと、が、油斷なく椅子へ腰かけてゐた、して、主人を見ると、起ち上つて挨拶した。

「何事かあつたかね？」ラックソールは訊いた。

「何にもございませんでした。」

「女中達が何か言つたかね？」

「未だ、十二人かそこらしか起きてをりません。その一人が何をしてゐるんだと訊きますから、貴方が特別大事にしてゐるブルドックの牝と、一腹の小犬の番をしてゐるのだと言つてやりました。」

「そいつは出來た、」扉の錠を開けて部屋へ這入りながらラックソールは言つた。何も皆出て行つた時の通りだが、唯一つ、今まで仰向けになつて寢てゐたジュールは、どうにかして寢返りを打ち、今は俯向けになつて寢てゐるのでした。默つて彼は百萬長者の方を、睨めつけるやうに見てゐた。ラックソールは彼に挨拶して、腰衣囊から仰々しくピストルを取り出し、それを化粧臺の上へ置いた。そこで彼は、化粧臺の上の、ピストルの側へ腰かけた、兩脚は床の上一二吋の所へだらりとところ垂れて。

「君にちよつと話がしたいんだよ、ジャクソン、」彼は始めた。

「どれ程でもお話なさいとも、」ジュールは言つた、「自分は一向取り合ひませんから、請け合つて、もう。」

「少し君に訊きたいことがあるんだ。」
「そりやまた話が違ひます、」ジユールは言つた、「斯うして縛られてゐる以上、自分はもうどんな質問にも答へようとは致しません。これもまた請け合ひで。」
「そんなに駄々をこねないで、尋常にするのが君のためといふもので、」ラックソールは言つた。
「斯うして縛られてゐる以上、どんな質問にも答へようとはしません。」
「それなら、脚だけ解いて進ぜよう、」懇ろにラックソールは言つた、「すれば、ちやんと起き上られるから。窮屈だつたなどといふ風をしたところで駄目だよ、左様でないことが分つてゐるから。君はこれでも、なか〳〵鄭重に取り扱はれたんだ。そら來た！」して、彼はその捕虜の下端をばその縛めから解いてやつた。「ところで、繰り返してまた言ふが、尋常の態度に出た方が君のためだ。それからまた、今度の勝負では、君は美事に負けたといふことを認めた方が可いんだ。自分は警察の助けを假りず、自分一人で君を負かさうと決心したが、その通りちやんとやつてしまつた。」
「如何にも一人でおやりになりましたので、」ジユールは報いた、「だが、法律に反してやつたので。貴方に少しでも常識があれば、下手な手出しはしなかつたでせう、萬事警察へ任したに違ひないので。すれば、警察は一二年もだらしなくこね廻して、それで何一つ出來なかつたでせうよ。誰がこれから警察へ訴へるんですか？　貴方ですか？　貴方が自分を先方へ引き渡して、『これ、この通り捕へて上げました』と、言ふ積りなんですか？　それをやれば、先方はまた、種々の説明を貴方に要求

するでせう、さうなると、貴方もそろ〳〵間抜けになりますよ。一つの罪が別の罪の言ひ抜けにはなりませんからね、今にそれがお分りになりませう。」
先見の明を以つて、ジユールはちやんとラックソールの立場の面倒なことを見て取つてゐたのだ、して、それこそ實に、ラックソール自身にしても、聊かそれを小さく見ようとしてはゐなかつた一つの面倒であつたのだ。何處までもそれに直面しなければならないことは、彼もよく知つてゐた。それにしても、彼はジユールにこの思ひを見拔かれるやうなことはしなかつた。
「それは左様として、」彼は落着いて相手に向つて言つた、「君はちやんと此處に、自分の捕虜となつてゐる。君はこれまで、種々様々の罪を犯したのだ、して、そのうちには、人殺しといふ大罪もある。絞罪に處せられるのが當然だ。君もそれは知つてゐるだらう。自分が何も、警察へ訴へなければならんといふ理由はない。當然の報いとして、自分で君を片づけてしまふこともわけないことだ。左様したところで、自分は唯正義を行つて、絞刑吏からその報酬を奪ふだけのことだ。このホテルへ君を連れて來たときこかり同じに、自分は再た君を連れ出すことも出來る。二三日前、君はオステンドで、一艘の快走船を借りるか盗むかした。その船をどうしてしまつたか自分は知らない、また知らうともしない。が、自分の娘は君の快走船で、も少しで殺されるとこであつたに違ひないと思ふ。ところで、自分もちやんと快走船を有つてゐる。君が君の船を利用したやうに、自分がそれを利用したとしたらどうだらう！　そつと君をそれへ載せて、海へ出て行き、それから或る晩に、大海へ身を投げ

てしまへと要求したらどうだらう。斯ういふことは今までによく行はれたことだ。これからもまた行はれるに違ひない。自分が若しさういふ行動に出たならば、自分は少くとも、惡者といふ邪魔者を社會から除いたといふ滿足を有つに違ひない。」

「でも、それはなさらんでせう。」ジュールは呟いた。

「さうだ、」落着いてラックソールは言つた、「それはせんだらう——君が若し、今朝殊勝な態度に出れば。が、自分は君に誓つて言ふ、君が若し、さういふ態度に出ないとあれば、警察があらうがなからうが、君が死ぬまでは決して止めない積りだ。君はまだ、セオドア・ラックソールの人物を知らんのだ。」

「本當に仰しやつてるやうですね、」ジュールは叫んだ、何か重大なことでも發見したやうに、今更のやうに驚いた容子で。

「そりや左樣だとも、」ラックソールは言葉を續けた、「ところで、君は警察へ引き渡されるのが關の山だ。惡く行く、自分は自分で君を始末してしまふ。警察の方なら、君もひよつと逃れる途があるかも知れない——二十年の懲役ぐらゐで出て來られるだらう、何故といふと、君がレギナルド・デイモックを殺したといふことは、絶對にもう確かであるけれど、君に向つてそれを立證するといふことは、ちよつと困難であるかも知れないから。が、自分を相手となると、君はもう全く逃れる途はない。二三君に訊くことがある、それに對する君の返答次第で、自分が君を警察へ引き渡すか、それともま

た、自分の手で法律を執行するか、何れかに決めることにしよう。斷つておくが、後の方の手段の方が、自分に取つてどれほど簡單であるか知れない。君が實に圖拔けて悧口な男であるやうに感じ、憎らしいほど巧妙な手を出すのに、窃かに先づ感服してゐないのなら、自分は勿論その方の手段を取るんだ。」

「では、自分は悧口だとお思ひなので？」ジュールは言つた、「全くその通り。自分は悧口なので、自分の方が運が惡かつたのだが、若し左樣でなかつたなら、とても貴方などの手に負へたものではないのです。貴方の勝利は、手腕のお蔭でなく、全く運のお蔭だつたので。」

「そりや敗北者のよく言ふ世迷言だ。ウオータールーの勝利は、英人に取つて全く運だつたに違ひない、それにしても、ウオータールーはやつぱりウオータールーだからな。」

ジュールはわざとらしく大欠伸をした。「何をお訊きになりたいといふんですか？」鄭重に彼は訊ねた。

「何よりも先づ眞先に、このホテル内の君の共犯者の名前が知りたいんだ。」

「もうございません、」ジュールは言つた、「ロッコーが最後だつたので。」

「冒頭から嘘をついては困る。共犯者がないとしたら、どうして君はあのロマネー・コンテイの特別の一瓶を、プリンス・ユージエン殿下へ差し出させるやうな趣向をしたのかね？」

「では、事前にそれを發見なすつたのですか？」ジュールは言つた、「どうも左樣なりやしないかと

思つてをりました。あれにはもう共犯者など要らないといふことを、説明致しませう。瓶は箱の一番上にあつたのです、して、自然それは取り出されることになりませう。それにまた、他よりあれを少し先へ出すやうにして置きましたから。」

「では、ハッバードはあの前夜に病氣になるやうに、君は別に手配をしなかつたのか？」

「そりや少しも思ひ寄らないこつてした、」ジュールは言つた、「結構なあのハッバードが平常通りに勝れてゐなかつたといふことは。」

「また一つ訊くが、」ラックソールは言つた、「君がプリンス・ユージエンの一命を狙ふに就ては、誰が一體その張本人であり、何が一體その根原であるのかな？」

「プリンス・ユージエンの一命など、自分は更に狙つてはをりませんでした、」ジュールは言つた、「少くとも、初手にはもう。自分は唯、少し存じ寄る次第もありまして、プリンス・ユージエンが或る日限前に、ロンドンでサムソン・レヰー氏なる者と、會見の出來ないやうにしたいと企てたのでした、それだけのことで。そりやもう極く簡單なことに思ひました。前にはもう、それよりはずつと複雑な交渉に從事したこともありますので。必ずもうやつて退けられると思ひました、ロッコーと、あの——スペンサー孃との助けを借りれば。」

「あの女は君の細君かね？」

「左様なりたいのでございませう、」彼は薄笑ひをした、「何うか口をお入れにならないやうに。ちや

んと手配を濟ませますと、貴方は實に無分別にも、このホテルを御買取りになつたのです。こりやもう申し上げて差支ありません、あの晩、廊下で貴方にぶつかつたその瞬間から、自分は窃かに貴方を恐れてゐたのです、その當座は、殆ど自分にも氣づきませんしたけれど。我々の運動の現場を、オステンドへ移す方が安全と思ひました。初めは、このホテルでプリンス・ユージエンを扱ふつもりでしたが、大陸で彼を食ひ止めるやうに、その時決したのです、で、或る命令を與へてスペンサー孃を差し向けました。面倒が起きる際は、決して一つでは濟まないので、恰度その時、今まで我々と一緒に游いでゐたデイモックの馬鹿奴が、急に寢返りをうつといことふになりました。ちよつとした故障でも萬事を覆へしてしまひます、で、自分は己むを得ず——彼奴を綺麗に退場させてしまはなければなりませんでした。彼は退却したくなつたのです——甚く良心に責められたもので、して、どうしても非常手段が必要といふことになりました。不時の死亡は何とも實に氣の毒なことでございますが、それもみんな彼が自分で招いたことであるんです。ところで、何事も滞りなく進行して居りますと、貴方と、才氣潑剌たる貴方の令孃が、邪魔をしようと決心したらしく、再たしてもオステンドの我々の中へ現はれたのです。が、使用主が自分に指定した日限前に、二十四時間だけ經過すればよかつたわけなのでして。自分は氣の毒な、あのユージエンを豫定の時間だけ留置しておきました、すると、貴方方がやつて來て、どうにか彼を手に入れてしまつたのです。その場合も貴方が勝利であつたことは否定致しません、自分が下した命令に依れば、その勝利も遅蒔だつたに違ひないのですけれど。時

間は過ぎてしまひました、そこで、プリンス・ユージエンが、サムソン・レヰー氏に會はうが會ふまいが、そんなことは、もうどうでもよかつたのです。ところが、自分の使用者は、未だ安心しなかつたのです。ユージエンが五六週間、オステンドで病氣になつてゐた後でさへ、まだ安心しないのでした。その日限になつてすら、プリンスとサムソン・レヰー氏との會見が先方へ迷惑を及ぼしはすまいかと、心配してゐたらしかつたので。そこで、改めてまた自分へ依頼して參りました。今度はプリンス・ユージエンを――あゝ――全然片づけてしまつてくれといふのでして。大變な條件を提出して來ました。」

「どういふ條件なので？」

「初めの仕事に對しては、自分は五十萬の報酬を得ましたが、それをロッコーと山分けにしたのです。ロッコーはまた、首尾よく事が成就すれば、或る歐洲の有名な勳章を授かる筈だつたのです。その方が、金よりかずつと彼奴は欲しがつてゐたのです――虚榮心の強い男で！　第二の仕事に對しては、自分は百萬の報酬を提供されました。可成りの多額です。自分がそれを手に入れられなかつたのは、何とも實に殘念な次第でして。」

「では、君は斯う言ふのかな、」前から知つてゐるにも拘らず、落着き拂つたこの告白に喫驚仰天して、ラックソールは訊いた、「プリンス・ユージエンを毒殺するために、君は百萬の金を提供されたと言ふのかな？」

「そりや餘り露骨な言ひ方です、」返答としてジユールは言つた、「プリンス・ユージエンが若し、相當の時間內病臥してゐられるやうに取り計らふなら、百萬の報酬を贈るやう申し出られたと、自分は先づ左樣申したいのです。」

「して、君のその使用主は何人かね？」

「そりや、正直に申して、自分は存じません。」

「誰が君に最初の五十萬を支拂ひ、誰が君に百萬の約束をしたかは、君も知つてるだらうがな。」

「左樣ですな、」ジユールは言つた、「ほんの漠然と承知してゐるぎりです。彼が、ギエナ經由で――あゝ――ボスニヤから來たといふだけは承知してをります。自分のその時の印象は、この事件は何でも、直接か間接に、ボスニヤ王の結婚の計畫に多少の關係を有つてゐるといふことでした。彼はまだ若い王樣で、言はゞ先づ政治上の手引の紐を漸く脫した位のものなのです、して、その大臣連は彼のためにその緣談を調へた方がよいと思つたに違ひないので、去年もそれを試みて、その意中の姫君が他のプリンスへ眼を注いでをられたために失敗したのでした。そのプリンスといふのは、偶然にもポーゼン國のプリンス・ユージエンであつたのでして。ボスニヤの大臣連は、プリンス・ユージエンの身邊の事情をよく知つてゐたのです。負債を償却してしまはなければ結婚の出來ないことも知つてゐますし、サムソン・レヰーといふこの猶太人の手を借りなければ、負債を償却出來ないことも知つてをりました。自分に取つて不幸なことに、彼等は到頭、プリンス・ユージエンに就いては、何等後顧

の患ひのないやうにしてくれといふやうになつて來たのです。サムソン・レヰー氏の援助を借りずとも、プリンス・ユージエンは結局その緣談を調へられやすまいかと心配したのです、そこで――左樣ですな、殘餘はもうよく御存じなので……無邪氣なあのボスニヤ王が、大臣見立ての姫君を手に入れられないのは、何とも實に氣の毒なことで。」

「では、王その人はこの恐るべき大罪には少しも關係がないと思ふのかね？」

「斷じてないと思ひます。」

「そりや喜ばしい、」簡單にラックソールは言つた、「ところで、君の直接の使用主の名前は？」

「ほんの代人に過ぎないので。スレスザッグ――スレースレースザッグと、名乘つてをりました。でも、それは本名ではないと思ひます。本名は自分も知らないので。老人で、パリーのホテル・リッツでよく見かけました。」

「スレザッグ氏と自分で會合することにしよう、」ラックソールは言つた。

「この世では駄目です、」口早にジュールは言つた、「彼は死んでしまひました。昨夜聞いたばかりなので――船中での我々の小競合ひのちよつと前に。」

ちよつと沈默が續いた。

「差支ない、」やがてラックソールは言つた、「プリンス・ユージエンは生きてゐられる――樣々な陰謀にも拘らず。結局、正義は行はれたわけだ。」

「ラックソール氏は此方に御いでになりますが、誰方にもお目に懸ることは出來ません。」言葉は扉の蔭から洩れたので、聲は小使の聲であつた。ラックソールは立ち上つて、扉の方へ行つた。

「馬鹿なことを、」女性の聲音で、手短かに斯う答へるのであつた、「其處お退きよ。」

扉は開いた、して、ネラが這入つて來た。彼女は眼に涙を浮べてゐた。

「まあ！　父さん、」彼女は叫んだ、「貴方がホテルにおいでのことを、たつた今聞いたばかりなんですわ。方々もう探したんです。直ぐ來て下さい、プリンス・ユージエンが死にさうですから――」そこで彼女は、寢臺の上に坐つてゐる男を見た、して、急に言葉を停めてしまつた。

後になつて、ジュールが再た一人ぎりになると、彼は獨り言を言つた、「こりやあの、百萬を手に入れられるかも知れないぞ。」

第二十八回　再び貴賓室寢室

貴賓室食堂に於ける、ロマネー・コンテイの瓶の出來事の直ぐ後で、プリンス・アリバートと老ハンズが、プリンス・ユージエンが氣を失つて、どつかとその椅子へ倒れたのを見た時、アリバートは直ぐさま、ユージエンは既に毒の人つたあの葡萄酒を味つてゐたに相違ないと考へたのでした。が、ちよつと考へて見てまた、それが不可能であることを知つた。ポーゼン國の當主が死に臨んでゐるにしても、また死んでゐるにしても、その狀態は全く、ロマネー・コンテイ以外の、他の作用に依つた

である。アリバートが彼の方へ屈むと、その唇から來た強い香ひが、直ぐさまその不幸の原因を示唆のしたのであつたが、それは阿片丁幾の香ひであつた。實際、その氣味の惡い藥品の香ひは、廣く食卓中へ擴つてゐるやうであつた。アリバートの胸にはその時、實際の說明が浮んで來た。プリンス・ユージエンは、アリバートの注意が瞬時他方へ向けられてゐるのに乘じ、また、絕望の不意の衝動に屈從して、毒を以て自殺しようと決し、その場でその考へを實行したのである。阿片丁幾は既に彼の衣囊にあつたに相違ない、して、この事實はやがて、不幸なプリンスは、きつぱりと約束をした後でさへ、斯樣な行動に出ようと、前から考へてゐたのであることを證するに至つたのである。アリバートは今、痛ましくもあり〳〵と、甥の言葉を思ひ出したのでした——「自分は約束を撤回する。宜しいか——自分はそれを撤回する。」ユージエンが自殺を遂げようとしたのは、この正式の撤回を口にしてから、直ぐ後であつたに違ひない。

「阿片丁幾だよ、ハンズ、」ちよつと途方に暮れて、アリバートは叫んだ。

「どうも、殿下が毒をお取りになるやうなことは、ないやうに思ひますが？」ハンズは言つた、「そりや到底不可能なことで！」

「不可能どころか、大きに有りうちのことだと思ふのだ、」一方は言つた、「阿片丁幾だよ。どうしたら可いだらうね？　早く、お前。」

「氣がつくやうにして上げなければいけませんよ。解毒劑を差し上げなくては。寢室へお連れした方

が可いでせう。」

二人は彼を寢室へ連れて行つて、大寢臺へ寢かした、左樣しておいてから、アリバートは辛子と水の解毒劑を調合して、それを飲ましたが、一向に效能がなかつた。病人は身動きもせずぢつと横になつてゐた、筋肉といふ筋肉は皆悉く弛んで。皮膚は、それを觸つて見ても氷のやうに冷かつた、して、半ばだれてゐるその眼瞼は、瞳が甚く縮んでゐることを示してゐた。

「出て行つて、醫者を呼んで來てくれ。プリンス・ユージエンが急に御病氣になられたのだ、が、重態ではないと言ふが可い。事實は決して他へ洩れてはならんから。」

「お氣のつくやうにしてあげなければ、」急いで部屋から出がけに、再たしてもハンズは言つた。アリバートは寢臺から甥を抱き上げて彼を搖つたり、捻つたり、酷く打つたり、大きな聲で呼んだり、引きずり廻したりして見たが、一向に甲斐はなかつた。到頭彼は、唯もう體が疲れて來たので、止めてしまつた、して、プリンスを再た寢臺へ寢かした。過ぎて行く一分々々がまるで一時間のやうに思へた。大きな莊嚴な部屋の靜まり返つた中の、電燈の冷たく黃色い輝きの下なる、無意識の體と一人差し向ひになつて、アリバートは忽ち、最も絕望的な考への餌食となつてしまつた。甥の經歷の悲劇が自然と彼に迫つて來た、して、不名譽の夭折こそ由緒ある王家のこの人の好い、意志薄弱な、不幸な兒に對して、初めからもう避くべからざるものであつたやうに思へて來た。幾分幸運が向いて來さへすれば、正邪兩道の雙方の中間を彷徨してゐた彼の性格も、正當の道を踏むやうになり、ユージエン

は兎も角、歐洲の舞臺で相當な威嚴を以つて頭角を露はすに至つたかも知れないのである。が、今はもう萬事休したやうに、最後の致命的打擊も終つてしまつたやうに思へた。して、この不幸に對して、アリバートはまた、自分自身の希望の破滅を見たのであつた――アリバートは甥の王位を占めなければならず、自分は生れつき王位に就くやうになど出來てゐないやうに感じたのであつたから。自然の動機で、彼は心窃かに王となることの前途に反抗してゐたのであつた。王となることは卽ち、全然自分に不適當と知つてゐる種々のことになるのである。それは手もなく政治的結婚といふことになるのだし、政治的結婚は卽ち脅迫結婚、意志に反する緣組といふことになるのである。したらあの、ネラはどうしたもので――ネラはどうしたもので――

ハンズは戻つて來た。「手近の醫者と、それからまた專門家を一人呼んで參りましたので、」彼は言つた。

「宜しい、」アリバートは言つた、「急いでくれゝば可いがなあ。」そこで、彼は坐つて、名刺へ一筆走らした。「これを自分でラックソール壤の所へ持つて行つてくれ。ホテルから出てゐれば、何處にゐるか確めて、其處まで行つてくれ。可いかな、とても大事なのだから。」

ハンズはお辭儀をして、二度再た出て行つた、して、アリバートは再たしても一人になつてしまつた。彼はユージエンの方を見た、して、その昏睡から覺まさうと、もう一度一生懸命にやつて見た、が、別に役には立たなかつた。彼は窓の方へ歩いて行つた、開いてゐる窓を洩れて下の河岸通りを通

る辻馬車の鈴の音、門番の笛の音、して、大河を上つて行く曳き船蒸氣の汽笛が聞えて來た。世間は、平常通りにやつてゐるらしい。實に愚な世間だ。プリンスの位を辭して、世にも一番立派な婦人の夫である平民として住むことが何よりの自分の願望なのだ……ところが、もう！　……ちえつ、ユージエンは死にかゝつてゐるのに自分のことを考へるなんて、何といふ身勝手なのであらう。それにしても――ネラはまあ！

扉が開いた、して、一人の男が這入つて來た、てつきりもう醫者に違ひない。二三手短かの質問を訊いただけで、彼は直ぐ病症の要點を握んでしまつた。「恐れ入りますが、ちよつとその呼鈴をお鳴らし下さい、プリンス。お湯を少々と、屈强な男を一人に看護婦が一人入用なのでして。」

「看護婦がお入用ですつて？」一つの聲が言つた、して、ネラが靜かに這入つて來た。「手前が看護婦でございます、」醫者に向つて彼女は言ひ添へた、「何なとどうぞ御用を。」

次の二時間といふものは、まるで生死の爭鬪のやうなものであつた。最初の醫者と後から來た專門家、ネラとプリンス、アリバート、して老ハンズは、てもなく死にかゝつてゐる人を救はうといふ聯盟を形作つてゐた。ホテル內の誰も他に、重態なこの病症の眞相を知つてゐる者はなかつた。プリンスが病氣になつても、それがまた自分で手を下されてのこととあつては特に、正確な事實を決して廣く天下に發表されるものではない。官邊の報告に依ると、プリンスは愈々死ぬまでは、決して重態ではないのである。これが治國策といふもので。

プリンス・ユージエンの病症の一番と面白くない特徴は、解毒劑の無效といふことである。醫者の何方もその失敗を說明することが出來なかつた、が、それに違ひないのだから致し方がない。流石の聯盟もどうすることも出來なくなつた。やがて、マンチエスター街園から來た專門家の名醫は、プリンスの體格が性來强くて、泥醉者が眠つてその飲んだ物を發散さしてしまふやうに、醫術に依らず自然と毒を出してしまふことがお出來にならない限りは、プリンス・ユージエンはもう回復の望みはないと發表した。人工呼吸やら、熱いコーヒーの注射やらに至るまで、有らゆる手が盡されたのであるから。この發表を濟ませてから、マンチエスター街園から來た專門の名醫は辭して行つた。恰度午後の一時であつた。微妙なその意味に依つて時々我々を驚かす、あの不思議な、また要なき暗合の一つに依つて、セオドア・ラックソールとその捕虜がホテルへ這入つて來るところへ、專門家はふと打つかつたのであつた。雙方何方も、相手の用事が何であるか、一向に知らなかつた。

貴賓室寢室では、看護の小さなグループの人達は病床を取り卷いてゐた。一分々々と佗びしく徐かに過ぎて行つた。もう一時間經つた。すると、今まで全く身動きをしなかつた寢臺の上の人物は、急にぴくぴく動き出した、脣も開いた。

「希望があります、」醫者は言つた、して、ネラの手から刺戟劑を取つて、服用さした。

十五分すると、患者はその意識を回復した。醫學の歷史では別に珍らしいことではないのでだが、强壯な體格が、數百年來蓄積して來たその手練にも不可能なやうな、一種の不可思議を遂げたのであ

つた。

やがて然るべき時刻になつて、醫者は辭して行つた、プリンス・ユージエンはもう「立派に回復の道途に向つて」ゐられる、二三時間のうちにまた伺ひますからと言つて。夜が明けた。ネラは大きな帷帳を開いて、さつと日光を入れた。老ハンズはへとへとに疲れて、部屋のずつと隅の方の椅子の上で、假寢をしてゐた。刺戟がとても甚かつたのである。ネラとプリンスは顏を見合した。二人は今まで、自分達の身の上に就ては一言も交さなかつた、それでゐながら、何を考へてゐるか、お互ひによく知り合つてゐた。完全にもう諒解し合つて、その手を握り合せてゐた。二人の短い言ひ寄りは、今までもずつと沈默的なものであつた、して、今もまた沈默的であつた。一言も洩らされなかつた。暗い影はもう彼等の上を通り過ぎてしまつた、が、二人の眼だけが安堵と喜悅を見せてゐた。

「アリバート！」微かな聲が寢臺から洩れた。アリバートは枕頭へ寄つて行つた、ネラは窓際近くに殘つてゐて。

「何ですか、ユージエン？」彼は言つた。「大分もう快いやうですよ。」

「左樣思ふかね？」一方は呟いた。「斯うした散々の不始末に就いて、どうぞ容してくれるやうに。とても大變な迷惑をかけたに違ひないので。如何にも不手際なやり方をしました、それが氣にかゝつてならないので。阿片丁幾なんかは姑息手段なのだ、が、他に別に何も思ひつけなかつたし、まさかに他人の意見も訊けなかつたのだ。自分で出かけて行つて買つて來なければならなかつたやうな始末

で、實に拙いといつたらないのだ。でも、有難いことに、效能もないではなかつたやうだ。」
「何を言つてをられるのですか？　大分もう快いのです、一日二日すれば、すつかり回復するでせうよ。」
「自分はもう死にかゝつてゐる、」穩やかにユージェンは言つた、「ちよつと見直ほした位で、欺されてはいけない。死にたいと思ふから死ぬのだ。左樣いふ成行になつてゐるのだ。心臟の具合を見ても分る。二三時間すれば、萬事もう終つてしまふ。ポーゼンの王位は、君のものとなるのだよ。自分などよりは、ずつと立派にそれを占めてくれることだらう。自分が自殺をしたといふことを、先方の者に知らさないやうに。ハンズにも堅く祕密を誓はして下さい、醫者達にも祕密を誓はして下さい、して、君自身も一言も洩らさないやうに。自分は馬鹿であつたのだ、が、卑怯者でもあつたといふことを知らしたくない。卑怯であるかも知れないし、結局はまた勇氣でもあるかも知れない――快刀亂麻を斷つといふ勇氣であるかも知れないのだ。少しでも事實を暴露されたなら、自分はおめ〳〵生き長らへることは出來なかつたであらう、して、暴露は必ず來るに違ひなかつたので。散々に身を愚弄したけれど、自分はもう喜んでそれに對して支拂ふ積りだ。ポーゼン國の我々は――我々は始終拂ふのだ――負債以外のものならもう何でも。あゝ！　あの負債！　あれさへなかつたら、自分の妻となるところであつた、一緒に王位を分つ筈であつた彼女にも、ちやんと顏向けも出來たものを。自分の過去を祕して、新たにまた始められたらうに。彼女の內助を得れば、自分は實際立ち直れたに違ひない

ので。が、運命はいつもこれまで自分に逆つて來た――始終もう！　始終もう！　それは左樣と、自分に對するあの陰謀は、一體まあ何であつたのかね？　自分は忘れた、忘れた。」
彼の眼は閉ぢた。不意に物音がした。老ハンズが椅子から床へ滑り落ちたのだ。漸く身を起して、まぶしさうに四邊を見廻し、恐縮顏で窃つと部屋から出て行つてしまつた。
アリバートは甥の手を取つた。
「馬鹿なことを、ユージェン！　君は夢を見てゐるのだ。直ぐもうすつかり快くなります。確つかりするやうに。」
「何も皆、あの千萬の金のためなんだ。」病人は呻いた。「イギリスの磅に直せば、たつた百萬の端金なのだ。ポーゼン國の公債は五億だ、して、その國のプリンスである自分は、千萬も借りることが出來ないのだ。若しそれを手に入れられゝば、自分も再たどうやら頭を擡げることが出來たらうに。おさらば、アリバート……その娘は誰かね？」
アリバートは見上げた。ネラは寢臺の末端の方に默つて立つてゐた、その眼を濡らして。彼女は枕頭へ廻つて來た。して、その手を患者の心臟へ當てた。殆どもうその鼓動が感じられなかつた。して、アリバートに取つて、彼女の眼は不意の絕望を現はしてゐた。
その瞬間に、ハンズが再た部屋へ這入つて來た。して、彼女に手招ぎをした。
「ラックソール氏がホテルへお戻りのやうに伺ひました、」彼は囁いた。「して、あのジュールといふ

男をお捕へのやうに――その男は何でも大變な惡黨だといふことでございます。」

その夜のうち五六回も、ネラは父のことを訊ねたのであつた。が、どうしてもその所在を知ることが出來なかつたのだ。ところが、今朝の六時半になつて、不思議にも一つの噂が、前晩の出來事に就いて、ホテルの傭人の間に廣まつたのである。どうしてそんな噂が起つたものか、誰も決しることは出來なかつた。が、兎も角左樣いふ噂が起つたのであつた。

「父は何處にゐますの？」ネラはハンズに訊いた。

彼はその肩をすぼめた、して、上の方を指した。「何處か頂上の方に、と申すことでございます。」

ネラは殆ど部屋から駈け出した。ジユールとセオドア・ラックソールの會見の中へ彼女が飛び込んだことは、既にもう記した通りである。父と一緒に階下へ下りて來ると、彼女は再た言つた、「ブリンス・ユージエンは死にかゝつてゐます――が、貴方が彼を救へようと思ひますわ。」

「自分が？」セオドアは叫んだ。

「さうですとも、」きつぱり彼女は繰り返した、「どういふことをして頂きたいか、私これから申し上げます、で、是非それをして頂かなくては。」

第二十九回　セオドア援助を求めらる

ネラが父と一緒に頂上から階下へ降りて來ると――昇降機はまだ動いてゐなかつたので――彼女は

彼を自分の部屋へ招じて、ぴたりと扉を閉めてしまつた。

「こりやまあ一體どうしたことだい？」幾分煙にも卷かれ、娘の顏の極端に眞劍なのに驚かされさへもして、彼は訊いた。

「父さん、」娘は始めた、「貴方は大變なお金持なのでせう。さうぢやなくて？　大變に、大變にお金持なので？」如何にも氣遣はしさうに、はにかむやうに彼女は微笑つた。前に彼女の顏に、そんな表情の見えた覺えがなかつた。滑稽な返答をしたいとこだつたが、彼はそれを抑へてしまつた。

「さうだとも、」彼は言つた、「全くその通りだ。お前の年頃になつてはもう、そんなことはちやんと心得てゐべき筈だ。」

「千萬のお金を貴方が調達へるのに、どの位の時間がかゝりますかしら？」

「千萬だつて――まあ？」彼は叫んだ。この巨大な額を平氣で言つてゐるには、彼さへもすつかりびつくりしてしまつた。「一體全體、お前は何を考へてゐるのかね？」

「千萬のお金です、」彼女は言つた、「卽ち、五百萬弗なんです。それだけのお金を、どの位の時間でお調達へになれますかしら？」

「や、それは！」彼は答へた、「緊用に立廻れば一月位で。ウオール街その他を驚かさずに、一月かかればその位な金は調達へられるだらうよ。でも、それには多少の細工が要ることだらうて。」

「默目です！」彼女は叫んだ。「是非といふことになつたら、もつと早く出來ないでせうか？」

「是非といふことなら、一週間で纏められるね。でも、さうすると、自然事がぱつとなるから、そのため自分は迷惑するだらうよ。」

「貴方あの、」飽くまで彼女は主張した、「貴方あの、今朝下町へ出かけて行つて、どうかして千萬の金を調達ることは出來ないでせうか。それが若し生死の問題であるとしたら？」

彼は躊躇した。「ま、よくお聽きよ、ネラ、」彼は言つた、「袖をまくし上げて、お前がそんなに一生懸命になつてゐるのは、一體まあ何なのだい？」

「ちよつと私の質問に答へて下さいよ、父さん。そして、私がとても正眞正銘、眞赤な狂人だなどと思はないで下さい。」

「そりやロンドンでも、今朝直ぐ千萬の金を調達へられようとは思ふが、でも、そりや可成り高くつくからね。五十萬はかゝるし、ニューヨークではとんだ大番狂はせが起るかも知れない——自分の持ちの株がどれといふことなく大暴落を食ふといつた。」

「ニューヨークなんかへ、そんなこと少しも知れないぢやありませんか？」

「ニューヨークなんかへ少しも知れないつて！」彼は繰返した、「誰かゞ千萬の金を借りるとすれば、そりやもう世界中へ知れてしまふさ。自分が英蘭銀行の總裁のとこへ出かけて行つて、『ちよつと頼みます。二三週間セオドア・ラックソールに千萬だけ貸してやつて下さい。借用證書と株券を擔保にするといふ書きつけを入れるから』と、言へると思ふかね？」

「でも、手に入れられるには入れられるでせう？」彼女は再た訊いた。

「ロンドンに千萬の金があれば、そりやもうどうにか出來ると思ふよ、」彼は答へた。

「それでは、父さん、」彼女は、彼の首へその腕を絡めつけた、「ちよつと出かけて行つて、話を纏めてくれば可いんでしよ。わかつて？　私のためですから。私、これまでつひぞ、何にもほんたうに大きいことおねだりしたことないんです。でも、今度はしますわ。是非それだけなくちやならないんですから。」

彼はぢつと彼女を見た。「御褒美としてそれを上げるよ、」やがて彼は言つた、「とても素晴らしいその冷靜な態度に對しても、その位は上げなくちやなるまいから。ところで、今までの途方もない長談議の奥義ともいふべき、眞の意味は打ち明けてくれまいかね？　そりや一體何なので？」

「プリンス・ユージエンのために要るんです、」彼女は始めた、初めのうちは躊躇しながら時々間をおいて、「負債を支拂ふために千萬のお金が手に入らなければ、プリンスはもう身の破滅です。或る姫君を大變に慕つてゐられるので、このためその方と結婚出來なくなつてしまふのです。先方の親御がそれをお許しならないので。サムソン・レギーからそれを手にお入れになる筈だつたのですが、お間に合ひになかつたのです——ジユールのために。」

「それはもう、自分はすつかり知つてるよ——お前よりはずつと詳しい位に。でも、それがどうお前なり私なりに影響するのか、それがどうも腑に落ちんのだ。」

「要するに斯うなんですよ、父さん、」ネラは續けた、「自殺をしようとなすつたのです——そんなにも鬱ぎ込んでゐられるので。さうですとも、本當の自殺を、昨晩。阿片丁幾をお飲みになつたので。直ぐさま絶命といふことにはならなかつたんですけれど——今はもう峠も越してしまつたので——でも、とても甚く弱つてゐられるので、自分は死ぬ積りだとおつしやつてゐるんです。言はれる通り、本當に死ぬだらうと思ひますの。ところで、貴方が若し千萬のお金を調達へてお上げになれば、父さん、貴方はプリンスの一命を救つて上げられるのです。」

ネラの一々の報道といふものは、ラックソールに取つては莫大な、して、如何にも心を亂す驚愕であつた。が、彼はよくその感情を包んでゐた。

「自分は少しも、あの人の一命など救つて上げたくはない。元々自分は、さしてプリンス・ユージーンを尊敬してはゐないのだ。そりやこれまで、出來るだけのことはして上げた——でも、そりや唯、正々堂々たる正義の處置を見たいためと、陰謀とか暗殺とかいふことは、とても怪しからんと思つてゐるからのことだ。自殺したいといふなら、そりやまた話が違ふ。やるならおやんなさいと言ふだけのことさ。千萬といふ、どえらい借金をするなんて、そりや一體誰の責任だ？　全く唯當人とその不品行のお蔭といふものさ。あの人がひよつと往生するやうなことがあれば、ポーゼン國の王位は自然プリンス・アリバートの方へ行くだらう。それもまた結構なことさ！　一人のアリバートはあの甥の二十人位には當るからね。」

「そこなんですよ、父さん、」今こそ絶好の機會と、一生懸命に彼女は言つた、「アリバートが——プリンス・アリバートが——王位にお就きになりたくないそのために、ほんのそのために、私は貴方にプリンス・ユージエンを救つて頂きたいのです。お就きにならない方が御勝手なので。」

「お就きにならない方が勝手だつて！　下らないことを言ふものぢやない。我と自分を欺かないなら、そりやもうとても嬉しくて耐らないと、言はれるに違ひない。王位はちやんとその血に流れてゐるんだから、言はゞまあ。」

「そりや間違つてゐますよ、お父さん。して、その理由は斯うなんです——プリンス・アリバートがポーゼン國の王位にお上りになれば、是非とも姫君と結婚しなければならないので。」

「左樣かなあ！　プリンスが姫君と結婚するのは當然ぢやないか？」

「でも、左樣はなさりたくはないんです。王族としての權利をすつかり棄てゝしまつて、臣下として生活なさりたいんです。姫君でない或る女と結婚なさりたいので。」

「その人は金持かね？」

「その人のお父樣がお金持なので、」娘は言つた、「まあ、父さん！　察しられないんですか？　彼は——彼は私を愛してゐるんです。」彼女の頭はセオドアの肩へと落ちた。して、彼女は泣き出した。

百萬長者は、頗ると甲高い調子で口笛を吹いた。「ネラ！」やがて彼は言つた、「それでお前は？　お前も先づ戀々としてゐるといふのかね？」

「父さん、」彼女は答へた、「貴方感じが鈍いわ。若しさうでないとしたら、何で私がこんなに心配するものですか？」涙の中で彼女はにこりと笑つた、父の言葉の調子から、首尾よく勝利を遂げたことを知つたので。

「とても變てこな取り極めだ、」セオドアは言つた、「でも、勿論、少しでもそれが役おに立つと思ふなら、早速お前は彼方へ行つて、本當に御入用ならその千萬の金もちやんと調ふといふことを、プリンス・ユージエンにお話ししたが可いよ。相當な擔保はあることゝ思ふね、でなければ、サムソン・レギーなどが容易にそんなことへ携はる筈がないから。」

「有難う、父さん、一緒においで下さらなくてもいゝわ、私一人の方が都合が好いでせうから。」

彼女はちよつと改まつたお辭儀をして、消えてしまつた。百萬長者には非常に必要な、大小雙方を兼ねて、同時にいろ〳〵なことに氣を配る技倆を有つてゐるラックソールは、早速出かけて行つて、前晩の片腕であつたジョージ・ヘイゼル氏の朝飯と御禮のことに就いて、命令を與へた。それからまた、フエリックス・バビロンの部屋へ招待を發して、自分と一緒に朝飯を取るやう、その紳士を招いだ。バビロンに對して、ジユール捕縛の顚末を逐一物語り、ホテル監理の種々の點に就き、殊に酒庫の取締りに就いて長い談話を交はした後、ラックソールは帽子を被り、飄然とストランドの通りへ出て、辻馬車を呼んで下町へ向つて行つた。その方面に於ける彼の運動の順序竝びに性質に至つては、餘りに復雜し、專門的に亙つてゐるので、此處に書き記すことは控へることにする。

ネラが貴賓室の寢室へ戻つて來ると、主治醫も專門家も二人ともまた伺候してゐた。彼女が這入つて行くと、二人の醫者は枕頭を去つて、窓際で一緒に靜かに話し始めた。

「不思議な病症ですな！」專門家は言つた。

「さうですとも。勿論貴方が仰つしやる通り、根底には神經病的の素質が潛んでゐるので。それと、強壯な體格が互に鬪ひ合つてゐるとなると、結果はどうしても、著しく變態になり勝ちなんです。希望があるとお思ひですか、サア・チャールス？」

「意識を回復された時、自分が若し拜見したら希望もあると言つたでせう。遠慮のないところ、自分が昨晩、といふより今朝お暇した時は、プリンスは再たお生きにならうとは思つてゐなかつたのです——少し位氣がついて、話が出來るなどは別として。普通のどの順序から言つても、もう樂々と確實に、病氣の峠を越して行くべき筈なのだが、どうもさうなるやうには思へません。御自分でもまた左樣なさらうとはしないやうだ。それにまた、今に未た自殺氣分に捉はれてゐるやうにも思へる。剃刀でも持つてゐたら、早速咽喉を切るかも知れない。精々力をつけて上げなくては。必要があれば、注射も可いです。午後再た伺ひます、これから聖ジエームス宮殿へ伺候することになつてをるので。」

して、專門家は急いで出て行つた、仰山にお辭儀をし、プリンス・アリバートに對し二言三言口早に懇ろな慰めの言葉を殘して。

彼が行つてしまふと、プリンス・アリバートは、一方の醫者をちよつと小側へ招いた。「何もかも

忘れてください、」彼は言つた、「自分も一人の人間であり、貴方も一人の人間であるといふことを除いては。して、遠慮なく事實を言つてください。殿下を救ふことが出來ませうか？　事實を言つてください。」

「事實も何もないんです、」と、醫者は答へるのであつた、「將來は我々の手にないんですから。」

「でも、希望がおありなので？　何れとかはつきりどうか。」

醫者はプリンス・アリバートを見た。「ないのです！」手短かに彼は言つた、「自分にはどうも、希望はありません。患者が自分の方へついてくれない時は、何時でももう望みはないので。」

「と申すと――？」

「殿下には更に、生きようと望んでゐられないと申すので。そりやもう、貴方もお氣づきになつてゐる筈ですが。」

「氣づいてゐる位ぢやありませんとも、」アリバートは言つた。

「で、その原因も御承知なので？」

然りとアリバートは點頭いた。

「でも、それをお除きになることは出來ないので？」

「左樣です、」アリバートは言つた。袖を引く者があるやうに彼は感じた。それはネラの指であつた。控への間の方へと、ネラは身振りで麾いた。

「貴方が若しそのお積りなら、」二人差し向ひになると、彼女は言つた、「プリンス・ユージエンは救つて上げられませう。私がちやんと手配しましたから。」

「貴女が手配をしたつて？」彼は覺えず彼女の方へ乘り出た、殆どぎよつとなつて。

「彼方の御幸福に必要缺くべからざる千萬のお金といふものは、直ぐもう調ひますと、早速に申し上げて下さい、それが若し御滿足を添へるといふことなら、今日にも調ひますといふことを、申し上げて下さい。」

「でも、そりやまた一體どういふ意味で、ネラ？」

「申す通りなんですよ、アリバート、」して、彼女はその手を求めて、それをば確かと握りしめた。

「きつかり私の申す通りなので。千萬のお金がプリンス・ユージエンの一命をお救ひするといふことでしたら、御勝手にどうぞお使ひ下さるやうに。」

「でも、どういふやうにして、一體まあどういふやうにして、貴女はその手配をなすつたので？　どういふ奇術で？」

「父は。」彼女はやさしく答へた、「私の言ふことなら、何でもしてくれるんです。愚圖々々してゐてはいけません。ちやんと調つた、萬事もう差支ないと、早速にユージエンに申し上げて下さい。さあさ！」

「でも、我々はこれをお受けするわけにはいきません――斯うした莫大な、斯うしたとても有り得な

いやうな御好意は。そりや到底不可能なことなので。」
「アリバート、」彼女は口早に言つた、「ポーゼンで、宮中の接見をなすつてゐるんぢやないことを覺えてゐて下さい。貴方は今イギリスにゐるんです、そして、始終もう勝手氣儘に自分の言ふことを通してゐる、アメリカの娘に話してゐるんです。」
プリンスは、すつとその手を上げた、して、寢室へ戻つて行つた。醫者は卓子の所で、處方を書いてゐた。アリバートは枕頭へ近寄つて行つた、胸は劇しく鼓動して。微かな、疲れたやうな微笑ひで、ユージエンは彼を迎へた。
「ユージエン、」彼は囁いた、「よく聽いて下さい。お知らせすることがあるんです。友達の援助で、自分は貴方のために、あの千萬を借りるやうに手配致しました。ちやんともう話は調ひました、安心して可いので。でも、快くなつてくれなくては困ります。解りましたかね？」
ユージエンは、床の上で殆ど起き直るばかりになつた。「夢に浮かされてゐるんぢやないのかな？」彼は叫んだ。
「勿論左樣ぢやありませんとも、」アリバートは答へた。「でも、起き直つてはいけない。大事にしなくてはいけません。」
「誰が金を貸してくれるのかね？」微かな、嬉しさうな囁きでユージエンは訊いた。
「そりやどうでも可いのです、後で分ることですから。今はもう專心快方に向ふやうに。」

患者の面に於ける變化は非常であつた。彼の心意は、全く異つた樣子を帶びてゐるやうに思へた。何か食物をと吃くのを聽いて、醫者は喫驚りした。アリバートはといへば、我が思ひの動搖に壓服されてぢつと坐つてゐた。その瞬間まで彼は、多寡が金といふもの、道學者はこれを賤しめる風をし、人々はその精神を賣る、かの金錢上の利益なるものゝ價値、竝びに不思議な力に少しも氣づいてゐなかつたのだ。唯自分の身一つの力で、二人の男を絶望のどん底から希望と幸福の惠まれたる高處へ救ひ上げた、異常なあのネラに對するその賞讃で、彼の胸は殆どはち切れさうであつた。「あのアングロ・サクソンといふものは實に、」彼は獨り言つた、「何といふ立派な人種であらう！」
午後になつて、ユージエンはめきめきと快くなつた。症狀の進行で、これで三回もその首をひねつた醫者達は今、あらゆる危險はもう過ぎたと發表した。その發表の調子たるや、幸福なこの結果の全く比類なき醫術上の熟練に依ることを、それとなく仄かしたやうに、アリバートには聞えた、が、それはアリバートの誤解であつたかも知れない。兎も角、彼は非常に寛大な氣分になつてゐたもので、どんなことでももう、喜んで容したのであつた。
「ネラ、」少時して再た、控への間で二人ぎりになつてしまふと、彼は言つた、「どう貴女に言つたら可いでせうね？　どう貴女にお禮を言つたら可いでせう？　どう貴女のお父さんに御禮を言つたら可いでせう？」
「父には、別段御禮をおつしやらない方が可いのです、」彼女は言つた、「父はこのことを、貴方の商

業上の取引と見るやうな顔をするでせうから、勿論、實際さうに違ひないのですが。私はといへば、貴方あの――貴方あの――」

「どうなので？」

「私を接吻して下さい、」彼女は言つた、「それで宜しい！　貴方もう、正式に私に申し出たに相違ないのですか、私のプリンス？」

「あゝ！　ネラ！」再たもその腕を彼女に絡めて、彼は叫んだ、「私の妻となつて下さい！　自分の願望は他にはないので！」

「おつつけあの、」彼女は言つた、「父の承諾も得て下さるやうに！」

「彼方に何か故障がございませうかしら？　そんなはずはありませんよ、ネラ――貴女のことならもう――」

「お訊き下さつた方が可いのです、」彼女は優しく言つた。

瞬時すると、ラックソールその人が部屋へ這入つて來た。

「萬事好都合で？」寢室の方を指さして、ラックソールは訊ねた。

「とても好都合で、」口を揃へて戀人達は答へた、して、二人とも顔を赧めた。

「あゝ！」ラックソールは言つた、「では、左樣いふことであつて、ちよつと此方がお外せになれるなら、少し貴方にお目にかける物があるのですよ、プリンス。」

第三十回　大團圓

「いろ〳〵貴方に申し上げたいことがあるのですよ、」部屋を出てしまふなり直ぐ、ラックソールは始めた、「それにまた、唯今申し上げたやうに、少しお目にかけたい物が。私の部屋へおいで下さいませんか？　先方で先づ話すことにしませう。ホテル中もう湧き返へるやうな騒ぎなのでして。」

「そりやもう喜んで、」アリバートは言つた。

「プリンス・ユージエン殿下が追ひ〳〵御快方に向はれるのは、何とも實に喜ばしい至りで、」何は兎もこの口上を述べるのが禮儀と、ラックソールは思つた。

「あゝ！　それに就きましては――」アリバートは始めた。

「お差支なくば、そのことは後刻またお話し致すことにしませうよ、プリンス、」ラックソールは彼を遮つた。

二人は持主の居間へ這入つた。

「昨夜のことに就いて、殘らず貴方に申し上げたいのです、」ラックソールは再び始めた、「ジユールを自分が捕縛したこと、また、今朝彼を吟味したことに就いて。」して、巨細のことに至るまで逐一洩らさず、事の顚末の物語へと進んだ。「お分りでございませう、」彼は結んだ、「ボスニヤに就いての我々の疑惑は、大體先づ正しかつたのです。が、そのボスニヤに就きましては、考へれば考へる程、

あの惡政治家連を相當に處罰するやうに、何にも手は下せないやうに思ひますので。」
「で、あのジユールに就きましては、どうなさるお積りで？」
「此方へおいで下さいまし、」ラックソールは言つて、アリバートを別室へ案内した。その部屋にある長椅子が、麻の布で蔽はれてゐた。ラックソールはその布を上げた——劇的場面を見せるのが彼の得意なので——して、死人の體を露はした。
それはジユールであつた、死んではゐるが、掻き傷もなく痕もなかつた。
「警官を迎へにやりました——往來の巡査でなく、警視廳のお役人を、」ラックソールは言つた。
「どうして斯ういふことになりましたので？」喫驚仰天してアリバートは訊いた、「無事に寢室へ幽閉されてゐると仰つしやつたやうに思つてをりましたが。」
「左樣であつたのです、」ラックソールは答へた、「今日の午後、自分はその部屋に行きました、主に食物を持つて行つてやるために。小使は扉の所に番をしてをりました。彼は別段に物音も聞かず、少しも變つた樣子も見なかつたのです。ところが、自分が部屋へ這入つて行くと、ジユールはもうゐなかつたので。何かの手段で彼は縛を解き、それからまた、どうにかして衣裳簞笥の扉を外してしまつたのです。寢臺を窓の前へ持つて行き、外した衣裳簞笥の扉を窓から外へ三分の一だけ出して、その内側の方の端を寢臺の頭の方の欄干の下へ入れ、窓の外へちよつと危險な臺のやうなものを拵へたのでした。これだけのことを少しの音も立てず彼はやつたので。それから窓の外へ拔け出て、その小

さな臺の上へ立つたに違ひないのです。ホテルの屋根の下の廣い蛇腹の外端へは、指で恰度觸られる位であつたでせう。主として腕を賴りに、この蛇腹の方へと體を搖り、それから屋根へ出たのです。屋根へ上つた以上、何處でももう自由に歩けたに違ひない。ソーリズベリー小路へ面した方に鐵の避難梯がありますが、それは屋根の峰から、穴倉と同じ面にある、小さな低い中庭へずつと架つてゐるのです。首尾よくもう逃げおほせられたものと、ジユールは思つたのに違ひないので、ところが不幸にして、その鐵梯子の一つの棧がペンキの塗りが惡いために腐つてゐたのです。それが退れました、して、ジユールはさういふことは一向に期待してゐなかつたので、忽ち地面へ落ちてしまひました。これがあの惡賢い男の最期だつたので。」
ラックソールが話止むと、幾分恭しい樣子も見える身振りで、舊の通りまた麻の布を掛けた。
營てはグランド・バビロンの華であつた、トム・ジヤクソンの暗澹たる經歷の上へ、死の幕が閉ぢてしまへば、今までその冒險を描いて來た他の連中などはもう、わけなく片づいてしまふ。あの黃色い頭髪をした、大才物の惡黨の忠實な奴隸、侍女であつたスペンサー孃は、再たとその消息はなかつた。ひよつと今日までも、何處ぞ安い外國の下宿屋邊りに、同宿の者にも得體の知れぬ人物として、生き延びてゐるかも知れない。ロッコーはといへば、此方は確かに消息があつた。この出來事の五六年後に、天下一品のロッコーはブエノス・エールスへ辿り着き、その料理の腕前で或る新しい立派なホテルの金箱になつてゐるといふことが、フエリックス・バビロンの耳に達したのであつた。バビロ

ンはこの消息をラックソールへ傳へたので、ラックソールに若しその心があれば、隨分と彼に對して法律の效力を見せられたに違ひないのだ。が、ラックソールは、何れから見てもロッコーが今、正直にその職業をやつてゐるらしいので、そのまゝ放つておくことに決した。ジユールの死後ラックソールが經た一つの困難は――勿論彼も豫期してゐたことではあつたけれど――警察に關してであつた。警察は、當然なことながら、逐一事情を訊くことを要求した。抑も初めオステンドへ出向いてから、ジユールの死體を引取るやう屆け出る間に、ラックソールがデイモック事件に關係して來たことを、細大洩らさず報告して貰ひたいと望んだ。して、ラックソールはどうあつても、何もかもぶちまけてはしまひたくないのだ。明かにもう、彼はイギリスの法律を、ひよつとするとまた、ベルギーの法律を、破つてゐるに相違ないのだ、して、その行動に出るに際しての彼の動機が、精神上如何に優れてゐやうとも、法律の眼から見て、勿論さうした所行に對する辯解とは少しもならないのである。ジユールの檢屍はまた、多少の面倒を惹起した、して、殆ど九十九にも達するやうな、實にもう種々樣々な風說が湧いて來た。けれども、最後になつて、結局先づ示談といふとこまで漕ぎつけた。先方が握つてゐたその手掛りは全く當てにならないものだつたので、それを賴りに搜索することを、素氣なく彼が斷つた。警視を先づ、ラックソールは宥めようとした。それが濟んでしまふと、殘餘はぢつと耐へて、氣永にやつて行けばよかつた、非常手段こそ取つたけれど、自分は飽くまで正直な手段で行動したのだ、して、事實正義の行ひをしたのだといふことを、充分その筋の納得するやうに彼は證明し

たのであつた。それにまた、いざといふことになれば、どうでも勝手にしてくれと、それとなく極めて婉曲に仄めかした。最後に彼は、合衆國全權大使を仲介として、どうにか事體を和らげるやうにさせたのであつた。

ポーゼン國當主の回復後二週間經つての或る午後、今にまだグランド・バビロンに滯在してゐたアリバートは、百萬長者と會談したいとの意を通じた。ブリンス・ユージエンは、老ハンズと、國元から呼び寄せた宮臣達を從へ、千萬といふ大金を手にして、正式にその婚約を調へるやう、華々しく出立して行つた。その千萬に就いては、ユージエンは滿足な擔保を提供し、十五ケ年賦で支拂ふといふことになつた。

「何かお話がおありとのことでございますが、」二人その部屋へ座を占めると、ラックソールはアリバートに向つて言つた。

「他でもありませぬ、」アリバートは答へた、「ポーゼン國の王族としての一切の權利、資格を放棄して、將來はハルツ伯爵として――母方から繼承いたす爵位なのですが――世に立つ積りで自分はをりますので。それにまた、自分は年十萬の收入と、田舍の別莊を一つにポーゼン市に都の住居を一つ有つてをります。斯樣なことを申上げますのも、實は御令孃と結婚を願ふやう罷り出ましたからでございます。自分は御令孃を愛してをります、して、己惚ながら、御令孃の方でも亦自分を愛して下すつてゐるやうに信じてをります。妻となつて頂くやう、自分は既に御當人にお願ひいたしまして、その

御承諾を得てをります。二人ともぐ〳〵貴方の御承認を待つてをる次第でございまして。」
「手前共として、何とも光榮の至りでございます、」ちよつと微笑してラックソールは言つた、「で、それも一つならず、種々な意味に於て。王族の位を御放棄なさる理由がもし伺へますなら？」
「別に理由とてございませぬ、内緣の結婚といふことは、貴方がたに取つてと同樣に、自分に取つても好ましからんことである唯そのために。」
「そりや御尤もで。」
プリンスは笑つた。
「年十萬といふものは、貴方のやうな位地の御仁としては些が輕少といふことは、貴方にもお思ひつきのことと存じます。ネラはもうとても贅澤なのです。たかぐ〳〵一年に六萬弗も費して、終ひにはもう全く無一文といふ始末なのでして。そりやもう、十二ヶ月と經たないうちに、貴方を破產さしてしまふに違ひないので。」
「何れにもせよ、ネラはそのやり方を改めなければいけませぬ、」アリバートは言つた。
「當人が進んで、左樣いたすといふことでございますれば、」ラックソールは續けた、「そりや何とも結構なことで！　御承諾申し上げます。」
「彼女に代り、また自分といたしましても、厚くお禮申し上げます、」改まり返つて、アリバートは言つた。

「して、」百萬長者は續けた、「彼女が餘りに急激に改めなくても可いやうに、選り拔き、堅實な鐵道株券で、總額五千萬弗、卽ち一千萬磅といふものを、貴方の子供衆へ繼承權を添へて、絕對無條件で彼女に讓ることにいたします。それが先づ自分の財產の約半分と思ひます。これまで始終、ネラと自分とは平等に分つて參りましたので。」
アリバートは別に返事をしなかつた。二人は默つて握手した、するとそこへ、ネラがひよつくり入つて來た。
その晩、晩餐後、ラックソールとその友フエリックス・バビロンの二人は、グランド・バビロン・ホテルの露臺を一緒に歩いてゐた。
フエリックスの方から會話は始まつた。
「どうもあのラックソール、」彼は言つたのであつた、「貴方もそろ〳〵、グランド・バビロンがお飽きになつたやうで？」
「何で訊かれるので？」
「自分がそろ〳〵、ホテルなしでやつて行くことに、飽きましたからなので。貴方に賣つてから實にもう何回となく、どうかして解約いたしたいものと思ひましたやうな次第で。何もせずにゐるのは、つくぐもう厭になりました。お賣り下さいますでせうか？」
「そりや、」ラックソールは言つた、「そりや賣らない限りもないので。」

「どれだけお取りになりますか？」フエリックスは訊いた。
「自分が出しただけ、」早速の返答はこれであつた。
「えゝ、」フエリックスは叫んだ、「手前はこのホテルをジユール附き、ロッコー附き、スペンサー嬢附きで貴方にお賣りする。貴方は忽ちにして、この三人のとても貴重な雇人を失くしてしまひ、それでまた、同じ値段で、彼等なしでホテルを手前に提供なさらうといふ。そりや實に途方もないこつて。」我と自分の巧みな酒落に小男はもう心から笑つた。「それは左様として、」彼は言ひ添へた、「値段のことなどは兎や角う申しますまい。仰せ通りでもう結構。」
セオドア・ラックソールがグランド・バビロン・ホテルの食堂で、ステーキと麥酒一本を命じたに起つた、複雜極まる出來事の連鎖も、斯くして漸く終りを告げたのであつた。

グランド・バビロン・ホテル　終

小婦人

小婦人

第一回　順禮ごつこ

「贈物がないと、折角のクリスマスもクリスマスぢやありやしない、」煖爐前の敷物の上へ横になつて、ジョーはぶつぶつ言つた。

「お金のないつてこと、實にうんざりするわね！」自分の古い着物を見下しながら、メッグは溜息をついた。

「人によつては綺麗な物を澤山持ち、人によつてはまた何も持たないといふのは、公平でないと思ふわ、」怒つて鼻を鳴らして、小さなエーミは言ひ添へた。

「でも、兎も角私達、お父さんとお母さんを有つてゐ、そして、お互に姉妹を有つしゐるんだから、」その一隅から、滿足さうにベスは言つた。

爐の火の明りが照り添つてゐる四つの若い顏は、この元氣のある言葉で晴れやかになつた、が、ジョーが悲しさうに斯う言つたので、再た曇つてしまつた——

「私達、お父さんを有つちやゐないんです、そして、これから先き久くまた有つやうにはならないでせう。」「恐らく決して」とは彼女は言はなかつた、が、銘々が默つて心のうちでその句を添へたので

した、戰爭のある、遠くにゐる父の身を思つて。一分ばかりの間、誰も口をきかなかつた、すると、メッグは急に改まつた調子で言つた——

「皆知つての通り、お母さんがこのクリスマスに少しも贈物をしないと言ひ出した理由は、誰に取つてもこの冬は、隨分と辛いことになりかけてゐるからです、で、男の人達が軍隊であんなに苦しんでゐるのに、私達が遊びのためにお金を使つては濟まないと、お母さんは思つてゐるのです。私達、大した事も出來ますまいけど、それでも、相應な、小さな犧牲だけは出來ませう、そして喜んでそれをたするのが本當です。でも、私、しないだらうと思ふわ、」して、メッグはその頭を振つた。欲しいと思ふいろ〳〵な綺麗な物を、殘念さうに考へて。

「でも、私、私達の使ふ僅な物が、別に役に立たうとは思はないわ。私達、銘々一弗宛貰つてますけど、それを寄附したところで、大して軍隊の足しにもなりやしますまい。お母さんからも、貴女方からも、何にも頂かうとなど思はない、それをどうのつてことないんですけど、でも、私、自分一人で

「アンデインとシントラム」を買ひたいんです、私もう、疾うからあれが欲しかつたんですから。」書物狂だつたジョオは言つた。

「私、新しい譜に、自分のお金を使ふ積りだつたの、」煖爐と五德の外は、誰も聽かないやうな小さな溜息をしながら、ベスは言つた。

「私、フエイバアの圖畫鉛筆の、綺麗な箱を買ふことにするわ。本當に要るんですもの、」決然とエ

ーミイは言つた。
「お母さんは私達のお金に就いては、何にも言やしなかつたの、お母さんだつて、何も彼も皆廢してしまへと言ふんぢやないんです。銘々欲しい物を買つて、少しは面白くすることにしませうや、それだけのお金を貰ふには、隨分と齷齪やつたに違ひないんだから、」紳士のするやうに靴の踵を見ながら、ジョオは叫んだ。
「私こそやつてるんだわ——自宅で樂にしてゐたくて堪らないのに、殆んどもう終日、あの大變な子供達を敎へてさ、」再たしても不平だらだらの調子で、メッグは始めた。
「貴女、私の半分も辛かありやしないわ、」ジョオは言つた、「始終もう忙がしくこき使つて、つひぞ滿足するといふことはなく、此方はもう今にも窓から跳び出したくなるか、びしやりと先方の耳でも打つてやりたくなるまで、うるさく此方を攻めつける、神經質な、せつゝこましい御隱居と一緒に、何時間もぢつと籠らされてどんなものですえ？」
「焦れるなんて下らないこつたわ——でも、私、お皿を洗つたり片づけ仕事なんかするのは、何が厭つて一番厭なことだと思ふわ。そんなことをしてゐると、何だか斯う拗ねちまうわ、そして、私の手なんかもう、大變硬張つてしまつて、とても思ふやうに稽古など出來ないんですもの。」して、ベスは、今度は誰にも聽えるやうな太い嘆息をしながら、荒れたその手を見た。
「貴女達の誰も、私のやうに苦しみはしないと思ふわ、」エーミイは叫んだ、「だつても、貴女達別

に、その日の稽古をよく覺えてゐないと、甚くいぢめたり、着物を見て笑つたり、お父さんがお金持でないと、その惡口をしたり、鼻の恰好が惡いと、馬鹿にしたりするやうな、生意氣な女の子を相手に、學校へなど行かなくつても可いんですもの。」
「惡口といふ積りなら、私ちやんと左樣言ふわ、そして、お父さんが漬物の罎でもあるやうに、貼紙なんて言はないわ、」笑ひながらジョオは忠告した。
「どういふ積りか、私ちやんと分つてるわ、それを貴女が何もそのことで、皮肉的になるには當らないのよ、良い言葉を使つて、自分の單語を良くしていくのは、當然ですもの、」威嚴を以てエーミイは報いた。
「お前さん達、そんなに突つゝき合つちやいけないわよ。私達小さい時分に。お父さんがお失くなりになつた、お金があつたらと、貴女思はない、ジョオ？　まあ實に、少しも心配といふものがなかつたら、私達、どんなに幸福で、好いでせうね、」盛んな時分を思ひ出すことの出來るメッグは言つた。
「貴女この間、あのキング家の子供達より、私達の方がずつと幸福だと思ふ、お金が幾らあつても、その人達は、始終喧嘩をしたり、焦れたりばつかりしてゐるんだからと、お言ひだつたぢやないの。」
「言ひましたよ、ベス。さうね、私、實際左樣だと思ふわ、だつても、そりや私達働かなきやならないけど、自分達で勝手に面白い眞似をして、可成り愉快な輩ですもの、ジョオの言ひ草ぢやないが。」
「ジョオは實際、そんな下卑た言葉を使ふのね、」敷物の上へ長々と寢そべつてゐる姿に對し、たし

なめるやうな眼光を向けて、エイミイは注意した。ジョオは直ぐさま起き直つて、前掛の衣嚢へ兩手を入れ、口笛を吹き出した。

「およしなさいよ、ジョオ、まるで男の子のやうだわ。」

「だから、私、やるんだわ。」

「私、亂暴な、婦人らしくない女の子大嫌ひ。」

「私、妙に氣取つて、濟し返つた、こまつちやくれ娘大嫌ひ。」

「鳥はその巣で仲好くしてる。」如何にも可笑な顏をして、仲裁人のベスが歌ふと、流石兩人の甲高い聲も笑ひにと和らぎ、

「突つゝき合ひ」も茲に暫く止んだのでした。

「本當にお前さん達、二人とも惡いわよ、」姉樣らしくお談議に取り掛つて、メッグは言つた。「貴女も隨分大きくおなりなんだから、可い加減に男のやうな惡戯はやめて、お行儀を良くしなくちやいけませんよ、ジョセフイン。小さい娘の時分には、大してどうつてことはないんですけど、お前さんも既う大變に脊が高く、頭髮も上げてゐるんですから、もう立派な若い婦人だといふことを忘れてはいけませんよ。」

「婦人ぢやないわよ！　頭髮を上げてゐるために左樣なるなら、私二十歳になるまで二束にしてゐるわ、」束髮の綱を引き脱つて、栗色の毛を振り亂しながら、ジョオは叫んだ。「私、大きくなつてマ

チ孃になり、長い上衣を着て、えぞ菊のやうに、きちんとした風をしなきやならないと思ふと、厭になるわ。男の子の遊戯や、仕事や、風が好きでならないのに、女の子に生れたのは、何方みち隨分困ることね。男の子に生れて來なかつた失望に、私、どうしても打ち勝てないの、そして、今はもう一倍また困るのよ、だつても、私もう、父さんと一緒に戰爭に出かけたくて堪らないでゐるのに、家にゐて、のろ臭いお婆さんのやうに、編物でもしてゐるより外ないんだから、」してジョオは、編棒が四竹のやうにかちやかちや鳴るまでも紺の軍隊用の靴下を振り、毛絲の球は、ぽんと部屋の彼方までも跳んだのでした。

「氣の毒にね、ジョオ、そりや餘りだわ！　でも、どうしたつて仕方がないんだから、せめて貴女の名前を男の子のやうにして、私達女の子に對して、男の兄弟の眞似でもして、滿足してゐるやうにしなくちやいけないわよ、」ベスは言つた、どんなにお皿を洗つても、掃除をしても、その手觸りの荒くはなれない手で、膝のとこの振り亂した頭を突きながら。

「お前はといふと、エーミイ、」メッグは續けた、「全體に、餘り細か過ぎ、きちんとし過ぎてゐますよ。お前さんの樣子は、今こそたゞ可笑しいだけだけど、これから段々と大きくなつて、氣をつけないと、妙に氣取つた、間の抜けた女になつてしまひますよ。お前さんが殊更上品振らうとしない時は、私、お前さんの良い行儀作法や、品の好い物言ひが好きだけど、でも、お前さんの途方もない言葉といつたら、ジョオの下卑た言葉も同じに不可ないんですよ。」

「ジョオがお轉婆で、エーミイがうすのろ、私は一體何なんでせうね？」自分もお談義に與りたいと、ベスは訊いた。

「お前さんは唯可哀い子、唯それだけなの、」懇ろにメッグは答へた、して、誰もこれに否やを言ふ者はなかつた、いゝ子の「小鼠」は一家の愛物であつたのだから。

若い讀者達は定めし、一同がどんな樣子をしてゐるか、よく言ふあの「人がら」が知りたいでせうから、私はこの機會に臨んで、戸外では師走の雪が靜かに降りしきり、屋内では爐の火が賑かにぱちぱちいつてゐるうち、薄明りで編物をしながら坐つてゐる四人の姉妹の、小さな寫生を示すことに致しませう。敷物こそ色褪せ、調度も頗るとお粗末ではあるけれど、如何にも氣持の好い、古い部屋でした、佳い畫が一つ二つ壁に懸つてゐ、書物は隅々にぎつしり詰つてゐ、菊や佛相花が窓に咲いてゐ、家庭の平和の樂しい空氣が何處から何處まで行き亙つてゐたのでしたから。

四人のうちで、一番年上のマアガレットは恰度十六で、丸々と太つて色が白く、大きな眼をして、うす褐色の頭髪を不斷に有ち、可哀らしい口許と、當人もちよつと自慢な眞白な手をして、なかなかの別嬪でした。十五歳のジョオは頗る脊が高く、痩せて、日に燒けて、ちよつと仔馬を思はせました、大分に當人の邪魔になつてゐる、長いその四肢をどう始末していゝか、始終持ちあつかつてゐるやうでしたから。きつぱりとした口許と滑稽な鼻と、何でも見逃さないやうに見えてゐ、その時々に依つて激しくもなり、可笑しくもなり、また思ひに沈むやうにもなる、鋭い、灰色の眼を有つてゐま

した。その長い濃い頭髪は、彼女の唯一の美でした、けど、それは大抵、邪魔にならないやうに、ぐるぐると丸めて、網をかけてありました。丸い肩をジョオはしてゐ、大きな手と足をし、着物には如何にもだらしない風が見え、めきめき大きくなつて女になりかけ、當人はそれが嫌でならないといふ女の子の、氣持の惡さうな樣子をしてゐました。エリザベス——即ち、一同が彼女を呼んでゐるやうに、ベスは——十三の、色澤は美く、頭髪は柔かく、冴えざえした眼の女の子で、内氣の擧止に弱々しい聲、滅多にうち亂されることのない、平靜な表情をしてゐました。父は彼女を「小さな平和」と、呼んでゐました、して、その名は素晴しくよく彼女に似合つてゐました、自分特有の樂しい世界に住まつてゐて、たゞ時々思ひきつて、自分が信頼し愛してゐる、二三の人達に會ふために出かけて行くだけのやうに見えましたから。エーミイは、一番末ではありますけど、一番重要な人物でした——少くとも當人の意見では。青い眼と、縮れて肩の上へ懸つてゐる黄色い頭髪をし、色は蒼白く、痩せぎすで、ひたすら自分の行儀に意を用ひてをる若い婦人らしく始終その身を持してゐる、まつたくの雪娘でした。四人の姉妹の性格がどうであるか、それはこれから次第に分つて來るまゝにしておきませう。

時計は六時を打つた、して、先づ爐を掃いておいて、ベスは溫めるやうに、一足の上靴を立てかけました。その古靴の光景が、何やら娘達に良い效果を與へたらしいのでした、お母さんが今歸つて來るとこなので、一同皆歡迎しようと晴れやかになつたのでしたから。メッグはお談義をやめて洋燈を

つけ、エーミイは別に言はれないのに安樂椅子から出、ジョオは、疲れてゐるのも忘れて火の氣の當るとこへ近く上靴をかざさうと起き直りました。

「すつかり切れてるわね、マアミイも是非新しいのを一足買はなくては。」

「私、私のお金で買つて上げようと思つたの、」ベスは言つた。

「いゝえ、私が買ふわ！」エイミイは叫んだ。

「私が一番大きいんですから、」メッグは言ひ出した、が、ジョオは、また決然と、次のやうに遮つた——

「私、今お父さんがゐないから、この一家での男なんです。私が上靴を調へることにするわ、留守中はくれぐれもお母さんを大事にするやう、言ひつけていらつしつたんだから。」

「どうしたら可いか、言つて上げるわ、」ベスは言つた、「銘々何かクリスマスの贈物としてお母さんに買つて上げ、自分達は何にも買はないことにしませうや。」

「如何にも貴女らしい考へね！　一體何を買ひませう？」ジョオは叫んだ。

一分が程、一同眞面目に考へた、するとメッグは、我れと自分の綺麗な手を見て思ひつきでもしたやうに「私、手袋の良いのを上げるわ。」と、名乘りを上げた。

「軍隊靴、その一番上等なのを。」ジョオは叫んだ。

「手巾を幾枚か、すつかり緣の取つたのを。」ベスは言つた。

「私コロオン水の、小さな罎を買つて上げるわ、お母さんはあれが好きだし、それに餘り高くもないでせう、すれば、何かまた自分の物を買ふやうに、幾らかお金が手に殘りますから、」エーミイは言ひ添へた。

「どういふ風にして、その品物を上げたら可いでせうね？」メッグは訊いた。

「卓子の上へ置いておいて、お母さんを連れて來て、包みをあけて頂いたら可いわ。貴女覺えてゐないこれまで誕生日に始終して來たことを？」ジョオは答へた。

「自分の番が來て、王冠を被つて大きな椅子へ坐り、貴女達が皆、接吻と一緒に贈物をくれようと、行列をしてやつて來るのを見ると、私もういつまでも怖ろしくなりなりしたわ。私、品物や接吻は好きだけど、此方が包をあけてゐるうち、貴女達皆が坐つて私の方を見てゐられるのは實に堪らなかつたわ、」自分の顏もおやつのパンと一緒に、焦しさうにしてゐるベスは言つた。

「私達、自分達のために色々物を買つてゐるやうに、マアミイには思はせておいて、それから驚かしてやりませうわ。私達明日の午後、買物に出かけなくちやあね、メッグ、クリスマスの晩の芝居に就いても、澤山する事があるんだから、」背後へその手をやり、空嘯いて、あちこち勢ひよく歩きながら、ジョオは言つた。

「私、今度ぎりもう芝居はしない積りよ、段々大きくなつて、そんな事には向かなくなつて來たんですから、」「假裝」の遊戲にかけては、相變らずの子供であつたメッグは言ひ添へた。

「知つてるわ、貴女どうしたつて廢めやしないわ、頭髪を垂れ、眞白な上衣を羽織つて練りまはり、金紙の寶玉飾りを附けられる限りはもう。貴女こそ、私達の有つてる一番の女優さんよ、貴女に舞臺を退かれた日には、何も彼も、もうおしまひよ、」ジョオは言つた、「私達、今夜も稽古をしなくちやいけないわ。さあ、此方へおいでよ、エーミイ、そして、氣絶するとこの場をやつて頂戴よ、だつても貴女、その場で、火箸のやうに棒立ちに突立つてるんですもの。」

「私、どうも仕樣ないの、何人の氣絶するとこも見たことはなし、貴女のするやうにぴしやりと俯伏せに倒れて、全身青痣だらけにしたくないんです。わけなくすつと倒れられゝば、私、ずつと絶え入つてしまふわ、それが出來なければ、どつかと椅子へもたれかゝつて、見苦しくないやうにするわ、ヒユウゴオがピストルを持つて向つて來たつてかまやしない、」別段に芝居氣を有つて生れてゐるわけではないが、身體が小さくて、きいきい聲を立てながら、出し物の主人公に擔いで伴れて行かれるのに都合が好いので選び出されたエーミイは言つた。

「斯ういふ風におやりよ、貴方の手を斯う握り合せてね『ロオデリゴ！　ロオデリゴ！　助けて下さい！　助けて下さい！』つて狂氣のやうになつて叫びながら、よろよろ部屋を歩くのよ、」して、ジョオは、實際身の毛も彌立つやうな芝居風の叫び聲を上げて勢ひよくやつていつた。

エーミイは後をいつて行つた、が、自分の前へぎごちなくその手を突き出して、機械で歩きでもするやうに、すつ、すつと身を運び、叫び聲のその「おう！」は、恐怖と苦惱を見せるといふより、何

となくピンを身體へ刺されるやうでした。ジョオは仰山に絶望的の呻き聲を出し、メッグは構はず笑つてゐると、ベスは一生懸命この冗談を見てゐて、ついそのパンを焦してしまつたのでした。

「これぢや駄目だわ！　愈々といふ時には一生懸命おやんなさいよ、それで、見物が怒鳴つても、私を責めないで下さいな。さあさ、メッグ。」

それからは、萬事滯りなく進行していつた、ドン・ペドロは二頁もある臺詞を少しの淀みもなく平氣の平左でやつて退け、魔女のヘイガアは鍋に一杯の、ふつふつ煮え返る蟾蜍を前に、薄味氣惡るさうに怖ろしい呪文を唱へ、ロオデリゴは男らしくその鎖をずたずたに切り、して、ヒユウゴオは、は！　は！　は！　と物凄く笑つて、悔恨と毒藥の苦惱のうちに死んだのでしたから。

「これまでやつたうちで、一番の上出來ね、」死んだ惡黨が起きかへつてその肘を撫ると、メッグは言つた。

「貴女どうして斯んな立派な作物を書いたり、演つたり出來るのか、私解らないわよ、ジョオ。貴女まつたくのシエキスピアね！」自分の姉達が、何事に就いても不思議な天才を有つて生れてゐるものと、固く信じてゐるベスは言つた。

「さうでもないわ、」謙遜にジョオは答へた、「そりや私も『歌劇風の悲劇、魔女の呪ひ』はちよつと佳い作物と思つてるわ、でも、若しあの、パンコオの出入りする落し戸がありさへすりや、是非『マクベス』を演つてみたいのよ。私、何時でもあの、殺しの場が演りたくつてならないんです。『眼前

に見ゆるのは劒なるか？』など、名優のするのを見た通りに、その眼をぎよろつかせ、空を摑んで、ジョオは口籠つた。

「劒ぢやないの、燒きフォークよ――パンの代りにお母さんの靴が載つてゐる。ベスは芝居狂ひになつてゐるんですよ！」メッグは叫んだ、して、稽古は一同大笑ひのうちに終つた。

「お前達、こんなに賑かにしてゐて嬉しいわね。」入口のとこで元氣な聲は言つた、して、役者も見物も皆振り向いて眞に愉快な「何なと力になることならば」といつた、親切な樣子を身に浮べた、肥つた如何にもお母さんらしい婦人を迎へた、特別綺麗な人といふ次第ぢやないが、それでも、母親といふものは、何時もその子供達には美しく見えるもので、灰色の外套と時代遲れの帽子とが、そりやとても立派な婦人を包んでゐるやうに、娘達は思つたのでした。

「ところで、お前さん達、今日はまあどうおしだつたえ？　明日送り出す箱の荷造りをしたり、いろいろとすることがあつて、忙しかつたもので。私食事には歸つて來なかつたんです。誰かお客があつたかね、ベス？　お前さんの風邪はどうですえ、メッグ！　ジョオ、お前まあとても疲れた顏をしておいでね。さあさ、私を接吻しておくれよ、赤坊。」

斯うした母親らしい問ひ訊ねをしながら、マアチ夫人は濡れた物を脫つて、暖かい上靴を穿き、どつかと安樂椅子へ落着いて、エーミイを膝へ引き寄せ、忙しい一日のうちの一番樂しい時を樂まうと心構へした。娘達はまた、姉は姉、妹は妹はなりに、あたりを氣持好くしようと、一生懸命跳び

まはつてゐた。メッグは茶の卓子を調へ、ジョオは薪を持つて來たり、椅子を置いたりし、何でもその手に觸れる物を落したり、ひつくり返したり、がちやがちやいはしたりし、ベスは落着いて、また甲斐々々しく、客間と臺所の間をあちこちしてゐると、エーミイはエーミイで、手を束ねて坐つたまま、一同に向つて指圖をしてゐました。

一同卓子のぐるりへ集まると、マアチ夫人は特に樂しい顏をして言つた、「夕飯の後で、お前さん達に大御馳走があるんですよ。」晴れやかな微笑が、一條の日光のやうに素早くすつと行き亙つた。ベスは手に持つてゐる熱いビスケットにも構はず拍手をし、ジョオは「手紙よ！　手紙よ！　父樣萬歲！」と叫びながら、その拭布を拋り上げた。

「左樣ですよ、そりや長い、好いお手紙。お父さんはお丈夫で此方で心配してゐるよりかずつと樂に寒さを越せるやうに思ふと、言つていらつしやるんです。クリスマスに就いて、いろいろなお祝ひの詞を、また、貴女方へ特別の傳言を申し越されたので、」何か其處に寶物でも藏つてあるやうに、衣囊を叩いてマアチ夫人は言つた。

「さあさ、大急ぎで濟しておしまひよ。お皿を抱へて、そんなにくねくね指を曲げたり、ちびちびぎつたりして、愚圖々々おしでないよ、エイミイ、」お茶をがぶ飲みにし、早くその大御馳走にありつきたいと急ぐ餘りに、バタの附いた方を下に、敷物の上でパンを落したりしながらジョオは叫んだ。ベスはもう食べないで、窃つといつもの薄暗い一隅へ行つて坐り込み、他の者がいゝと言ふまで、

將に來らんとする愉快に就いて深く思ひ入つてゐた。

「もうお年を取つて選拔はされず、軍人になるにはお丈夫でないといふので、法敎師として出征なすたのは、私、お父さんとして如何にも立派なことと思ひますわ、」懇ろにメッグは言つた。

「私、せめて鼓手としてでも、從軍女商人——ぢやなかつた何とか言ひましたつけね？　でなければ、看護婦としてでも出征したいくらゐぢやありませんて！　お父さんの近くにゐて、手助けになるやうに、」呻き聲を立てながらジョオは叫んだ。

「天幕の中へ寢たり、何といふことなしい不味物を食べたり、ブリキの水呑みで飲むのは、さぞ厭なこつてせうね、」エイミイは嘆息した。「一體、何時お歸りなの、マアミイ？」その聲にちよつと顫へを帶ばしてベスは訊いた。

「もう幾月でもないでせうよ、御病氣でゝもなければ。出來るだけ長く戰地にゐて、忠實に仕事をなさりたいんでせうから、お身體の空かないうち、一分でも早く歸つて頂くやうになど、願つては不可ませんよ。さあ、手紙を讀んで上げますから、お聽きなさい。」

一同爐の側へ寄つた、母親はベスをその足許へ引きつけて大きな椅子へ納まり、メッグとエーミイは椅子の左右へ御輿を据ゑ、して、ジョオは、ひよつその手紙が悲壯なものであらうとも、自分が感に堪へた樣子など、誰一人氣振りにも窺ひ知れないやうな、椅子の後へと凭り掛つて。

戰時中のあの當時にあつては、手紙、殊に父親が家鄕へ送る手紙で、悲壯でないものは一つもありませんでした。今讀み聞かされるこの手紙には、能く耐へてゐる艱難、物ともせず戰つてゐる危險、また、强ひて抑へてゐる鄕愁の情に就いては、何にも殆ど言つてありませんでした、それは元氣な希望に充ちた手紙で、陣中の生活や、行軍や、軍事上の報道に就いて、活き活きした描寫に充ちてゐ、唯終りの方に當つて、故鄕にゐる小さな娘達に對する、父親らしい愛と憧憬を以て、筆者の心情が溢れてゐるばかりでした。

「彼等一同に、篤い私の愛と接吻を傳へて下さい。晝も彼等のことを思ひ、夜も彼等のために祈り、始終もう彼等の愛に、自分の最善の慰藉を見出してゐるやうに、一同に告げて下さい。彼等に會ふまでには、まだ一年も待たなければならないと思ふと、非常に長いやうに思へますが、その待つてゐるうちに、今日のこの艱難な時を徒らに浪費せぬやう、一同皆一生懸命に働くが可いと、彼等に注意して下さい。私が彼等に言つたことを、一つも必ず忘れずにゐてくれることと承知してゐます。卽ち、一同其方に對して可愛らしい子供となり、忠實にその義務を盡し、勇ましく心中の敵と戰ひ、如何にも麗しく己れに打ち克つて自分が彼等の許に戻つて行く時は、小さな自分の婦人達を自分は愈々好きになり、愈愈誇りに思ふやうになつて貰ひたいといふことを。」

其處まで來ると、誰も皆鼻を啜りました、ジョオは羞し氣もなくその鼻の先端から、ぽろりと一つ大きな涙を落しました、して、エーミイは、その縮れ毛がくしやくしやになるのも構はず、母親の肩へその顏を押しかくし、啜り泣きに泣き出しました。

「私、實に我儘者ですわ！　でも、私、本當にこれから良くなる積りです、今にお父さんが私に失望なさらないやうに。」

「一同さうしませうや！」メッグは叫んだ、「私、餘り容貌のことばかり考へて、働くのを厭がつてゐますけど、これからはもう、成りたけ左樣いふことはしない積りです。」

「私、お父さんが好んで私をお呼びになる『小さな婦人』になるやうに努めて、荒々しく、亂暴にならないやうに心懸けませう、何處ぞ他所へ行きたいとなど思はずに、此處で自分の義務を盡すやうに致しませう。」家庭にゐて、氣を平らに有つてゐることは、一人二人の逆徒に打つつかるより、ずつと難しい仕事であるやうに思ひながら、ジョオは言つた。

ベスは何にも言はず、紺の軍隊用の靴下でその涙を拭き、一刻も猶豫せず、先づ手近にある義務を果すようにと、一生懸命また編物を始め、落着いたその小さな胸のうちでは、父上が自分を見たいと希望していらつしやる、凡てであるやうに、固く心を決しました。

マチア夫人は、元氣な聲で斯う言つて、ジョオの言葉の後に來た沈默を破りました、「貴女方がまだ小さい時分、よくあの『天路歷程』を芝居にしたあの模樣を、貴女方覽えておいでかね？　私が

私の合財袋を重荷として貴女方の背中へ結へつけて上げ、帽子や、杖や、卷物の紙を持たせ、そして『滅びの都』に見立てた穴藏から、ずつと家の中を通つて、上へ上へと『天の都』を成すやうに、貴女方が蒐め得る限りの、あらゆる美しい物をおいてあつた、屋根の上まで旅をさせるのは、貴女方に取つて實にもうこの上もない愉快だつたのですよ。」

「殊にあの獅子のゐる側を通つて『奈落』の王樣と戰ひ、變化妖怪のゐる峽間を通つて行くのは、どんなにか面白かつたでせう。」ジョオは言つた。

「私、あの荷物等が落ちて、階下へ轉げ落ちるところが大好きでした」メッグは言つた。

「私の好きな箇所は、私達の花やら、東屋やら、いろいろの綺麗な物がある屋上へ出て、一同立つて陽の當るところで勇み立つて歌つた時なのです。」その樂しい瞬間が再た戻つてゞも來たやうに、微笑ひながらベスは言つた。

「私、餘り覺えてませんけど、穴藏や暗い入口が怖くてならず、屋根の上で食べたお菓子やミルクが始終好きだつたことだけは、今でもまだ心に殘つてゐます。もう大きく成つて、左樣いふことには向かないといふのでなければ、私何だかもう一遍それが演つて見たいわ。」十二といふ熟した年齢で、子供らしいことはもう廢めると言ひ出した、エーミイは言つた。

「私達、幾歲になつても、これに向かないといふことはないんですよ、お前さん、だつても、これはどういふ風にか、始終私達が始終やつてゐる芝居なんですから。私達の重荷は此處に、私達の道途は

眼の前にあるのです、善と幸福に對する憧憬は、いろいろな難儀苦勞や、過失を通つて、やがて眞の『天の都』である平和の界に私達を導く、案内者であるのです。ところで、私の小さな巡禮達、芝居としてゞはなく、本當に眞劍に、再たそれを始めるとして、お父さんがお歸りまで、何處まで行けるかやつて御覽なさいよ。」

「あらま本當に、お母さん、何處に私達の重荷があるんです？」頗ると杓子定規な若い婦人であるエーミイは訊いた。

「ベスだけは別ですけど、貴女方銘々、貴女方の重荷が何であるか、たつた今言つたばかりですよ、私どうも、あの娘には少しもないやうに思ひますね。」母親は言つた。

「いゝえ、ありますとも。私のはお皿と、雜巾と、良いピアノを持つてる人を羨ましがることゝ、他人を怖がることゝです。」

ベスの重荷が如何にも可笑しいので、皆笑ひ出したくなりました、が、誰も笑ひはしませんでした。ひどく彼女の感情を害すことになりますので。

「ぢや、やることにしませうよ。」思慮あり氣にメッグは言つた。「それや唯、善良にならうと努める別名に過ぎないんです、そして、その物語が大きに私達を助けるかも知れません、だつても、折角善良になりたいと思つても、それがなかなか難しいことなので、つい忘れて、一生懸命になれないものですから。」

「私達今晩『絶望の泥沼』へ落ち込んでゐるとこへお母さんが來て、ヘルプがあの本の中でやつてゐるやうに、私達を引き出してくれたんです。あのクリスチヤンのやうに、私達も指圖書の卷物を有つてゐなければいけませんね。それに就いてはまあ、どうしたら可いでせうね？」自分の努めを盡すといふ頗ると退屈な仕事に、ちよつとロオマンスを添へた空想に打ち興じて、ジョオは訊いた。

「クリスマスの朝、貴女方の枕の下を御覽なさい、すれば其處に、ちやんと貴女方の案内の本がありますから。」マアチ夫人は言つた。

ハンナ婆さんが食卓を片づけてゐるうち、一同新しい計畫に就いて話し合つてゐたが、やがて四つの小さな針仕事の籃が出て來、娘達がマアチ叔母さんのために敷布を拵へるので、針は飛ぶやうに動きました。如何にも面白くない針仕事でしたけれど、今夜は一人もぶつぶつ言ふ者はありませんでした。長い縫目を四つに分けて、その一つ一つを、歐羅巴、亞細亞、亞佛利加、亞米利加と呼ぶといふジョオの案が採用されました、して、さういふ風にして素敵によく運んで行きました。殊にそれぞれの部分を通して針を運んで行きながら、色々の異つた國々のことを話し合つた時。

九時に、一同仕事をやめて、例の通り床に就く前歌をうたひました。ベスを措いては、誰もあの古ピアノから大して音を出せる者はありませんでしたが、それでもあの娘だけは、古びた黃色い鍵盤へそつと手を觸れて、一同の歌ふ無造作な歌に、氣持の好い伴奏をする風がありました。メッグは笛のやうな濟んだ聲を有つてゐ、彼女と母親とで、小さな合唱團の音頭を取りました。エーミイは蟋蟀の

やうに陽氣に歌ひました、して、ジョオは、可愛らしいその我流で、ずつと調子の中を泳ぎ廻り、飛んだ見當違ひのとこで、妙な聲の捩れ、また顫へを洩らすので、この上なしといふ沈んだ調べをも、始終もうだいなしにするのでした。

クリンクル・クリンクル・イートル、タア！

と、やつと舌たるい口調で歌へる時分から、姉妹はもう始終これをやつて來たのです、して、それが立派に一家の習慣となつてしまひました、母はもう天禀の歌手であつたのでしたから。朝始めて聞く音といつたら、雲雀のやうに歌つて家中あちこちする母の聲であつたのでした、親しいあの子守歌を歌ふに、つひぞ娘達は年を取り過ぎるといふことはないのでしたから。

第二回　樂しいクリスマス

ジョオは、クリスマスの朝の灰色の曉に、一番先きへ目を覺ました。見ると、一つの靴下も爐に懸つてゐなかつたので、ちよつと瞬時の間、ずつと前、自分の小さな靴下が一杯にお菓子の詰つてゐたために、下へ落ちた時も同じに、大變に失望しました。すると、彼女はお母さんの約束を思ひ出し、その手を枕の下へやつて、小さな眞紅な表紙の本を引き出しました。彼女はもうよくその本を知つて

ゐました、それこそあの、これまで送られた最善の生涯の、麗しい昔の物語であつたのですから、して、ジョオは長い旅路を行く巡禮に取つて、これこそ眞の案内の書であるやうに思ひました「クリスマスお目出度う」と言ひながら、彼女はメッグをおこし、枕の下にある物を見るやうに言ひました。草色の表紙の本が、書中にも同じ繪が附いて現はれました、して、母上の手で二言三言書き添へてあつたのでそのためこのたつた一つの贈物が、二人の眼には大變に貴い物になりました。やがて、ベスとエーミイもまた、眼を覺まして、手さぐりに二つの小さい本を探しますと、一つは鳩色のと、一つはまた水色のが出て來まして、一同起き直つて、その本を見、本のことを話し合つてゐるうちに、東の空はさし昇る朝日に眞紅になりました。

つまらない見榮こそあれ、マアガレットは可愛らしい、殊勝な性質を有つてゐまして、それが知らず識らず妹達、殊にジョオを感化しましたが、ジョオの方ではまた、もう大變に彼女を愛し、姉の忠告が如何にもやさしく與へられるので、よくその言ふことを聽きました。

「お前さん達」自分のそばの、横になつてゐる頭から、向うの部屋にゐる、二つの小さな寢衣帽を被つた方のを見ながら、改まり返つてメッグは言つた、「お母さんは、私達にこの本を讀み、またそれを愛し、またそれを心に懸けてゐて欲しいのです、で、私達直ぐさま始めなければなりません。私達先にはさういふことにはなかなか忠實だつたのですけれど、お父さんが出征なすつてしまひ、いろいろこの戰爭の取り込みで落着かなくなつてからといふものは、私達今まで、いろいろのことを怠つ

てゐるのです。貴女方好きにして可いんですけれど、私、自分の本を此處の卓子の上へ置いて、毎朝起きると直ぐ、少うしづゝ讀むことにしますわ、必ずもう自分の利益になり、一日中自分の力になるに違ひないんですから。」

そこで、彼女はその新しい本を開いて讀み始めました。ジョオはその腕を彼女に搦め、頰と頰とを擦り寄せて、一緒に讀みました、いつも落着かない彼女の顏に、滅多に見られないやうな靜かな表情を浮べて。

「何てまあ、メッグは感心なんでせう！　さあさ、エイミイ、私達も姉さん達のやうにしませうや難しい言葉があれば、私、貴女を加勢して上げませうし、私達で解らないことは、姉さん達が說明してくれませうから。」綺麗な本と姉達の出したお手本に非常に感心して、ベスは囁いた。

「私の水色なのは嬉しいわ。」エーミイは言つた、すると部屋はもう非常に靜かになつて、頁々はそつと繰られ、冬の日光は、お目出度い今日の日の挨拶を以て、晴れやかな頭と眞面目な顏に觸れるやうに入つて來ました。

「お母さんは何處においでだね？」メッグは訊いた、半時間ばかり後に、贈物のお禮を言ふやう、ジョオと二人で、大急ぎで階下へ降りて來て。

「分りませんで。貧乏人が無心に來ましたもので、お母さんは直ぐ、何が要るのか見に、お出かけになつてしめえました。食物やら、着物やら、焚き物やらをお施しになる、こんな女の方つて、今まで

とてもありませんな」メッグが生れてこの方、ずつと一家と一緒に住つてゐ、召使といふより、懇意の者のやうに一同から思はれてゐたハンナは答へた。

「直き歸つておいでせうよ。それまでにお前、お菓子を拵へたり、いろいろの物を支度しておいておくれよ」籠の中へ一つに集められ、可い時分に取出されるやう長椅子の下へ置いてあつた、贈物を見渡しながら、メッグは言つた。「あらま、エーミイの、コロン水の罎は何處へ行つたの？」小さな罎が見えないので、彼女は言ひ添へた。

「一分ばかり前に、彼の女がそれを持ち出して、リボンを附けるとか何とか、何かそんなやうな考へで、大急ぎで出かけて行つたんです。」新しい軍隊用の上靴の、穿きたてのぎごちなさを取らうと、あちこち部屋を踊り廻りながら、ジョオは答へた。

「私の手巾つたらまあ、何て佳いんでせう？　ハンナが洗つて、火熨斗をかけてくれたんです、そして私が自分で皆標をつけたんです」大變に手のかかつた、幾らか斯うむらになつた文字を、さも得意さうに見ながらベスは言つた。

「あらまあ、彼の女M. Marchでなくつて、Mother と入れちやつたんだわね、何てまあ可笑しいんでせう！」その一つを取り上げながら、ジョオは叫んだ。

「それが本當ぢやなくつて？　私、左樣する方が可いやうに思つたんです、だつても、メッグの頭文字もM. M.だしマアミイの外、誰にもこれ使つて貰ひたくないんですもの、」困つたやうな顏をして、

ベスは言つた。
「一向差支へありませんとも、お前さん、大變に好い思ひつきです、それに、どうして氣が利いてもゐますよ、誰も最う間違ひつこはありませんから。そりやもう大變に、お母さんの氣に入るに違ひないんです、」ジョオに對しては怖い顏をし、ベスに對しては笑顏をつくつてメッグは言つた。
「ほらお母さんだわ、籠をお匿しよ、早くさ！」びしやりと扉が締り、跫音が玄關へすると、ジョオは叫んだ。
エーミイは急いで這入つて來て、姉達が皆自分を待つてゐるのを見て、ちよつと羞恥むやうな顏をしました。
「何處へ行つておいでだい、そして肩後へ何を匿しておいでなの？」その頭巾と外套とで、無精なエーミイがそんなに早く外出をしたのを知つて、驚いて、メッグは訊いた。
「私を笑はないでおくれよ、ジョオ、私、その時になるまで誰にも知らさない積りだつたんです。私唯、小さな罎を大きいのと換へに行つたんです、取り換へて貰ふのに、私が自分のお金皆出しちやつたんです、私もうこれからは、本當に自分勝手でないやうにする積りなの。」
左樣言ひながら、エイミイは前の安いのと取り換へて來た、綺麗な罎を出して見せ、飽くまで身を忘れようといふ、可愛らしいその努力の餘り、如何にも眞劍に、殊勝氣に見えたので、メッグは卽座に彼女を抱き締め、ジョオは「立派な人」と彼女を言ふと、ベスは窓へ駈け寄つて、素晴らしいその

罎を飾るために、自分の一番綺麗な薔薇を摘んで來ました。
「分つたでせう、今朝御本を讀んで、お互に良くなるやう話しあつた後で、私、自分の贈物が恥しくなつてしまつたんです、それで、私、起きると直ぐ、大急ぎであの角を曲つて、これに取り換へて來たんです、私實に嬉しくつてならない、今は私のが一番綺麗なんですから。」
往來の扉がもう一度びしやりと音がしたので、大急ぎで長椅子の下へ籠はやられ、早速朝飯に取りかゝらうと、娘達は食卓へうち寄つた。
「お目出度う、マアミイ！　お目出度う、お目出度う、もう幾度でも！　御本を有難う、もう少うし讀みましたし、毎日また讀む積りです、」一齊に彼等は叫んだ。
「お目出度う、小さな娘達！　早速讀んでおくれなのは、私、何とも嬉しく思ひます、そのまゝずつと讀んで貰ひたいもので。が、こゝに一同席に着く前に、私、一言言ひたいことがあります。此處から遠くない處に、生れたばかりの乳飲子を抱へて、貧しい女が產褥に就いてゐます。六人の幼兒が凍えないやうにと、無理やり一つの寢臺へ押し込められてゐます、少しも爐の火がないもので。先方では、何一つ食べる物がないんです、そして、一番年上の男の子が私の處へやつて來て、餓ゑと寒さで困つてゐると訴へたのです。どうですえ、お前達、クリスマスの贈物としてこの朝飯を彼の人達に遣つておくれでないかね？」
一時間近く待つたので、一同皆いつになくお腹が空いてゐました、して、一分ばかりの間は、誰も

何とも言ひませんでした。が、それも唯一分間でした、ジョオが急きこんで次のやうに叫んだのでしたから——

「私達、始めない前に、お母さんがおいでになつたのは實に嬉しいわ。」

「私、出かけて行つて、可哀さうな子供達へ、いろいろな物を運んで行く、手助けをさしていたゞけない？」熱心にベスは言つた。

「私あの、乳酪と輕燒煎餅を持つて行きますから、」自分が一番好きな御馳走をいさましくも思ひ切つて、エイミイは言ひ添へた。

メッグはもう、蕎麥粉のお菓子へ蔽ひの布を掛け、大きなお皿へパンを積み重ねてゐました。

「左樣しておくれだらうと思つてゐました、」如何にも滿足したやうに微笑ひながらマアチ夫人は言つた、「貴女方みんな行つて、私を手傳つて下さい、そして、歸つて來たらパンとミルクを朝飯に食べて、晝餐はその補償をすることにしませう。」

一同間もなく用意が出來、行列は出かけて行つた。幸ひとまだ早かつたのに、裏町を通つて行つたので、誰も殆ど彼等を見る者がなく、一人もその可笑しな一行を笑ふ者がありませんでした。

見すぼらしい、がら空きの、眼も當てられない部屋でした、窓は壞れてゐ、爐の火はなく、寢道具はぼろぼろに切れて、母親は病んでゐ、赤ん坊は泣いて、色蒼白めた、餓じさうな子供の一團が、寒くないやうにと、一生懸命一枚の古蒲團の中へくるまつてゐるといふ體たらくで。娘達が這入つて

行くと、どんなにか大きな眼がぎよつとなり、どんなにか紫色の脣が微笑つたことでせう！

「あらま、實に！　おいでになつたのは、天の使ひだわよ！」嬉し泣きに泣きながら、貧しい女は叫んだ。

「頭巾と手袋を穿めた、可笑しな天の使よ。」ジョオは言つた、して、一同を笑はした。

二三分すると、親切な神樣達が其處で働いてゐるやうに、實際見えました。薪を運んで來たハンナは、爐の火を焚きつけ、古帽子や自分のショオルで、壞れた窓硝子を塞ぎました。マアチ夫人は母親にお茶と粥を與へ、自分の子供でゞもあるやうにやさしく、赤ん坊に着物を著せながら、これからまた力になるからと約束し、母親を慰めた。そのうち、娘達は、御馳走を擔げて、爐のぐるりへ子供達を据ゑ、それだけの頭數の飢ゑた小鳥でゝもあるやうに、彼等を養つてやりました、笑つたり、話したり、可笑しな片言雜りの英語を解さうと努めて。

「こりや良い！」「子供の天の使だ！」食べながら可哀想な子供達は叫んで、氣持の好い爐の火の焰に紫色のその手を溫めた。娘達は、これまでつひぞ子供の天の使と呼ばれたことがなかつたので、非常に快く思ひました、生れてこのかたずつと始終、「サンチョオ」と思はれてゐたヂョオはまた別して。自分達が、少しもそれを口にしたのではないけれど、それは實に樂しい朝飯でした、して、慰籍を後へ殘して、一同其處を立ち去つた時、廣いこの市中に、自分達の朝飯も施してしまひ、クリスマスの朝といふのに、パンとミルクで滿足した。お腹の空いた小さな娘達ほど、愉快な人達はなか

つたらうと思ふのです。
「こりや全く、自分達よりも餘計に隣人を愛すことになるんですわ、だから、私、斯ういふこと大好き、」母親が二階へ行つて、貧しいハンメル家の者のために着物を取り揃へてゐるうち、一同その贈物を出すと、メッグは斯う言つた。
其處へ並べたところは、別に大して素晴らしくはないが、その僅な小さな包みの中へ込めた、愛といふものは大變なものでした、して、眞中に立つてゐる、白菊と蔦かづらをあしらつた紅い薔薇の高い花瓶こそは、卓子に對してすつかり品の好い容子を添へました。
「お母様がおいでゝすよ！　さあさ、始めたり、ベス！　扉をお開けよ、エーミイ。マアミイ萬歳、萬々歳！」と跳び廻りながらジョオが叫ぶと、そのうちメッグは、母を上席へ据ゑようと案内に出かけていつた。
ベスはその一番華かな行進曲を奏し、エーミイはさつと扉を開け、メッグはまた、堂々と介添の役目を果しました。マアチ夫人は、驚きもし、また感動もしました、して、一々その贈物を檢めました、して、それについてゐる小さな言葉書きを讀んで、眼へ一杯涙を溜めて微笑ひました。上靴は早速に穿かれ、新しい手巾はエーミイのコロオン水を振りかけてその衣嚢へ入れられ、薔薇はその胸へ挿され、結構な手袋は、もう「きつかりよく合ふ」と申渡されました。
大變に笑つたり、接吻したり、無雜作な、愛らしい風で說明があつたり、一時はもう大騒ぎでした

が、それこそ實に斯うした家庭のお祝ひを、その時も非常に樂しくし、ずつと後に憶ひ出しても實に樂しくするものなのです、して、それが濟むと、一同また今までの仕事に就きました。
午前の慈善やら式やらで、大分の時間を取つたので、その日の殘りといふものは全く晩のお祝ひの用意に當てられました。まだ子供なので、さう度々芝居へも行かず、内々の試演に對して、大した費用をかける程のお金もないので、娘達は頻りにその智慧を働かせました、して、必要こそ發明の母なりで、何によらず入用の物を拵へました。その製作物のうちには、隨分器用なのがありました、板紙の六絃琴や、古風なバタ入れを拵へ、それへ銀紙を被せた古いランプ、漬物の製造場から持つて來たブリキのびかびか物で光つてゐる、古木綿のきらびやかな衣裳、ブリキの鑵詰の蓋を切つて開けた際薄板になつて殘つてゐた、同じ調法な、金剛石形の小片がいつぱいついてゐる鎧などがそれでした。道具類はいつも滅茶苦茶に列べ立てられ、大きなその部屋は、いろいろの無邪氣な餘興の場となりました。
男の人は一人も仲間に入れられませんでした、それ故、ジョオはもう心ゆく限り男性の役を演じ、或る役者を知つてゐる婦人を知つてゐる友達から彼女に贈つた、一足の無地革の靴に非常に滿足してゐました。この靴に、古い仕合太刀と、或る畫家が繪の寫生の材料に使つた開口の胴衣とが、ジョオの主な寶物で、それが何の折にもよく現はれました。一座の人數が少いので、二人の座頭格が銘々五つ六つの役をしなければなりませんでした、して、その二人は確かに、三四の違つた役柄を覺え、大

急ぎでいろいろの衣装を著たり脱いだりし、その他にまた舞臺監督までもするといふ、骨の折れる仕事に對して手腕のあることを示しました。これは確かに記憶力に對しても絶好の訓練であり、無害の娯樂でもあり、さもなくば空に過してしまふとか、淋しく暮してしまふとか、また、それ程の有益でない仲間と一緒に過してしまふとかいふ多くの時間を、如何にも有益に使つたのでした。

クリスマスの晩には、一等棧敷である寢臺の上へ重なるやうに乘つかつた、十人ばかりの女の子が、如何にも待遠さうに、水色と黃色の更紗木綿の幕の前へ坐つてゐました。幕の蔭では大變にがさがさいつたり、ひそ〳〵話し聲がしたり、少々洋燈の油煙が立つたり、その時々の興に乘つて、兎角興奮的になり勝ちなエーミイが、くす〳〵笑ひ聲を洩らしたりしました。やがて鈴が鳴り、幕がさつと左右に開いて、こゝに愈々歌劇張りの悲劇が始まりました。

番附にある所謂「暗い森」は、鉢植の二三本の灌木と、床の上の草色の羅紗と、遠くに見えてゐる洞窟で現はされてゐました。その洞窟は衣桁掛を屋根にし、簞笥を壁にして拵へてあり、その中に盛んに燃え立つてゐる小さな爐があつて、其處に黑い鍋が懸つてゐ、もの凄い魔使女の婆さんがその上へ乘し懸つてゐました。臺臺が眞暗なので、爐の輝きは非常によく引き立ちました、殊にまた、その魔使女が鍋の蓋を取つて、本物の湯氣が鍋から出ると、一層また引き立ちました。これに先づ慄つとするのですが、それが鎭まるやうにと、瞬時間がおかれ、それを待つて、惡者のヒユウゴオは腰にがちやがちやいふ劍を携へ、帽子眞深に顏を匿し、黑い頰髯を生やし、、怪しげな外套を羽織り、長靴

を穿いて、大威張りで登場する。大分に周章てふためいてあちこち歩いた後、つとその額を打つ突けると、急に荒々しい調子で歌ひ出し、ロオデリゴに對するその憎惡、ゼイラに對するその愛と、一方を殺して一方を手に入れようといふ、心地好いその決心を述べ立てる。感に堪へると、折々その叫び聲をあげるヒコウゴオの聲の皺枯れた調子が、如何にも深い感銘を與へるので、彼がちよつと息をつかうと言葉を止めるその瞬間に、見物は盛んに喝采しました。舞臺での喝采には始終もう慣れてゐるといふ容子で、ちよつと輕く辭儀をして、彼はそつと洞窟の方に忍び寄り、「おいおい！　下郎め！御用ぢやぞ！」と、一聲漂々しいヘイガアの出場を命じた。

勢ひよくメッグは出て來た、鬘の灰色の馬の毛を顏のあたりに垂れ、赤と黑との着物と、杖と、その外套に神祕な模樣をつけて。ヒユウゴオは、ゼイラが自分を慕ふやうになる靈藥と、ロオデリゴを殺す靈藥とを要求する。ヘイガアは綺麗な劇的の節廻しで雙方を約束し、進んで惚れ藥を持つて來る精を呼び起した——

こちらへ、こちらへ、お前のお家から、
幻しの妖精よ、私はお前に來よと命じる！
薔薇から生れ、露で養はれて、
呪ひ藥や毒の藥をお前は醸造へられるのか？

此處へ、私のとこへ持て來てくれ、魔の速さで、
私が入用な、香り高い惚れ藥をば。
甘く、强く、利き目の速いやうに調合してくれ。
精よ、いざ私の歌に答へてよ！

靜かな樂の音が響いて來た、すると、洞窟の後へ、雲のやうな白衣を着け、きら〳〵する羽翼と、金色の頭髮をし、頭には、薔薇の花環を戴いてゐる小さな姿が現はれた。魔杖を振つて、それは歌つた——

こちらへ私は來ました、
幻しの私の家から、
遙か遠く、銀色の月の中なる！
奇しき呪ひ藥を取りてよ、
おゝ、うまくそれを用ひてたもれ！
さもなくば、その力直ぐにも失せうほどに——

して、魔使女の足許へ小さな金着せの壜を落して、その精は消えてしまつた。ヘイガアがもう一度歌ふと、また別の幻影が出て來たが、今度はさう美しいのではなかつた、ぼんと音がすると、醜い黑い鬼が現はれて、陰氣な聲で答へを述べてから、ヒユウゴオに向つて眞黑な醜い壜を投げつけ、嘲るやうに哄笑つて、消え失せてしまつた。感謝の辭を歌ひ、靈藥を靴の中へおし匿して、ヒユウゴオは退場した、して、ヘイガアは見物に向つて、過ぎし頃、彼奴は二三自分の友達を殺したことがあるので、自分は今まで彼奴を呪つてゐたのだ、して、彼奴の計畫の邪魔をし、彼奴に復讐する積りであると告げる。そこで幕が降り、見物は休息をして、芝居の得失を論じあひながら糖菓を食べた。

幕がまた上る前に、槌の音が大分に續いたが、大仕掛の立派な道具立てがしつらへられたことが明かになると、誰一人として幕間の長いのをぶつぶつ言ふ者はなかつた。そりや本當に素敵だつた！

塔が高く天井までも聳え、中程のとこに窓が見えてゐて、洋燈が一つ點いてゐ、白い窓掛けの後に水色と銀の衣裳でゼイラが現はれ、ロオデリゴを待つてゐた。きらびやかな服裝で彼はやつて來た、羽毛飾りのついた帽子を被り、眞赤な外套を羽織り、栗色の愛嬌髮を垂れ、六絃琴を携へ、して勿論長靴を穿いて。塔の麓へ跪いて、溶けるやうな調子で、彼は窓下夜曲を歌つた。ゼイラは、これに答へ、歌で對話があつてから、一緒に逃げることを承知する。すると、愈々その芝居の大見世場になつた。ロオデリゴは五つの段のついてゐる繩梯子を出して、その片方の端を投げて、降りるやうにゼイラを麾いだ。恐る恐る彼女はその出格子から忍び出で、ロオデリゴの肩へその手をかけて、も少し

で美ん事飛び降りかけようとするその途端に、「嗚呼！　ゼイラのために嗚呼！」彼女は長いその裾を忘れたのである――それが窓へ引っ掛り、塔はよろけて前の方へ傾ぎ、ぴしやりと音がして倒れ、不幸な戀人達を廢址のうちに埋めてしまつた！

無地革の長靴が亂暴にも廢址の中から搖れて見え、「私、さう言つたんだに！」と叫びながら金色の頭がによきつと出ると、滿場一齊にきやつといふ叫び聲を立てました。不思議なくらゐ落着き腐つて、殘酷な父親のドン・ペドロが駈けつけて來、娘を引き出し、早口で獨言のやうに言つた――

「笑はないで、笑はないで、何事もなかつたやうに演つておくれよ！」して、起てとロオデリゴに命じて、激怒と侮蔑を以て、我が領土から彼を追放してしまつた。塔が自分の上へ倒れて來たので、確かに驚いたには違ひないが、ロオデリゴは老人などは物とも思はず、なか〳〵出て行きさうにもしなかつた。この大膽な模範に、ゼイラも勢ひを得、彼女も亦、父を何とも思はなかつたが、老人は忽ち兩人を、城内でも一番と深い土牢へ投じるやうに命じた。肥つた、小さな家來が鎖を持つてやつて來て、きよと〳〵大分に斯う驚いたやうな顏をし、てつきり自分が言ふべき筈の臺詞を忘れたらしい容子で、二人を伴れて行つてしまつた。

三幕目は城内の大廣間であつた、して、此處へヘイガアは現はれたが、戀人達を牢から救ひ出し、ヒユウゴオを片づけてしまふためにやつて來たのだ。彼が來る氣はひのするのを聞きつけて、ヘイガ

アはつと匿れてしまひ、そつと物蔭から窺つて、二つの杯へ彼は靈藥を入れ、氣の小さい小男の僕に、「これを牢屋の中の二人の囚人のとこへ持つて行き、程なく俺も行くからと言ふてくれ、」と命じるのを見る。僕はヒユオゴオを小側へ呼んで何か耳打ちする、その間へイガアは、全く無害な別の二つの杯と、前の杯を摸り換へてしまふ。「下郎」のフアデイナンドはそれを持つて行つてしまひ、ヘイガアはロオデリゴに向ける積りの毒藥の入つてゐる杯を、もとの通り其處へ置いておく。ヒユウゴオは、長いこと歌つた後で咽喉が乾いて來、それを飲んで忽ち氣を失ひ、大分に空をひつ掻いたり、地團駄踏んだりしてから、仰向けに倒れて死んでしまふ、するとヘイガアは、何とも言ひやうのない、力の籠つた美しい節廻しの歌で、自分がしたことを彼に言ひ渡す。

これは本當に、手に汗握るやうな場面だつた、人によつては、長い頭髪がどさりと急に澤山倒れ落ちたのが、惡黨の死に際の見世場の邪魔になつたと、考へる者もあつたかも知れないけれど。彼は幕前へ呼ばれた、して、如何にも禮儀を正して、その唱歌こそ今夜の芝居殘らずを一緒にしたよりも立派に思はれてゐた、立女優ヘイガアの手を取つて、彼は現はれた。

第四幕目はゼイラが自分を捨てゝしまつたといふので失望してゐるロオデリゴが、將に自害せんとする場面であつた。劍がその胸へ當てられた恰度その時に、美しい歌が窓の下に聞えて、ゼイラの心に變りはない、が、今その身に危險が迫つてゐる、其方にもしその志があるなら救ふことも出來る由を告げた。鍵が牢屋の中へ投げ込まれ、それで扉が開いて、嬉しさの餘り、彼は一力味してその

鐵鎖をもぎり捨て、我が戀の姫君を救ひに、大急ぎで駈けて行く。

第五幕目は、ゼイラとドン・ペドロとの激しい口論の場で始まる。ペドロは娘に尼寺へ入つて欲しいといふ、が、娘はなか〳〵それを聽き入れない、して、いぢらしい愁訴の後で、も少しで絶え入らうとする所へ、いきなりロオデリゴが這入つて來て、彼女との結婚を要求する。ドン・ペドロは、相手に金がないといふので、それを斷る。雙方怖ろしく聲を立てたり、物眞似をしたりするが、どうしても折り合ふことが出來ない、して、ロオデリゴが今將に疲れきつたゼイラを抱き擁へて去らうとする所へ、例の氣の小さい僕が、不思議にその姿を匿したヘイガアからの手紙と袋を携へて登場する。ヘイガアは到底數へ切れないほどの富を若夫婦に讓る、二人を幸福にしないなら、ドン・ペドロに怖ろしい運命をかづけると、關係者一同に告げて來たのだ。袋が開かれると、何升といふブリキのお金が臺の上へ雨と降り落ち、舞臺はもうきら〳〵光つて、その綺麗なといつたらない。これで全く「嚴格な父親」の心も和らぎ、何等の苦情もなく彼は承諾し、一同うち揃つて喜びに充ちた合唱を歌ひ、戀人達はドン・ペドロの祝福を受けるやう、この上なし浪漫的優雅の態度で、跪くところで幕が降りる。

騷々しい喝采が續いたが、それがまた思はぬ障害を受けた、その上へ一等棧敷を設けてあつた疊み寢床が、びしやりと急に閉つてしまつて、美事折角熱心な見物を絶滅してしまつたので。ロオデリゴとドン・ペドロが飛び出して來て一同を助け、一人殘らず怪我もなく引出された、大勢の者は可笑

しさに笑ひこけて、口もきけない位であつたが。その興奮が鎭まらないうちに、ハンナ婆さんが現はれて、「マアチ夫人から宜しく、皆樣どうかお食事においでを、」と傳へて來た。

これは實に意外であつた、役者達に取つてさへも。して、食卓を見ると、一同はもう夢かと吃驚して、互ひに顏を見合せた。そりや成る程一同のために、ちよつとした御馳走を設けるのは、「マアミイらしい」やり方ぢやある、が、斯んなにも立派なのは往日の不足のない時代からといふもの、殆どもうないことである。アイスクリームがあり——而も桃色と白との二種類といふのが——お菓子があり、果物があり、氣もうつとりするやうな佛蘭西風のボンボンがあり、食卓の眞中には、溫室の花で出來た四つの大きな花束があつた！

一同はまるで呆氣に取られてしまつた、彼等は先づ食卓の方を見、それから母の方を見たが、その女はまた、もう大變にそれを面白がつてゐるやうであつた。

「こりやまあ、魔神の仕業でせうかしら？」エーミイは訊いた。

「サンタ・クロオスですよ。」ベスは言つた。

「お母さんがして下さつたんだわ。」してメッグは、その白髯と白い眉毛にも似氣なく、この上なし可愛らしい微笑を見せた。

「マアチ叔母さんが殊勝に思ひ立つて、この夕飯を贈つて下すつたんだわ。」急に思ひついてジョオは叫んだ。

「皆違つてます、ロオレンス老人が贈つて下すつたの。」マアチ夫人は答へた。
「あのロオレンスの男の子の祖父さんが！　一體まあ、どうして斯んなことを思ひついたんでせうね？　私達、あの人知りやしません、」メッグは叫んだ。
「ハンナが先方の召使の一人に、貴女方の朝飯のことを言つたんですよ、あの人妙な老紳士ですけれど、でも、それが大變に氣に入つたんです。あの人は何年か前に私のお父さんを知つてゐたんです、そして、今日の午後鄭重な手紙を私に寄越して、今日のお祝ひとして、二三詰らぬ品をお贈りして、貴女のお子供衆に對するその友情を表はすことを許して頂きたいと、言つて來たのでした。私もそれを斷るわけにいきませんでした、そんなわけで先づパンと牛乳の朝飯の補償に、晩はちよつとした御馳走に貴女方もありついたといふものです。」
「あの男の子が祖父さんに吹き込んだんですわ、もうそれに違ひない！　あの男の子つたら實に素敵ね、私達知り合ひになれると可いんだけど。何だか先方でも此方を知りたいやうな顏をしてるわ、でも、あの子が羞恥んでゐるし、メッグがまた馬鹿にお澄しをするもので、通りすがつても、私、あの子に話しかけられないんですもの、」御馳走のお皿が廻り、「おゝ！」やら「あゝ！」やらの滿足の掛聲につれて、氷が溶けて見えなくなり出すと、ジョオは言つた。
「あのお隣りの、大きな家に住んでゐる人達をお言ひなのでせう、左樣ぢやなくつて？」お客の娘達の一人が訊いた。「私のお母さんはロオレンス老人を知つてゐますが、何でも大變に横柄で、近所の

人達と一緒になるのを嫌つてゐると言つてゐますよ。家庭教師の先生と一緒に遠乘りをするか、散歩をしない時は、あのお孫さんを家へ閉ぢ込めて、そりやもうひどく勉强させるんです。私達、我家の催しにあの子を招んだんですけれど、來ませんでした。つひぞ私達女の子に口をきいたことありませんけど、大變に好い子供だつて、お母さんは言つてゐますよ。」
「我家の猫が一度逃げ出して、あの子が連れて來てくれたんです、そして球戯や何やらのことで、二人垣根越しに話をして、素敵に具合よく親しくなりかけると、其處へメッグがやつて來たのを見たもので、行つてしまつたんです。私、いつかあの子を知る積りよ、だつても、あの人面白いことがなく困つてるんですから、屹度もう左樣に違ひないんです。」斷然とジョオは言つた。
「私、あの子の態度が好きなんです、ちよつと斯う小紳士といつた顏してますね、ですから、適當な機會が來れば、貴女方あの子を知るのに、一向異存はありませんとも。あの子が自分でこの花を持つて來てくれたんです、二階で何をやつてゐたか、ちやんと私が知つてゐたら、請じ入れたかも知れないんです。歸りがけに、如何にも殘り惜しさうな容子をしてゐました、面白さうな騷ぎを聞いて、自分の方には、てつきり左樣いふことが少しもないので。」
「そりや惜しかつたわね、お母さん、」自分の靴を見ながらジョオは笑つた。「でも、私達、いつか再た別の芝居をしませうや、あの子がちやんと見られるやうに。ひよつと芝居を手傳つてくれるかも知れないわ、さぞまあ愉快でせうね！」

「私、これまでつひぞ花環つてもの持つたことがないんです、何てまあ綺麗なんでせう。」して、メッグは非常な興味を以てその花を熟視した。

「實に綺麗ね、でも、ベスの薔薇の方が私には美い香ひなの、」腰に挾んだ、半ば萎みかけた花束を嗅ぎながら、マアチ夫人は言つた。

ベスは母親の側へすり寄つて、優しく囁いた、「私、この自分の花束を、お父さんのとこへ贈つて上げられゝばと思ひますの。お父さんは私達のやうに、斯んな樂しいクリスマスはしていらつしやらないだらうと思ひますわ。」

第三回　ロオレンス少年

「ジョオ！　ジョオ！　何處においでなんだね？」屋根裏の梯子段の下で、メッグは叫んだ。

「此處にゐるわ、」一つの皺枯れ聲が階上から答へた、して、メッグが駈け上つて行くと、妹は今日當りの好い窓際の、三本脚の長椅子の上で、毛の襟卷へくるまつて、林檎を食べたり、「レッドクリフの嗣子」を前に泣いたりしてゐるところでした。これはジョオの氣に入りの隱れ家だつたので、その靜寂を樂しみ、直ぐ側に住んでゐて、これつぱかりも自分を何とも思つてゐない、可愛らしい一匹の鼠と一緒に暮すために、六個ばかりの冬林檎と、好い本を持つて此處へ隱れるのが、何よりも好いのでした。メッグの姿が見えると、鼠のスクラブルは、急いでひよいとその穴へ這入つてしまつ

た。ジョオはその頰から涙を振り落し、何事かと待つてゐた。

「實に面白いんだよ！　可いからまあ御覽よ！　ガアデイナア夫人から、明晩の會へ、正式の招待狀なのよ！」貴いその紙を打ち振りながらメッグは叫び、それから、如何にも娘らしい喜悅を以て、それを讀みに取りにかゝつた。

「『ガアデイナア夫人は元旦前夜に催される小舞踏會に、マアチ孃竝にジョセフイン孃の御來臨を得候はゞ何よりの幸ひと存じ候』マアミイも、私達に行つて可いと言ふんです、さあ、一體何を著て行つたら可いでせうね？」

「そんなこと訊いたつて仕方がないぢやないの、私達何にも他に持つちやゐないんだから、例もの絹入羅紗を著るより外ないつてこと分つてる癖に、」口へ一杯頰張つて、ジョオは答へた。

「絹衣があれば可いんですけど！」メッグは嘆息した、「お母さんは言つてゐるんです、十八になつたら買つて上げても可いつて、大抵。でも、待つとなると、二年も末代のやうに思へるんで。」

「私達の絹入羅紗衣でも結構絹衣に見えるに違ひないわ、あれでもう澤山だわ。貴女のは新しいのも同じだけど、私、つい自分のに燒け焦しと、かぎ裂きのあるのを忘れてゐたの、まあ、どうしたら可いでせうね？　あの燒け焦しが馬鹿に目立つので私、誰とも踊るわけにはいかないわ。」

「貴女、一生懸命ぢつと坐つて、背中を見せないやうにしてゐなくちやいけないわ、前面の方は差支へないけど。私、頭髪へ新しいリボンをかけるの、そして、マアミイが眞珠の小さな留針を貸してく

れるでせう、新しい上靴も大變に綺麗だし、手袋もまあ間に合ふんです、本當に氣に入つてはゐないけど。」

「私のはレモン水で汚れてしまつてゐるの、でも、新しいのを買ふわけにもいかないから、嵌めずに行かなきやなりませんよ、」着物のことに就てはつひぞ餘り心を勞したことのないジョオは言つた。

「手袋は是非持たなきやあいけないわよ、でなきや、私行かないから、」きつぱりと、メッグは叫んだ。「手袋は何よりも一番大切です、それがなきや貴女踊れやしません、貴女が踊らなきや、私實に困つてしまふわ。」

「ぢや、私ぢいつとしてゐるわ、私、他人と一緒に踊るの餘り好かないの、すうつと乘して歩いたつて面白かないわ、私、飛び廻つたりするのが大好き。」

「貴女、新しいのをお母さんに强請るわけにはいかないのね、なかなかお安くもないし、貴女はまたひどく亂暴なんだから。貴女が彼方のを汚した時、お母さんは言つたでせう、この冬はもう買つて上げられないつて。どうにか嵌められないかしら？」心配さうにメッグは訊いた。

「私、くるくる丸めて、手へ持つてゐるのなら出來るわ、左樣すれば、誰も汚れてゐるのに氣がつきやしますまい、左樣するより仕方がないわ。あゝ、そりやいけない！　どうしたら可いか言つて上げるわ――銘々が好い方のを一つ嵌めて、惡い方のを持つてゐることにしたら、分つたでせう？」

「貴女の手は、私のよりはずつと大きいんで、ひどくもう私の手袋を延してしまふでせうよ、」手袋

といふものが自分に取つて一つの弱點であるメッグは言ひ出した。

「ぢや、私、嵌めないで行くわ。他人が何と言はうと私構はないの。」本を取り上げながらジョオは叫んだ。

「嵌めても可いわ、可いわよ！　唯、それを汚さないやうに、それから、行儀を良くして下さいよ、兩手を肩後へやつたり、きよときよと見たり、『あらまあ！』なんて仰山に言はないで下さいよ、よござんすか？」

「私のこと心配しないでおくれよ、私、御馳走のお皿のやうにきちんとして、出來ればもう、何にも失策をやらないやうにしますから。さあ、早く行つて、手紙の返事をお出しなさいよ、そして、私にこの素敵に面白い話を讀み終へさして下さいよ。」

そこでメッグは往つて、「有難く御受致し候」の返事を書き、着物を一通り出して見、自分のたつた一つの本物のレエスの皺飾を附けながら陽氣に歌をうたつてゐたが、そのうちジョオは自分の本と林檎を片づけてしまひ、鼠のスクラップルと一緒に、一廻り跳ねまはりました。

元日前夜には、居間はもうがら空きでした、二人の妹は衣裳つけの役を務め、二人の姉達はまた、所謂「夜會の身支度を調べる」といふ、至極大切な用事に夢中してゐたのでしたから。お化粧は至極無雜作でしたが、大變にあちこち駈けまはつたり、笑つたり、話したりし、一時はまた、家中もう焦げた頭髪の强い臭だらけでした。メッグが顏のあたりへ少うしばかり縮れ毛を拵へたいといふので、

ジョオが熱い二本の金火箸で、紙へ包んだ頭髪へ、鏝をかけようとしたのでした。
「そんなに燻らなきやいけないんですかね？」寢床の上へ、ちよこなんと坐つてゐるベスは訊いた。
「濕り氣が乾くのよ。」ジョオは答へた。
「何てまあ妙な臭いでせう！　まるで羽毛が燃えるやうね、」超然とした容子で、自分の綺麗な縮れ毛を撫でながらエーミイは言つた。
「ほら、さあ、これからこの紙を取ると、小さな縮れ毛が雲のやうに現れるから、」火箸を下へ置きながらジョオは言つた。
言つた通り紙を取つたが、縮れ毛の雲などは少しも現はれない、頭髪は紙と一緒に落ちて來て、それに吃驚した理髪師は、自分の犧牲のメッグの前の簞笥の上へと、焦げた小さな頭髪の束を列べたのでしたから。
「あらま、あらま！　貴女一體何をしたの？　私、臺なしになつちまつたわ！　私行かれないわ！　私の頭髪つたら、まあ、私の髪の毛つたら！」自分の額の不揃ひな捲毛をば、失望を以て見ながら泣き出しさうにメッグは言つた。
「私、いつでもこの通りよ！　貴女そんなことを私に頼まなければ可かつたに、私何時でも、何でも皆臺なしにしちまうんです。とても濟ないことしたわね、でも、火箸が燒け過ぎてゐたもんで、つい滅茶をやつてしまつたの、」後悔の涙を以て眞黑な煎餅を見ながら、可哀想なジョオは呻いた。

「別に臺なしになつちやゐないわよ、ちよつとそれを縮らして、先端が少し額のとこへ來るやうにリボンをおかけなさいよ、すれば、ついこの頃流行のやうに見えるでせうから。若い女達が大勢、さういふ風にしてるのを私見たんですから。」慰めるやうにエーミイは言つた。
「無理に立派にならうとした、當然の罰だわよ。頭髪なんか、自然のまゝに抛つておけば可かつたものを。」焦れつたさうにメッグは叫んだ。
「私もさう思ふわ、そりや實に柔かで、綺麗だつたんですもの。でも、直き再た延びませうから。」毛を剪られた羊を接吻し、慰めにと寄り添つて來ながら、ベスは言つた。
いろいろまた輕い失策の後、メッグの支度は到頭出來上つた、して、一家協力の骨折りでジョオの髪も結へ、着更へも出來ました。二人はその質素な着つけで非常によく見えました、メッグは銀色がかつた、薄い褐色の着物に、水色天鵞絨の鉢卷とレエスの襞と眞珠の留針をつけ、ジョオは海老茶色の着物を着て、硬い紳士のやうな麻の襟と、さつぱりと一二輪の菊の花だけを飾りにつけました。二人とも片方の好い方の薄色の手袋を嵌め片方の汚れたのを手に持ちましたが、一同皆全體の容子が、
「ちつとも氣取つてゐないで、如何にも好い」といふことでした。メッグの踵の高い上靴は、恐ろしくそれが硬いので、當人が口へ出してそれを言ひこそせざれ、大變に痛みました、して、ジョオの十九本の髪針も、皆眞直ぐに頭へ挿つてゐて、どうも氣持が好いとは言はれなかつたのでした、でもまあ、綺麗になれなきや死んだが増しですからね。

「折角面白くお遊びよ、お前さん達、」姉妹がしやなしやな氣取つて散策路を練つて行くと、マアチ夫人は言つた、「御馳走を食べ過ぎてはいけませんよ、そして、十一時にお歸んなさいよ、その刻限にハンナを迎へにやりますから。」門がびしやりと二人の後へ閉ると、一つの聲が窓から叫んだ——

「お前さん達、お前さん達！　二人ともちやんと好い手巾を持ちましたかね？」

「えゝ、えゝ、とても好いのを、それにメッグはそれへコロオン水を振りかけたんです、」とジョオは叫んだが、二人歩きながらちよつと笑つて、また言ひ添へたのでした、「地震で私達みんなが駈け出して行くんでも、マアミイは屹度手巾のことを訊いたらうと思ふわ。」

「そりやお母さんの貴族的の趣味の一つよ、してまた、それが本當よ、本物の貴婦人は綺麗な靴と、手袋と、手巾でいつも分るんですから、」自分は自分でまた、いろいろと小さな貴族的の趣味を有つてゐるメッグは答へた。

「ところで、あの燒け焦げの穴を見えないやうにすることを、忘れないで頂戴よ、ジョオ、私の鉢捲はちやんとなつてませう、私の頭髪は、甚く醜いでせう？」良久らく眺めた後で、ガアデイナア夫人の化粧室の鏡から向き直つて、メッグは言つた。

「屹度忘れるわ。私、何かいけないことをしたら、目配せして、ちよつと知らして頂戴よ、よござんすか？」一引きぐいと襟を引いて、頭髪へ大急ぎでブラシをかけながら、ジョオは答へた。

「いゝえ、目配せするのは貴婦人らしくないんです、私、何かいけないことがあつたら眉毛を上げまし

すし、すつかり可くいつてゐたら、點頭することにしますわ。さあ、貴女の肩を眞直ぐに張つて、小股で歩いて御覽なさい、そして、誰に紹介されても握手をしないやうに、握手するのは本當ぢやないんですから。」

「貴女一體どういふ風にして、そんなにいろいろの作法をお習ひになつたの？　私などとても覺えられやしません。あの音樂、まあ華やかぢやないの？」

少うし斯う氣遲れがしながら、二人は降りて行つた、夜會へなどは、たまにしきや來たことがないのに、今晩のこの小さな集りは別に表立つたものぢやないけれど、二人に取つてはもう、立派な一つの出來事であつたのですから。堂々たる老貴婦人のガアデイナア夫人は、親切に二人に挨拶して、六人の令嬢のうちの一番年上のに引き渡した。メッグはよくサリイを知つてゐて、直ぐもう打ち解けてしまひました、が、女の子や、女らしい雜談を餘り好かないジョオは、氣をつけて背中を壁の方へ向けるやうにして、あちらこちらへ立つてゐたが、花園の中の仔馬ほどにもそぐはないやうに感じました。六人ばかりの快活な若者が、部屋の向うの方で、氷滑の話をしてゐました、して彼女は、もう其處へ行つて、一緒になりたくてなりませんでした、氷滑りはジョオの大好きな物の一つでしたから。早速その由をメッグに電信をかけると、眉毛は如何にも吃驚したやうに上つたので、彼女はどうも出かけて行く氣になれませんでした、誰も來て、自分に話す者はなく、自分の側の一團も、一人々々段々と減つて行つて、やがて自分一人になつてしまひました。方々勝手にうろつき廻つて、樂しむわ

けにもいきませんでした、燒焦げの穴が直ぐ見えるのですから。そんなわけで、ちよつと斯う捨てられたやうに淋しさうに、他人の顏ばかり見てゐますと、やがて舞踏が始まりました。メッグは早速に相手に望まれ、硬い上靴は、それを穿いてゐる者が微笑ひなが苦んでゐる苦痛の程をば、誰一人察しなかつた位まで、如何にも快活に、ぴよいぴよい跳び廻つたのでした。ジョオは、大きな赤毛い頭髪をした青年が、彼女のゐる一隅へ近寄つて來るのを見て、こりや自分を相手に選ぶ積りぢやないかと思ひ、時々覗いて見ては、靜かに獨り樂しむ積りで、帷帳の下りてゐる隱れ場所へ、するつと這入つてしまひました。ところが、不幸にも、も一人の羞恥家が、その同じ隱れ家を選んでゐたのでした。帷帳が自分の後へ下りると、ジョオは眼の當りに「ロオレンス少年」とぶつかつたのでしたから。

「まあ、私、誰も此處にゐるとは知りませんでした！」跳んで入つたと同じやうに早く、後退りして出て行かうと身構へしてジョオは口籠つた。

が、男の子は笑つて、少うし吃驚した容子であつたが、氣持好く斯う言つた——

「僕に構はないで下さい、貴女が可いなら此處にいらつしやいよ。」

「お邪魔にならなくつて？」

「もう少しも、僕、餘り人を知らないので、初めのうちは、ちよつと落着かなかつたもんで、此處へ來たゞけなんですよ。」

「私もさうですわ。往らつしやらないで下さいよ、どうぞ、その方が御勝手でなければ。」

男の子は再た腰をおろし、下を向いて自分の靴を見てゐたが、やがて、ジョオは最も懇ろに、打ち解けるやうにと努めて言つた——

「私、前に貴方にお目に懸つたことがありますやうね。貴方、私達の近所にお住ひでせう、左樣ぢやなくつて？」

「お隣りです。」して、彼は顏を上げて、出し抜けに笑つた、自分が猫を送り屆けた時に、球戲のことを二人話し合つたことを憶ひ出すと、ジョオの取り澄した態度が如何にも可笑しいのでした。それでジョオも打ち解けてしまつた、して、その一番快活な風で斯う言ひながら、自分も亦笑つたのでした——

「貴方の結構なクリスマスの贈物で、私達、本當に面白い思ひしましたわ。」

「祖父さんが贈つたんです。」

「でも、貴方がそれを吹き込んだのでせう、左樣ぢやなくつて？」

「貴女の猫、別に變りはありませんか、マアチ孃？」男の子は訊いた、黑いその眼といつたらもう、調戲ひたさうにぎよろぎよろ光つてゐるのに、精々眞面目に見えるやうと努めて。

「丈夫ですわ、難有う、ロオレンス氏、でも、私、マアチ孃ぢやないの、唯のジョオなんですわ。」若い婦人は答へた。

「僕、ロオレンス氏ぢやないんです、唯のロオリイなんです。」

「ロオリイ・ロオレンス、何て妙な名でせう。」
「僕の洗禮名はセオドアなんです、でも、僕はそれが嫌ひなんです、友達が皆僕をドラと言ふから。それで僕は、その代りに、ロオリイと言はせてるんです。」
「私も自分の名が大嫌ひ――如何にも女々しいので？　誰にもジョセフインといはずに、ジョオといつて貰ひたいんです。どういふ風にして貴方お友達に、ドラと呼ばせないやうにしたの？」
「僕、皆を打つてやつたんです。」
「僕、マアチ叔母さんを打つわけにはいきませんわ、ですからまあ、耐へなければなりますまいと思ふの、」して、ジョオはちよねと溜息をして納つてしまつた。
「貴女踊りたくなくつて、ミス・ジョオ？」ロオリイは訊いた、その名が如何にも似合つてゐると思つたやうな容子をして。
「踊る場席がずつと廣くつて、銘々皆活潑にしてゐるなら、私、隨分好きなんですけど、斯んなやうな場所では、私吃度何かを倒したり、他人の爪先を踏んだり、何か大變な失策をしたりするに違ひないんです、それで私、そんな間違ひから遠ざかつて、メッグに獨り花を持たしおくんです。貴方お踊りにならない？」
「時に依ると。ほら何でせう、僕、何年か外國へ行つてゐたでせう、それで、まだ幾らも此方にゐないもので、何に依らずどういふ風にするのか知らないんです。」

「外國へ！」ジョオは叫んだ、「まあ、そのお話して下さいよ！　私、人樣が旅行の話をするのを聞くのがもう大好き。」
ロオリは、何處から始めて好いか分らないやうだつた、が、ジョオの熱心な問ひに誘はれて、直ぐもう差支へなく彼はやり出した、して彼は、ヴエヴエーで學校で行つてゐたこと――其處では生徒が決して帽子を被らず、湖水にはもう實に澤山の短艇を有ち、休日の遊びには、先生と一緒に、瑞西を方方徒歩旅行に出かけることなどを話した。
「本當に左樣いふ處へ行つたら、まあ！」ジョオは叫んだ、「巴里へも行らしつて？」
「僕達、あすこでこの前の冬を過したんです。」
「貴方、佛蘭西語が話せて？」
「僕達、ヴエヴエーでは、何にも他の國語を話してはならなかつたんです。」
「何か言つて頂戴よ。私、佛蘭西語は讀めるんですけど、發音が出來ないんです。」
「コンマン、サツペエル、セット、ジユス、ドモアゼエル、アヴエック、レ、ジョリイ、ベントウフル？」相手の言ふなりにロオリイは言つた。
「本當にお上手なこと！　えゝ、斯うつと――貴方、斯う言つたんでせう、『綺麗な上靴を穿いてゐる、若い婦人は誰です？』つて、左樣ぢやなくつて！」
「左樣、貴孃。」

「ありや、私の姉のマアガレットです、左様つてこと、貴方御存じだつたんでせう！　あの女、綺麗だとお思ひになる？」

「えゝ、何だか獨逸の女を憶ひ出しますね、如何にも活き活きとして、落着いた様子で、貴婦人のやうに踊つてるんですもの。」

自分の姉に對する子供らしいこの褒め言葉で、嬉しさにジョオはほと〳〵上氣してしまつた、してそれをメッグへ繰り返すやう、大切に頭腦にしまつておいた。二人とも覗いたり、批評したり、喋つたりして、まるで古いお馴染のやうに親しくなりました。ロオリイの羞恥も、間もなく取れていきました、ジョオの紳士のやうな擧動が彼を興がらせ、彼を打ち解けさしたのでしたから、して、ジョオもまた、もとの元氣な自分に返りました、着物のことはすつかり忘れてしまひ、誰も自分に向つて眉毛を向ける者はないのでしたから。もう非常に、「ロオレンス少年」が好きになつてしまひ、我家へ歸つて姉妹達にその容子を話せるやうにと、五六度もしみじみと彼の方を見たのでした、一人も男の兄弟はなし、男の從兄弟は殆どなく、男の子といふものは、彼女達に取つて、殆ども全く知られない人間であつたのでしたから。

「縮れた黑い頭髮、褐色の皮膚、黑い大きな眼、長い鼻に綺麗な齒、手足は小さく、脊は私位、男の子としてはなか〳〵丁寧で、して、大體快活なんです。一體まあ、幾歳なんでせう？」

それを訊かうと、もう口の端まで出かゝつたのだつた。が、可い具合に間に合ふやうに、ジョオは

それを抑へてしまつた、してそれはとても竝外れた手際で、遠廻しに探り出さうとした。

「貴方直きに大學へおいでなさるでせうね？　貴方、せつせと貴方の御本をおやりのやうですが——いえ、あの、一生懸命御勉强のやうですが、」してジョオは覺えず、ついその口を洩れた、あの恐ろしい「せつせとやる」といふ言葉に赤面した。

ロオリイは微笑つた、が、別にひどく驚いた容子もなかつた、して、すつと肩をすぼめて答へたのでした——

「二三年はまだ何方にしても、十七にならないうちは行かないでせうよ。」

「貴方まさか、たつた十五ぢやないんでせうね？」既にもう十七だと思つてゐた、脊の高い若者を見ながら、ジョオは訊いた。

「十六なんで、來月恰度。」

「私本當に、大學へ行きたくてなりませんわ、貴方何だか、餘りそれをお好きにならないやうね。」

「僕大嫌ひです、ぎし〳〵詰めに馬鹿に勉强するか、でなきや、馬鹿に巫山戯るか、その外にはもう何にもしないんですから、で、僕はこの亞米利加で、學生連が何方をやる風も好かないんです。」

「ぢや、どういふのがお好き？」

「伊太利へ往つて勝手に樂しむのが好きなんです。」

その勝手といふのは、一體どういふ風なのか、ジョオは大變にそれを訊きたく思つた、が、ずつと

眉根を寄せた時、それが如何にも物騒に見えたので、足で拍子を取りながら、早速に話題を變へてしまつた、ありや、素敵なポルカですわね、貴方、何で行つてあれをおやりにならないんです？」と言つて。

「貴女も一緒に來て下されば、」妙な佛蘭西式の辭儀をしながら、彼は答へた。

「私、行かれませんわ、だつても、どうしても行かないつて、メッグに言つたんですもの、何故つてば――」そこでジョオははたと止めてしまつた、して、言はうか笑はうかと、どつちとも結着しない顏をしたのでした。

「何故つてば何なんです？」根掘り葉掘りロオリイは訊いた。

「貴方分らない？」

「とても！」

「左樣ね、私火の前へ立つ惡い癖があるんです、そして、よく私の通衣を焦すんですが、これへもつい燒けつ焦げを拵へてしまつたんです、そして、上手に繕つてはありますけど、どうしても見えるので、誰も見ないやうに、ぢつと靜かにしてゐろと、メッグに言ひつかつたんですから。貴方、笑ひたければ笑つても可いわ、そりや可笑しいに違ひないんですから。」

が、ロオリイは笑はなかつた、一分ばかりの間、たゞ下を見てゐたゞけだつたが、その顏の表情をジョオが讀み兼ねて當惑つてゐると、極く穩かに彼は言ひました。

「そんなこと、氣にしないが可いんです、僕、どうにかやれる方法を言つて上げませうよ、向うに長い廊下がありますが、あすこで二人立派に踊れますよ、で、誰も見る者はありますまい。どうぞいらつしやいよ。」

ジョオは彼に謝して、喜んで出かけて行つた、相手が嵌めてゐる、好い、眞珠色の手袋を見た時、自分も二つ揃つて綺麗なのがあれば可いと思ひながら。廊下は空虛だつた、して、二人は立派にポルカを踊りました、ロオリイが上手に踊り、獨逸風の足踏みを敎へてくれたのでしたから。身體を搖つたり、跳んだりすることが多いので、その足踏みがまた、大變にジョオの氣に入りました。音樂が止むと、二人は息をつくやう、梯子段へ腰を下しました、してロオリイのハイデルベルヒの學生の祝祭の話が恰度酣になつて來た恰度その所へ、ひよつくり妹を探しにメッグが現はれました。目顏で彼女を招いた、して、ジョオが厭々その後をついて側の部屋へ這入ると、メッグが方の足をおさへて長椅子の上へ腰かけ、蒼白になつてゐるのでした。

「私、踝を挫いたんです。あの間の拔けた高い踵がひつくり返つて、ひどくねぢれたもので。其處が大變に痛むので、私、立つてゐること出來ないんです、それに、どうしてまあ我家へ歸つたら可いか分らないんです。」痛いので左右へ身體を搖つて彼女は言つた。

「あんな下らない物を穿いたら、私、屹度もう足を痛めるだらうと思つてたんです。お氣の毒ね、でも、馬車を深すか、終夜中此處にゐるかにでもしなければ、どうして可いか、私にも分らないわ。」

ジョオは答へた、左様言ひながらも、そをつと可哀想な踝を撫でさすつて。
「馬車を呼べば、そりやもう大變にお金を取られるに極つてるわ、それに、とても一臺も探せないだらうと思ふの、大抵の人がお抱へでやつて來てゐるし、馬車屋へは遠し、誰も使にやる人がないんですから。」
「私が行くわ。」
「まあ、飛んだこと、もう十時過ぎだし、埃及のやうに眞つ暗なんですから。このまゝ此處へ泊ることも出來ないんです、家はもう一杯なんですから、サリイのお友達で泊つてる人も幾人かあるんですつて。私、ハンナが來るまで休んでゐるわ、そして、彼女が來たら、精々可いことを考へることにするわ。」
「私、ロオリイに賴んで見ませう、屹度行つてくれますから、」ジョオは言つた、ふとその考へが浮んだので、ほつとした容子をして。
「後生だから、廢して頂戴よ！　誰にも賴まないで下さい、また、言はないで下さい。私の護謨靴を持つて來て下さいよ、そして、この上靴を、私達の物と一緒にして置いて下さいな。私、もう踊れないわ、でも、立食が濟むなり直ぐ、ハンナが來るか氣をつけて見てゐて下さい、そして來たら直ぐ言つて下さいよ。」
「皆もう立食に出かけるやうね。私、貴方と一緒にゐるわ、その方が勝手なの。」

「そりやいけないわよ、お前さん、大急ぎで行つて、私に珈琲を持つて來て下さいよ。私、もう大變に疲れちやつて、動けないんですから。」
そこでメッグは、上手に護謨靴を匿して凭り掛つてゐた、して、ジョオはあたふたと、食堂の方へ駈け出して行つたが、間違つて陶器室へ入つたり、ガアデイナア老人が獨りで夕食を取つてゐる部屋の扉を開けたりし、大間誤つきに間誤ついてから、やつとのことで先方へ辿り着いたのでした。思ひ切つて食卓へ頸を突つ込み、珈琲を手に入れると、忽ちそれをこぼしてしまひ、それでまた着物の前面までも、背面と同じに臺なしにしてしまひました。
「まあ！　何てそゝつかし屋なんでせう！」ジョオは叫んだ、メッグの手袋で上衣を擦つたので、それを滅茶滅茶にしてしまつて。
「僕では間に合ひませんかね？」親切な聲は言つた、して、其處にロオリイがゐた、一方の手に波々とついだ珈琲茶碗を持ち、一方の手に氷菓子の小皿を持つて。
「私、メッグが大變に疲れてゐるんで、何か持つて行つて上げようとしてゐたんです。すると、誰かが私を搖つたもので、この通りうまい風をして、此處にゐるんですの、」ジョオは答へた、汚れた女袴から珈琲に染みた手袋の方へと、悲しさうに眼を遣りながら。
「お氣の毒ですな！　僕今、これを何方にか上げようと、探してゐたところなんです、貴女の姉様のとこへ持つて行つて上げてもよござんすか？」